

---

# ステラ・マリス

霧友 亮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ステラ・マリス

### 【Nコード】

N4461W

### 【作者名】

霧友 亮

### 【あらすじ】

遙か未来。地上を去り、天上の星々を駆けた人類は、再び地球へと還っていた。

いま、人類は海底に在る。

未知の力を秘めた鉱石　フェルマントを奪い合う海底国家群。その戦乱の最中には、超高速での肉弾戦闘を行う『ドールフィン・ナイト機甲兵』と呼ばれる人型兵器の姿が在った。

これは、蒼い髪を持つ一兵卒と、彼の親友が紡いだ、世界を変えない物語。

最終話まで投稿予約を行いました。10月1日15:00に完結予定です。

## プロローグ

深海の闇では星も雨も見ることはないが、雪だけは例外だ。マリンスノーと呼ばれる、肉眼で観察可能な海中懸濁物である。

球状、彗星状、糸状、平板状など様々な形をした海中の雪が、静かに海中へと降り積もっていく。どこか非現実感を伴ったそれは、何度見ても呆けたような微笑みを呼び覚ます。

「綺麗だな……」

全周囲スクリーンから周囲の神秘的な光景を目の当たりにして、イワブチ大尉は思わず感嘆の吐息を漏らした。見果てぬ天から振る幻想の白雪。生命を拒む残酷な漆黒に紛れたそれは、戦場などという無粋な場所にあつて、場違いな美しさで煌めく。

一つ息を吐いてモニタの表示を切り替えた。母艦のセンサーのリンクを切り、自ら搭乗する兵器 『機甲兵<sup>ドルフィン</sup>』の視界へ。

薄暗い球形のコクピットの、ほぼ全周を覆うモニタ群。操縦に必要なインタフェースが見当たらないその空間には、忘れられたように小さな箱が一つ。白を基調とした軍服の懐から端末を取り出し、手馴れた手付きで小箱のスロットに挿し込む。認証 本人と確認。微かな機械音と共に過去の起動データが呼び出され、機体を再設定。薄暗かった機内が、途端に視界を埋め尽くす光に覆われていく。

起動シークエンスを開始。

出力制御、関節稼働値、操縦予測補助機能を再設定。

余計な物思いを振り落とすように、軽く頭を振った。圧縮休眠ポッドでの回復が足りなかったのか。頬を叩こうとするが、硬い感触すでにヘルメットをかぶっていたことに気付く。苦笑い。

【Welcome Lieutenant Iwabuchi】

プロジェクト  
フロッピーディスク  
コントロール

歓迎の表示とともに非物質型操作盤が出現する。搭乗口閉鎖、非常設備の確認を手動で行い、しかる後にヘルメットを機体に連結。脳波と機体リンクしたことを示す、ほのかな燐光が操作盤を浮か

び上がらせる。

発艦シークエンスへ移行。

視界は良好。係員の振るコンダクト・バーの指示に沿って、発射孔へ。戦艦の機内と孔をつなぐ扉が閉じられ、外と同じ濃度・圧力に調節された海水が流れ込む。この闘いで四度目の出撃。耐圧装置フェルマント・ドライヴを駆動。深海での高速戦闘を可能にし、また戦争の火種でもある、天使にして悪魔たる魔性の燐光が機体を包む。

「デルタ1、発艦準備完了」

「こちら管制塔。デルタ1、発艦を許可します。　「ご武運を」

掛けられた言葉に僅かに頬を緩める。簡潔を旨とする管制において、余計な一言は厳密には軍規違反だが、その一言がささくれた心に染み入った。

グローブに包まれた両手を握り直す。意識を集中。

発射孔が開く。深淵の闇の中に、蒼い燐光が蛍のように舞っているのがモニター越しに視認された。微かな機械音と共に、スラストーが滑り出す。放たれた矢となって、漆黒の戦場へ。光届かぬ深海で、巨人を模した戦闘機械が、一陣の光芒となって駆ける。

ヘルメットを介して脳波で制御される機体は、最早自分の手足と言っても過言ではない。秒速五十メートル、それ自体が一つの弾丸と化して、数百メートル先に位置する敵陣へと突き抜けてゆく。縦横無尽に、あるいは滅茶苦茶に飛び回る両軍の『機甲兵』<sup>ドルフィン</sup>のために、深海は掻き乱され、荒れた水流がまた戦況を曖昧にしていた。

眼前に現れた敵機。機影を捉えた脳が理解した半瞬前には、相手を先に死神の腕に委ねるべく、悪意渦巻く高速のステップが始まっている。反射神経の極限、ネットワークを駆け巡る電気信号。高圧水流を弾と化すライフルの連射を紙一重で躲し、そのまま螺旋を描くように肉薄。膨れ上がる人工筋肉の出力を一拳に押し出し、破壊へと変化させる。左腕のブレードでの一撃は銃身でさらされ、崩した態勢を無理に立て直して追撃を回避。青白いフェルマント・ド

ライヴの燐光に、音もなく四散する水圧弾のあぶくが混じる。転進する自機に追いつきつづ連射を浴びせてくる敵機を横目に、操作盤にコマンドを叩き込む。脳波の指示と相まって、機体が一気に上昇。踊るように。舞うように。

最悪の死闘は時として最高の舞踏と同等のものであると、どこかで誰かが語っていた。ギリギリで命を削り合っているからこそ、刹那の輝きがあるのだと

聞いて呆れる。

悪態を高速で流れ行く景色に置き去りにして、構え直したライヴルの斉射を浴びせる。こちらの身を守るフェルマント・ドライヴの青白い輝きは、敵機をも平等に守護する。強烈な反力に晒された無形の銃弾は、力を無くし次々と霧散していく。

何のために闘っているのか、問われたことも、自ら疑問に思ったこともないわけではない。破壊と、破壊と、それから破壊。生産性の欠片も無い。

答えは単純だ 軍人だから。

ならば、どうして自分は軍人になったのだったか。

脳裏にいつか見たような思いを踊らせながら、漆黒の海底を駆け流れるように突き出されたブレードは、やはり敵機のブレードによって正面から受け止められた。彼我の速度と加速度が一瞬にしてゼロになり、突然の加速度で生じた強烈な慣性力が疲労した身体を揺さぶる。上げかけた呻き声を抑えて、機体の足蹴を叩き込む。弾かれたが、距離を取ることは成功した。

(こいつ、できる)

その思いにどこか刹那的で屈折した喜びが混じっていることを否定できないまま、エンブローア共和国軍第三艦隊機甲部隊イワブチ大尉は再びの飛翔を試みる。

螺旋に動いての高速接近・一撃離脱は、地上とも天上とも異なるこの世界で育まれつつある戦術の一つだった。時折挟みこむ急制動で迎撃を回避。斬撃。回避。刺突。迎撃。銃撃。消滅。応射。回避。

斬撃。斬撃。掌底。蹴撃。斬撃。銃撃。銃撃。斬撃。

型もクソもない、まるで子供のケンカのような。大義も理由もそこには必要ない。

そうだ、自分は

そして、辿り着く結論はいつもと同じ。宇宙そらを駆けるのはまた違った。実際に飛んだことはないから知らないが、地上を駆け回るのとは違った。人類の長い歴史の中でも、おそらくは自分たちが初めてであろう、超高速での海底戦闘。その、水の障壁を突き破り、泡沫を置き去りにして舞う、この感覚が。

決着は唐突に訪れた。僅かに逸れた敵機の攻撃、カウンター気味に付きだしたイワブチ大尉のブレードがその中核を、コクピットを貫いたのだ。離脱。爆発。四散する機体は加護を失い、すぐに強大な水圧を叩き付けられて押し潰される。それは既に当たり前の光景で、眼を逸らすことも、「眼を逸らしてはいけない」と思うことすら、なかった。

既にベテランの領域に足を踏み入れつつある彼にとっても、深海の戦闘は決して楽なものではない。一機を屠った時点で僅かに集中力が途切れてしまうのは仕方のないことではあつたし、その僅かな隙が岐路になることは、決して少ないことではなかった。

「あぶねえ、兄貴ッ」

聞き慣れた声での通信とほぼ同時に届いた、沈み込むような灼熱の感覚。それは、失望と絶望、そして何故か安堵を伴って。

こら。公的な場では階級で呼べって、言っただろ……

大尉の意識は、そこで途切れた。

## 第1章(1)

### 第1章

天空の光届かぬ暗黒の世界。その闇に溶け込んだ二つの機影は道を失った迷子のように頼りない。その身から吐き出され、やがて周囲の液体に取り込まれていく弱々しい泡沫が、運命すら暗示する不吉なものに思えた。

〔右腕上腕部被弾 稼動不可〕

〔索敵視野四十二%喪失〕

〔鏡面装甲六十七%欠損〕

……

眼前の投影式スクリーンを眺めながら、機中の男はつまらなそうに舌打ちをした。力ない音が無機質な壁面に跳ね返り、ますます気が滅入ってくる。アドレナリンの分泌量が下がってきたのか、狭い操縦席が妙に癢に障るような気がした。見慣れたスクリーンは赤く点滅を繰り返し、その点滅すらも覚束なくなってきた。身に付けたパイロットスーツの調整作用のお陰で生理的な嫌悪感は一減されているが、それも限界に近づいていた。

「こっぴどくやられたもんだな……」

「稼動してるだけで儲け物さ」

搭乗カプセル上部に設けられた通信回路から、聞きなれた同僚の声 flowed。単なる愚痴に律儀にレスポンスを返してくるあたり、いつもの偽善者振りには陰りが無いようだ。苦笑とも苛立ちともつかぬ表情をやつれた顔に浮かべ、男は「そうですね」と気の無い返事を返した。

「大丈夫、『アンノウン暗黒領域エリア』を利用した分で充分に巻けたと思う」

「本隊と離れちまいましたけど、大丈夫っすかね、少尉？」



敬語はあまり得意な方ではない。士官学校の同期生とくれば尚更だ。先方も重々承知してくれているようで、同い年の上官に対しての無礼を非難されはしなかった。最も、「そんな状況ではない」というのもあるのだろうか。

「元々別働隊で行動していたんだ。この状況じゃ咎めようがないだろっ」

敗走。その厳然たる事実がまだ若い男の背中に押し掛かった。

プロジェクションコンソール  
非物質型操作盤を操作し、スクリーンの画像を切り替える。カプセルの前面一杯に海底の光景が映し出された。

本来、海底は暗黒に支配された場所だ。だが、地上を放棄した人類は、海底において生きる術を見つけねばならなかった。スクリーンに映る明るい光に満たされた『海底』は、先人達が調査し、記録したものだ。各機体に搭載された『海図』は人類の誇りであり、機体の調査機能による修正を加味しながら人類の世界を創り出していく。最も、未だ未調査の海域は広大であって、それら『暗黒領域』を踏破することは人類の悲願の一つともなっていた。

もはや自らの一部とも言える機体 『機甲兵』<sup>ドルフィン</sup>を巧みに操りながら、二人は明るい闇を疾駆する。掻き分けられた海水が小さな渦となつて、辺りの岩盤を力なく叩いた。

\*\*\*

アラン・クーリッジ少尉は自らの『機甲兵』<sup>ドルフィン</sup>の状況を確認すると、安心とも諦めとも取れる複雑な吐息を漏らした。微かな音は、残り少ない動力源<sup>エネルギー</sup>を捻り出す機体の悲鳴に掻き消されていく。

当初はカルテット（四機・最小の行動単位）で行動していたのに、今は上官とはぐれ、残った三機の内、一機は逃走中にローレンハイム軍の手に掛かった。初めてのことでないし、覚悟こそ出来ていたとはいえ、戦友の死はやはり割り切り難いものだ。いつか慣れるそうカールゼン中佐（上官）は言っていたが、それはいつにな

るのだろうか？「お前は優しいから時間がかかるかもしれないが」と付け加えたのは、慰めだったのか皮肉だったのか。

その頼れる上官は今この場にいない。二度と顔を見られないかもしれないという深刻な予想を捻じ伏せるように、アランは両手に強い力を込めた。今はただ、同い年の部下と共に、何としても母艦に帰還することを考えるべき時。

(いや)

投影型スクリーンの画像を視点型から地図 この呼び方はまだ残っている 型へと切り替えて、アランは考えを改めた。

「カリュー、聞こえるかい」

「何……ですか、少尉」

微妙な空白は無視しても差し支え無いだろう。出世頭の一人であるアランにとっては想像の範疇ではないが、同期から命令を受け立場はあまり心地良いものではないはずだ。階級を付けず愛称で呼ぶのは、彼なりの気遣いでもあるつもりだった。

「母艦に帰還するつもりだったが、位置がはつきりしないし、ここからなら直接『ドーム』に帰ったほうが良いかもしれない」

しばし間が空いた。ノイズだけが耳朶を叩き、漏れ聞こえたかすかな呼吸音が生命の存在を主張する。あちらもスクリーンで確認しているのだろう。性格は乱暴だが、こういう時の判断はしっかり出来る男だ。その粗暴と隣り合わせの性格から評価を低められがちな同期のことを、アランは努めて公平に見ようと心掛けていた。予想通り、数秒後には返事が返ってくる。

「同感ですね。……まあ、どちらにせよ上官の指示には従いますよ」

彼らしい物言いに苦笑しそうになりながら、アランは経路と時間の割り出しを始めた。非物質型操作盤プロジェクトンの上を、男性にしては華奢な十本の指が、楽を奏でるが如く動き始める。間もなく、投影式スクリーンの上を数字と文字が滑り出した。

人類が地上を捨て、天上を失って、海底へとその住居を移してか

ら百年余り。人は、未だ戦うことを止めていない。

標準曆二八三年七月十一日。日本海溝・深度三〇〇〇〜三五〇〇メートル海域にてエンブローア共和国軍とローレンハイム連邦軍の大規模な軍事衝突が生じた。六時間の戦闘の後、エンブローア軍は戦力の三十％を失って退却した。ローレンハイム軍側の損傷は十％程度。この戦闘により、日本海溝周辺圏におけるローレンハイムの支配勢力は確固たるものとなった…… MN・CISより配信

その後、三時間余り。深海の闇の中をライト無しで抜けた二機の<sup>ドルフィン</sup>機甲兵は、前方に巨大な光を見出した。地図のデータではなく、本当の光。二人は、どちらともつかず安堵のため息を漏らしあつた。

底面半径三百二十キロメートル、高さ二百五十メートルのドームが、深度二五〇〇メートルの海底に鎮座している。白銀の障壁で覆われ、耐圧装置によって守られたその中には、かつての地上とほぼ変わらない世界が広がっているのだ。

この巨大なドームこそが彼等の首都。彼等の家、「ウルズ・ドーム」であつた。

## 第1章(2)(前書き)

間が空いてしまいました。が1章(2)投稿です。

ようやくエンディングまでのプロットが固まってきたので、今後は  
マメに更新できるはず……。。

## 第1章(2)

\*\*\*

「『本日正午を持って、アラン・クーリッジをエンブローア共和国軍中尉に任ずる。』

標準曆二八三年七月十四日 エンブローア共和国軍人事司令部  
『

はい、と言って手渡された一枚の紙切れを見て、アランは何とも情けない声を出してしまった。

「……は？」

「昇進の辞令よ。おめでとう」

人事担当官エレーナ・ロドクリフ少佐は銀色の長髪をサラリと揺らした。「絹ですら恥らうような」という型通りの表現が似合う純銀の糸が、味気ない白の軍服すら華麗に見せる。入隊後しばらくはその美貌故に軍部のマドンナに祭り上げられ、軍のイメージアップ戦略に度々起用されたとあって、その貫禄たるや相当なものだ。アランも尊敬する上官であるリチャード・カールゼン中佐が幾度となく彼女にやり込められるところを見てしまった……形容しがたい思い出だ。

なかなか反応の無い若者に業を煮やしたのか、麗しの少佐殿は苛立った仕草で机を連打した。細長い指がリズムミカルな音を立てる。一応曲になっているあたりの多才さが、彼女の彼女たる由縁とも言えるのだろう。彼女が何故軍などに入ったのか、エンブローア軍七不思議の一つと言われている。

「敗戦だからって貴官の功績が無くなるわけではないわ。敵機甲兵ドルフィン三機大破、敵駆逐艦一機を戦闘不能……プラス、これまでの評価を見たら昇進には充分」

最後にエレーナは心持ち首を傾げてみせた。口紅を必要としない

真紅の唇にはこれ以上ないほどの笑み。最高級の紅玉ルビーに喩えられる瞳は……言つまでもない。

「何か、不満でも？」

「……いえ、有難く拝命いたします」

アランはベレーを胸に当てつま先を三十度を開くエンブローア軍式の敬礼を完璧にこなすと、改めて一礼してから人事部を退出した。ヤレヤレ、という聞こえよがしの呟きを背中に受けながら……。

諸手続きを終えて中央指令局から外に出ると、アランは一度大きな伸びをした。大気に満ち充ちた光が金色の頭髪に跳ね返る。白を基調とした軍服の右肩に、よく磨かれた少尉の階級章が光っていた。ライトブラウンの瞳を眩しそうに細めながら、雲ひとつ無い晴天の「空」を見上げる。

あれから数日が立っていた。帰還したアラン達はドームのゲート管制塔でしばし待たされ、後から帰ってきた母艦と合流することが出来た。カールゼン中佐は無事に艦に合流しており、別に行動していた者達と合わせ、四十八人からなる第三艦隊機甲兵部隊は七名の死者を出すだけで乗り切った。そう、七名「だけ」で。三十%の兵力を失った全体からすれば、被害二十%に満たない立ち回りは賞賛されるべきものではある。死亡した者は二階級特進し、遺族への給金もそれに見合った額が支払われる。尉官の遺族給金だけでは生きていけないかもしれないが、それが軍部にとって出来る最大限のことなのだ……きつと。

釈然としない気持ちを押し隠しながら、眩いまでの輝きの中、残り数分の少尉は歩き始めた。先の見えぬ明日へと向かって。

十二年前 標準暦二七二年。海底国家群の調停を務めてきた人類連合（UH）の調査隊が、太平洋中央海域にて謎の海底遺跡を発見した。調査隊の隊長・ベーリンゲン教授の発表は、『アンソウン エリア暗黒領域』の開拓以外は停滞していた人類社会に一筋の光を投げかけた。各国

はこぞつて調査隊を派遣し、海底遺跡の調査に乗り出すことになる。海底遺跡は古代の伝承にのっとり『ムー遺跡』と呼ばれることになった。

それでも当初は娯楽的要素の強かった調査であったが、エンブローア共和国とローレンハイム連邦が共同出資した調査隊が現在の人類では実現不可能な技術の痕跡を発見し、事態は急変する。エンブローアとローレンハイムによる調査結果の独占に反発した諸国の抵抗に会い、エンブローア・ローレンハイム両国は人類連合（UH）からの脱退を強行する。太平洋海域に属する二大国を失った人類連合は瓦解し、歯止めを失った各国はそれまで押さえ込まれてきた憎悪の槍を互いに向け合うこととなった。そして一連の騒動の原因となった謎の『ムー遺跡』を巡り、エンブローアとローレンハイムの関係も悪化する。

標準暦二七三年。二大国はマリアナ海溝にて戦端を開く。『第一次太平洋海底戦争』の勃発である。「第一次」と冠されたのは、第二次が是非あつて欲しいという願いのためではない。第二次が起こりうるように……すなわち、「『第一次』後も世界が存続して欲しい」という皮肉な思いが込められているのだ。

そのネーミングセンスが功を奏した訳でもないだろうが、それから十年、散発的な戦闘を彩りとしながら、世界はなお終焉を迎えてはいなかった。

\*\*\*

心地よい機械の唸り声に、かすかな電子臭が混じる。外とは一味違った空気を存分に味わいながら、アランは軍事工務局へと足を踏み入れた。機甲兵乗りは戦地でない時でも、自らの機甲兵の状況を確認する度に、軍事工務局を訪れることが度々だ。根が機甲好きな者たちの集まりだからなのだろう、明文化どころか義務化もされていないこの慣習は、多くの機甲兵乗りにとってある種の儀式のよう

なものとして認識されている。

「お、やっと来たか、クーリッジ中尉殿」

工務局、とは言っても実際には巨大工場のようなものだ。機甲兵<sup>ドルフィン</sup>が左右に立ち並ぶ中、初老の男がアランに声を掛けた。トレードマーカーのタバコをいつも通り右斜めに啜えている。髪はすでにほぼ真っ白となり、痩せた頬にも皺が目立ち始めているが、黒いサンングラスに隠れた瞳は細く、鋭い。

「何で判ったんですか、オヤジさん？」

階級章はまだ少尉のままである。やや驚いた表情でアランが尋ねると、小柄な身体を丸めてクツクツと笑った。

「ウチのバカ孫が少尉になったそうだからな。お前さんも昇進してないと面白くない」

バカ孫　カリューシャスにちよつとした哀れみを覚え、アランは苦笑する。その表情をしばらく眺め、老人は唐突に口にした。

「ん？ お前さん、何か不満でもあるのかね？」

この老人の観察力は実際大したものだが……アランは再度驚きの表情を浮かべた。もしかしたら、自分の雰囲気解り易過ぎるのかも知れないが。

「な、何です、急に」

「フン。若造の気の迷いぐらい、オレが見抜けんわけないだろ」

オヤジさん　ジエイクス・F・マルバード工科准将の肩書きは『エンブローア共和国軍立軍事工務局次局長』である。本来なら現場で働いている立場ではないのだが、生粋の機甲職人であり、その腕を買われて軍部入りした老人は、「生涯現場勤務」を掲げていた。「オヤジさん」という呼称は彼自身が要求……もとい強制しているもので、子供の時分に見る機会のあった二十世紀の平面アニメーションの登場人物に惚れ込んだためらしい。彼が機甲の世界に足を踏み入れるきっかけも同じだったというのだから、大したものである。「大方、敗戦なのに昇進したのが気に食わん、とかいうところだろ」  
凶星を衝かれ、若造中尉としては沈黙するしかない。二十七にも



なつて若造呼ばわりは酷い気もするが、オヤジさんから見れば赤ん坊も同然かもしれない。

「アイツは『信賞必罰』。使い古された言葉だが、真理ではある』何てほざいてたがな。全く、奴らしいと言つか何と言つか」

「ラムサスも昇進したんですか？」

「おう、ついさつき出てつたばかりだよ。すれ違いになつちまつたか」

アランを手招きして、オヤジさんは工場の中程まで歩を進めていく。大量の機甲を三段に並べている工場内に居ると、まるで巨人の国に迷い込んだガリバーのような気分になつてくる。『ガリバー旅行記』は小人の国ばかりが取沙汰されるが、人間にいじられる機甲からすればそんな気分なのだろうか。五列ごとに広い空間があり、三段五列・十五機の機甲兵はクレーンでそこに運ばれ、改めて整備を受ける。一応人間が上の階層に行くことも可能になっているが、工具などの状況を考えると下で作業した方が効率の面で優れているのだ。

ほれ、と指差されたのは、ETX 280が並んだ中、全面を青に塗装されつつある機甲兵だった。この型番は元が灰色なだけに、周囲の機甲兵から浮いていることはなはだしい。ちなみにこの型番はエンブローア軍工務局の傑作機と言われており、ローレンハイムのRG281Kと共に、現行の機甲兵中心の戦闘スタイルを確立した立役者とされている。それが喜ばしいことかどうか、道徳的判断に困るのは人間として当然の心境であろう。しかしこの時、青い機体を見上げながら、アランは道徳とは関係の無いところで言葉を濁した。

「解りやすい、ですね……」

「中尉からは塗装が許されるからな。お前さんも髪と同じ金ぴかに染めてみるかい？ 『百式』みたいに」

「ヒヤクシキ？」

「……解らんらしいさ」

ちょっと寂しそうにそう言うと、准将はタバコの煙を吐き出した。白い微粒子が空気中に舞う。二十世紀には既にタバコが健康に与える害悪が広く認知されていたというが、今に至ってもタバコは庶民の道楽として確固たる地位を占めている。密閉されたドーム型都市ではあるが、大規模な空気清浄機がフル回転しているため「空気の汚れ」を指摘する人は少ない。排気ガスなども含め、二十世紀から騒がれていた空気汚染はおおむねが「解決」されている、というのが一般認識だ。最も、ドーム周辺の水質の汚染を指摘する意見が提出されているのも事実である。結局、根本を買えなければどうにもならないということだろう。

その場に居た整備員に二言三言声を掛ける（怒鳴ったと言った方が正しいかもしれない）と、再びアランを手招きして踵を返した。向かう先はアラン自身の機甲兵の下だ。

大きなダメージを与えられていたアランの機甲兵は、熟練の職人芸によって元と寸分違わぬ姿を取り戻していた。へこんでいた装甲は換装され、細かい傷は修復剤の噴射を受けている。ざっくり斬り込みを入れられていた右足はさすがに全体を取り替えねばならなかったようだ。標準的な機体であるから、パーツの取替は利きやすい。

ちなみに、機甲兵は海底の強烈な水圧に耐えうるよう、分厚い装甲に覆われてずんぐりした格好をしている。直径一・五メートルの球形をした搭乗カプセルを囲うように胴体が形成され、太く短い手足が卵に生えたような形になっている。手足の基本形はお団子であり、武器は掴むのではなく吸い付けるようにして扱うのが普通だ。

准将は「要は『ペタリハンド』だ」と表現するのだが、この言葉が通じていた相手をアランは一人も知らない。頭部は精密な調査機器を防ぐことを最優先としており、機能美と言えば聞こえは良いものの、アニメーションや映画に出てくるような格好の良い人型ロボットを想定する少年達は、初めて「本物」を見た際に決まって失望を味わうのである。最も、この姿を「愛らしい」と形容する者もあり、実際少女達からは思ったより評判が良い。『ドルフィン』という愛

称は、その「愛らしい」姿を、かつて人類が地上に住んでいた際に最も近い海の友であった生き物「ドルフィン（イルカ）」イルカとやらにはまた別の言い分があるであろうが、になぞらえたものだと言う。機甲が本来の目的で使われていた頃は愛称でしかなかったが、軍事転用され「機甲兵」の存在が認知されるようになって、正式に「機甲兵」の名称が与えられた。

かのムー遺跡で発掘された技術を応用し、「機甲兵」が戦争に投入されてから十年。貴重な資源であるフェルマント鉱石を投入して初めて十分な戦闘能力を持つため、大量製造にはまだ時間がかかると思われる。「機甲兵」部隊の編成は通常部隊のそれとは明らかにことなっており、佐官級のカールゼンであつてさえ指揮下にあるのは四十七人のみだ。アランは士官学校の「機甲兵」専門課程を経てきており、階級的には尉官であるが、大した権限はない。それでも「機甲兵」はアランにとって十二分な魅力を持っていた。

「少尉：いえ、中尉！ お久しぶりっす！」

元気よく声を掛けてくる整備兵達に、アランは笑顔で応えた。この時代において、軍部における男女比率はおよそ七対三であるが、機甲に関わる部署は圧倒的に男性が多い。やはり戦闘ロボットは「男の子の永遠の夢」なのであろうか。脳裏に比較的近い「少数の例外」の姿が過ぎったが、どこか甘い薫りを伴ったそれは言語化される前に弾けて消えた。

一般軍人の制服は白を基調とする一方、整備員の服装は汚れが目立たぬよう暗色系が用いられており、工具類を多く持ち歩くためポケットやベルトが多い。階級章は左胸のポケットの上に縫い付けられているが、これは着脱式のものでは作業の邪魔になるといっただけでなく、階級が変わってもすぐに新しい制服になるため問題が生じない。すなわち、制服の短命さが著しいことをも示している。そしてそれは、海底の戦争における機械の重要性をも物語っていた。地上でのように生身の肉弾戦が行えない海底では、整備員の質と量

が勝敗を分けると言っても過言ではない……勿論、「先立つモノ」が無ければどうしようもないのだが。

「どうだい、こいつの調子は？」

「B M I (Brain - Machine Interface) 系の回路にほとんど損傷が無かったからな。カプセル内に損傷は無いし、被害は装甲と脚部駆動系に集中してる。あの負け戦でよく立ち回ったもんだ」

代わって答えたのはマルバード工科准将だった。満足そうな笑みを浮かべ、アランの肩を少々強く……バシツと音が鳴り響く程度に叩く。顔を顰めるアランに整備兵達が声を掛けた。

「その意気で頑張ってくださいよ。オレ、あなたの方なんですから」

「……？」

「こいつら、アンタとラムサスのどっちが先に佐官になるかで賭けてるんだよ。士官学校の主席・次席は伊達じゃない、ってね」

若い整備員の言葉に首を傾げたアランの方に、傍にいたベテラン整備員が身を乗り出す。工科中尉の階級証を縫い付けた男は、長年の機械いじりで黒ずんだ手を後輩に向けて言った。清潔を保つために髭を剃り落とした顎をもう一方の手で撫でながら、からかうような光を瞳に躍らせている。

「先輩ッ！」

焦って抑えようとするが、間に合わない。恐々振り向いた若者は、次の瞬間オヤジさんの怒りの鉄拳に吹き飛ばされ、あと少しで床に接吻する羽目となった。漫画のような光景にアランは眼を丸くしたが、傍を通りがかった女性整備員は呆れたそぶりすら見せない。少しも歩調を緩めないリズムカルな足音が、妙に冷たく響いた。

「つてえ……」

「反省しろ。とりあえずオレの肩を五〇〇〇回ほど揉んでもらおうか」

「准将。それは職権乱用では」

「五月蠅い」

一刀の下に切り捨てられ、年上の整備兵は肩を竦めた。哀れむような眼で後輩を見やる。暗に「諦めろ」と語る視線であった。むしろ、狙って火に油を注いだのかもしれない。苦笑するアランに眼を向け、改めて口を開く。

「許してやってくれ。ここんどこ負け続きで、俺達もへこんでる。若いのは、特にな。昇進なんかどうでもいい。機甲兵は何度でも直してやる。……だが、アランそのものは直せないんだ」

その表情の真剣さに、アランは口を挟むことが出来ない。ただ、黙って頭を下げた。

「先輩、幾らなんでもクサすぎつすよ、その台詞」  
声を上げて笑う若者に、アランは苦笑を向ける。

そうやって笑っていられる内は、まだ大丈夫。

## 第1章(3)

\*\*\*

やがて工務局を辞したアランは、しばし街路のベンチに座り込んだ。

さて、これからどうすべきか。

実家への帰還報告は済ませてあるし、昇進を大げさに騒ぎ立てられるのは気が進まない。言わねば言わないで後々文句を言われるだろうが、乗り気でない懸案事項は後回しにしたいものであった。割り当てられた官舎でダラダラしているのも一つの手だが、意地の悪い天候局がせっかく設定してくれた快晴を活かさないのも心苦しい。天候局の指先一つで決まる国内の天気は、今日は一律の晴れ、行楽日和に設定されている。微かな唸りすらあげて考え込む金髪の軍人を、歩き過ぎていく人々が何事かと振り返った。ちなみに、この時点でアランはまだ一階級下の階級章をぶら下げている。

疑問を会話の俎上に上げ、笑いさざめきながら遠ざかっていく彼等を横目に、アランはこの国の、この時代の「平和」を考えずにはいられない。彼等はこの戦争でまだ身内を失っていないのだろうか。友を失う苦しみを味わっていないのだろうか。それとも、それを乗り越えて仮初の「平和」を享受しているのだろうか。一人の若者が命題とするには重すぎる懐疑であった。

幼い少女が犬と戯れながら眼前を駆け抜けてゆく。少し遅れて、やや年上と思われる少年が苦笑交じりにその後を追いかけていった。幼い笑い声が中尉の聴覚に無遠慮に入り込み、感傷の飛沫を飛び散らせる。眼前の光景を見る自分の視線に、懐かしさだけでなく苦悩の微粒子が混じっているのを自覚して、アランは軽く頭を振った。群青の頭髮が脳裏をかすめ、アランはゆっくりと腰を上げる。迷う必要なんてなかった……そんな言葉を今更のように呟きつつ。躍動

的に踏み出された脚が、軍靴の下に郷愁を踏みしめてゆく。

\*\*\*

「五番街」<sup>ファイブス</sup>。軍人達、とりわけ若い者達にその名で親しまれている地域は、正式には「エンブローア・セントラルシティ・ノースエリア・5」と言う。軍関係の施設が多い北地区の中で、兵士達の息抜きに必要な三つのモノが全て揃う場所であった……すなわち、酒、賭博、女である。いかに女性兵が増えようと、最後にして最大の「休養」<sup>ファイブス</sup>が消え失せることはない。女権論者達の痛烈な批判を余所に「五番街」の一角は今日も嬌声と下卑た笑いに満ちていることだろう。生憎アランは「完全無欠の偽善者」であるため、聴覚からそのような音声を排除すべく、早々に「五番街」<sup>ファイブス</sup>の中でも落ち着いた雰囲気を持つお気に入り地域に入り込んだ。佐官になれば高級士官用のクラブに滑り込めるのだが、それには後いくつか階級を上らねばならない。

この時間帯にしてはやや薄暗い街路を早足に歩き、アランは一軒のバーの前で脚を止めた。この時代には珍しい、煉瓦作りの建築。煤けた木製のドアに掛かった薄暗いランプが足元をほのかに照らし出す。この雰囲気を「古臭い」とみるか「情緒がある」をみるかは人それぞれであるが、幸いと言うべきかアランは後者に属する人間だった。やや力を込めて重いドアを押し広げると、漏れ出した芳香が鼻孔を心地よく撫でた。

ウェイターに声を掛けると、目的の人物はすぐに見つかった。店の隅よりやや中央よりの丸テーブルで、面白くもなさそうにグラスを傾ける、蒼い髪の青年。むしろ少年と呼びたくなるような子供っぽい仕草で、左手に持ったグラスを指で弾く。その指はアランのものとは似てもつかぬ男性的な逞しさを持っており、幾度と無く羨望を浴びせたものだった。震えるように澄んだ音を立てたワイングラスが、天井から下がったランプの黄色を反射して暖かく輝く。

「久しぶり、ラムサス」

青年は勢いよく振り向くと金髪の友人をその視界に認め、隠しよ  
うのない喜色を顔中に浮かべた。

「アラン！」

立ち上がるうとするラムサスを制し、アランは空いていた椅子に  
座る。柔らかな椅子に凹みも温もりも残っていなかったところをみ  
ると、誰か女性と会っていたわけではないらしい。再会の喜びをひ  
としきり言葉で交わした後、言葉では交わせない喜びを乾杯で表現  
することにしたのだった。

「久しぶりな、アラン」

そう言っただけグラスを掲げた友人に、アランも乾杯の動作を返す。  
触れ合ったグラスが軽やかな音を立て、琥珀色の液体が波のように  
揺れた。咽喉に流れ込むワインの芳醇な香りが、内側からアランを  
満たしていく。あまり酒を嗜む方ではないが、それは軍人レベルで  
の話。死と隣り合わせ、ストレスには事欠かない毎日では、酒の逃  
避能力はもはや必要不可欠だ。

「六カ月ぶり……かな。お互い転戦してたし」

考えてみれば、この悪友とこんな長期間顔を突き合わせていな  
かったのは初めてではないだろうか。幼年学校時代に知りあって以  
来、何の因果か常にセットで捉えられるような毎日を送ってきた。

「まあ、日本海溝ではすぐ隣にいたらしいけどな。うちの部隊は半  
壊で、お前の所に配属替えになりそうだ。宜しく」

「相変わらず、耳が早いね……」

アランが呆れたように呟くと、ラムサスはニヤリと笑ってみせた。  
決して温かみのある笑い方ではないのだが、この男にやらせると妙  
に愛嬌がある。そこどころが女心をくすぐるんだらうな……など  
と、アランは羨みとも呆れともつかぬ感情を覚えた。

「まあ、オレの情報源はそれこそ星の数ほどもあるからさ」

酒のツマミを意地汚く口に放り込むと、ラムサスは得意げに腕を



広げてみせる。昔から子供っぽい動作が好きで奴だったが、今も変わらない。情報源とやらについて深くは聞かないことにして（大方夜間のプライベートな戦闘の戦果であろう）、アランは話題を変えた。死者を肴にするのも躊躇われたので、自然と話は共通の趣味へと移ることになる。

「そう言えば、オヤジさんの所に行ってきたんだけど、真つ青な機体が眼に悪かったな」

「青は眼に良いんだぞ？　ちゃんと科学的に証明されてる」

「科学万能主義はいかんよ、君」

中等学校時代の哲学教師の口癖を思いだし、二人は苦笑じみた笑みを浮かべる。科学万能主義に対する抵抗は西暦の二十一世紀には隆盛していたが、その後の太陽系時代、恒星間航海時代、そして星間連邦時代を経て暮らしの場を海底に移した人類は、その過程で常に科学の力に頼ることとなり、結局「科学万能」の考え方が復活することとなった。少なくとも、若者たちが学んだ歴史ではそういうことになっている。

「あの先生、まだ元気にやってんのかね」

当時からベテランの教師ではあったが、まだ定年の七十五歳には届いていないはずだ。

「老いてますます盛ん、って感じじゃないのかな」

「今の時代には珍しい人だったよな。親の顔が見てみたいぜ」

「孫娘の顔はよく見たんだろ」

「う……それは言うな」

彼にとつてもトラウマになっているのか、ブルブルと首を振る。

あの祖父と血の繋がりがあるとはにわかには信じがたいほど可憐な少女ではあったが、あの祖父と血の繋がりと納得がいくほど性格的にはキツかったというのは耳にしていた。幸い、アランにまで被害が及ぶことは無かったが。

やがて真顔に戻ったラムサスは、さりげなく爆弾を投じてみせた。

「あ、オレ、今度結婚するから」

「ああ、そうか。おめでとう」

アランはグラスを掲げ、ゆっくりと口をつける。爆弾が効かなかつたかな、とラムサスが勘ぐったのと、アランが首を傾げたのは同時だった。その性格と同様、かつちりと面白みなく整えられた金髪が僅かに揺れる。

「ん？ ……ケツコン!？」

友人がワインを吐き出さんばかりの勢いで叫ぶと、ラムサスは顔を顰める。だが、目元の会心の笑みは隠しきれていない。「予想通りの反応で結構なことだ」とその紫の瞳が語っていた。悪戯気な光が、紫水晶アメジストに踊る。

「そう驚くことでもないだろうが。オレらももうすぐ三十だぞ」

軽く咳き込んでから、アランは得意そうな笑みを浮かべる友人を睨んだ。確かに驚きはした。だが、それは生憎と年齢に対してではない。

「相手は誰だ？ アランナか、ティファか、シエルか、サヤカか、シエリーか、イライザか、ケルビアか、アミーか、レティシアか、メイか、クリスタンスか、それとも……」

鬼気迫った表情で指折り数え始めた親友を、青い髪のプレイボーイは鷹揚に制止する。両の指で足りなくなったあたりで、アランは強く息を吐いた。

「もついいもついい。よくそんなに覚えてんな」

「お前が泣かせた女に俺までいちいち恨まれてるんだ、忘れたくても忘れられるか!」

夜中に鳴り出す無言電話、着払いで届けられる呪いの人形、メルボックスは口に出すのも憚られる画像で満杯……トラウマになりかけたそれらはそんなに古い記憶ばかりではない。平均寿命や就学年齢が向上したのに伴って、人々の精神年齢は概ね低下の傾向にあった。だからこそなのか、そういった行動が遙か昔、太古から人類女性の習性であるのかは、歴史の学徒ではないアランの知るところではない。

そして、悪い悪い、と応える人間が少しも悪いと思っていないさそうなのは、太古の昔からの世の常であろう。きつちり世俗の慣習を守った後、ラムサスは改めて勿体ぶると口を開いた。その口から出てくる単語が、眼前の友人にどんな影響を与えるのか、凶るような様子で。

「ティファだ」

「……まさか、あのティファか」

名前を出しこそしたが、完全に予想外の所から飛んできた真実にアランはしばし呆然としてしまった。返答までに、たつぷりと五秒は間を空けてしまったのではないか。親友を短時間で何度も驚愕させたことに気を良くしたのか、ラムサスの瞳が喜びに細められる。

「ほかにティファを知ってるのか？」

「生憎と、女性関係は多彩じゃないんだ。……お前と違って」

士官学校の同期である彼女は、ラムサスの口説き文句にまったく反応しないことでアランを驚かせていた女性だった。如何なる心境の変化があったのか、女心に疎い金髪の中尉には分かりそうもない。無言の疑問を感じ取ったのか、回答はすぐに寄せられた。

「大方、待ちくたびれたんだろうよ」

プレイボーイの名をほしいままにする青年は、どこか哀れみを含んだ眼で、よくも悪くも生真面目な友人を見やった。

\*\*\*

「相変わらず仲が良いわね、あの子達」

アランとラムサスからは死角になる、壁際の席。銀のストレートヘアをさらりと揺らしながら、かつてのアイドルは歌うような口調で言った。「かつての」と付けてはいるが、実際その美しさは歳を重ねるごとに磨きをかけられていくようでもある。氷蒼色アイスブルーの瞳にその姿を映して、兵士というよりは少壮の弁護士を思わせる風貌の男が溜息交じりに口を開いた。

「腐れ縁、という奴かな」

リチャード・カールゼンは給仕が注いだグラスを取ると、慣れた動作で掲げた。エレーナも微笑みと共にグラスを掲げる。淡く室内を照らす明かりが真紅の液体に踊った。標準曆二百四十年もの貴腐ワイン……アレンやラムサスなど「子供」には手の届かない逸品である。

「それで？ 今日は何か用があつたんじゃないのか」

「焦らないでよ。せつかくこんな美人がデートしてあげてるんだから」

「相変わらずだな……」

エレーナとの奇妙な関係の始まりは数年前に遡る。当時まだ軍の広報塔として活躍していたエレーナには言い寄る男も数知れず、はたはた嫌気のさしていたエレーナが面識のあつたカールゼンに『彼氏役』を頼んできたのだ。その理由は「変な気を起こしそうに無い男の中で一番給料がよい」からだとか。齒に衣着せぬエレーナの物言いは決して不快ではないが、それを聞いたときには妙に気が抜けたような思いを味わつたものだ。それ以来、何とはなしにエレーナに振り回される日々が続いている。今日だって、いや今までだって、基本的にはエレーナの呼び出しに対応してきた。幸いというか不幸にというか、時間は空いている。美貌の同僚の『彼氏』でいるうちに他の女に手を出せるほど豪胆ではないし、その手の欲求を意志の力で押さえ込むのは、カールゼンのさほど自慢するものでもない特技だった。まあ、棒切れというわけではないので、「五番街<sup>フィフス</sup>」を別の理由で利用することがなかったわけではないが。

「まあいいわ。結構時間のかかる話だし」

コトン、という音と共にグラスが置かれると同時に、エレーナの表情は鋭いものへと変わっていた。切れ長の瞳、その輝きが確かに強くなったようにカールゼンは感じる。こういった表情をすることの滅多にない女だけに、打ち明けてくる話の重さが知れた。

「そろそろ香水が切れるから、新しいのを買おうと思うの。この機

会に種類を変えてみようかと思うのだけれど、どんなものが良いかしら？」

打ち明けてくる話の重さが、知れた。

「どうして俺にそれを訊く？」

「彼氏でしょ、一応」

一応が付くのか、という言葉は、喉元で飲み込んだ。第一、ツツコミを入れるべき、もっと正しい箇所があるような気がしてならない。

最近のはちよつと薫りが強すぎた気もするのよね、と自らの手首を返して軽く嗅ぐようにする。今更ながらに色気を感じたような気がして、カールゼンは慌てて目を逸らすと上物のワインを口に含んだ。この年齢にしては、自分の反応はちよつと初心はつしんすぎるのかもしいれない。こつそりと窺ったエレーナは、やはり真面目な顔をしたまま一大事のように口を開いた。

「端的に言えば……内通者がいるのよ。それも、あなた達に近いところに」

「……！」

むせ返りそうになるのを堪え、カールゼンは首を振った。せつかくのワインが、口中で途端に苦味を増したような気さえする。こつこつといった点であり趣味の良い女だと思っではいなかったが、今回のタイミングは格別の悪さだ。目を細めて睨みつけるが、どこ吹く風といった風情。……まったく、忌々しい。彼女が、というよりも、それに逆らえない自分が。

「端的すぎるな、それは」

「それだけじゃない。おそらく共犯だとは思うけど、軍部の深いところにも食い込んでる。作戦立案に関わるようなトコロに」

「その心は？」

「おかし過ぎるのよ、最近の戦闘。私は前線には立たないけど、だからこそ見えてくるものもある。……どう考えてもこちらの動きが漏れているとしか思えない」

真紅の液体に、それよりやや色の薄いエレーナの瞳が映り込む。冗談の欠片さえ浮かばない表情に、リチャードは再びそむけかけた眼を元に戻した。

「愛国心旺盛だな」

「茶化さないで。私は真面目よ。……そして、特に被害が深刻なのは」

「『機甲兵』部隊、か」

エレーナの言葉に、カールゼンは左手で軽く顎を摘んだ。

確かに、先の戦闘でカールゼン自身が率いる第三艦隊機甲兵部隊は二割近くを失っている。共に出征した第四艦隊機甲兵部隊はそれ以上の被害、ほぼ半数を失ったと聞いた。三割が失われれば全滅、五割が失われれば壊滅と言われる軍事上の部隊運用において、深刻にならざるを得ない被害と言えよう。

指揮官までも失った第四艦隊機甲兵部隊は一度解体され、残存兵力は第八まである艦隊それぞれの機甲兵部隊に合流することになっていた。既に新規配属の人員のリストには目を通してしている。その中にかつての親友の教え子であり、また部下の親友でもあるラムサス・V・コーンフィールド中尉の名も確認している。旧知だからといって優遇するつもりはないが、もし二人を組ませて戦果が上がるのであれば、人的資源の有効利用という観点からも問題はないだろう。実際、合同訓練の時にはなかなかのコンビネーションを見せていた。昔の自分たちのように。

「彼我の戦力差はほとんど無い。地図が不完全な海溝戦では地の利もほぼ同等。なら、違うのは？ 単純な話よ」

「戦力が互角……ね。あの男が寝返った時点で勢力図が塗り変わった気もするんだがな」

「互角でしょう。その程度には彼氏のことを信じているもの、私」

エレーナの物語に否応なしに納得しそうになる自分を牽制するよ  
うに、カールゼンは敢えて眼前に座る仮初の恋人に疑問を投げかけた。  
た。

「瓦解つてのは味方を疑うところから始まるんじゃないのか」

「あなたはそれで良いの。あなたは信じる。私は疑う。バランスが取れて良いじゃない。尻尾を出したら私が刺すわ」

「女の細腕で効き目があるかな」

「あら？ こう見えても毒の扱いは上手いのよ」

澄ました顔で言い放つエレーナに、リチャードは僅かに口元を歪める。

「……やめよう。俺たちが言い争っても仕方ない」

「賢くなつたわね、貴方も」

不満げな口元を隠すようにグラスを呷ると、カールゼンは少し気まずそうに眼をそらした。時折にしか見られない彼の子供っぽい仕草に、エレーナは軽く笑みを漏らす。

「勝てない戦はしない主義なんでな」

言い訳がましいその台詞は、口論において100戦100敗という輝かしい成績を反映したものだ。エレーナはとうとう笑声を堪えきれなくなった。カールゼンは自分の大人気なさを理解しつつもさらに顔を背けてしまう。

(あいつらには見られたくないな)

特にあの生真面目な金髪の部下は、上官を慰めようとして反って傷つけてしまうことが多い。部下達の顔を思い浮かべて疲れた気分陥った彼の耳元に、エレーナの冗談めかしたような声が滑り込んでだ。

「ごめんなさい。あの子達には、貴方とウオルフみたいな思いをしてほしくないのよ」

苦笑しかけ、その言葉に真摯さと苦悩の微粒子が混じっていたことに半瞬後に気付く。彼が振り向いた時には、既にエレーナはいつも通りの流れるような動作で席を立っていた。言葉の意図を問い掛けかける前に、やや高い位置から美貌の人事担当官の声が降る。

「今日は楽しかったわ、ありがとう。あなたにちゃんと彼女が出来るまでは奢られてあげるから、いつでも呼んで頂戴」

立ち去る彼女の背を肴に、カールゼンは煽るようにワイングラスを傾けた。

\*\*\*

近日中の再会を約し、アランとラムサスは店を後にした。片手を上げて辞意を示し、だらつとした格好のくせに「きまって」見える後姿で立ち去る友人を半ばまで見送ると、アランは踵を返す。ドームの天井の『太陽照明』は既に落とされ、静かに広がる夜の帳が全天に映し出されている。

空調も、温度管理も完璧に管理されたドーム都市。かつて、人は星々を跨いで生活していたという。何がどう転んだのか、再び「地表に張り付いて」住むはめになった人類は、宇宙時代に手に入れた技術を応用して、かつて人類が端を発したと言われる太陽系の一角、地球と呼ばれる惑星の海底に居を構えるようになっていた。地上は生身では足を踏み入れることすらできない死の世界になっていると言われている。それが真実であるのか確認する手段は一介の軍人ではないアランには無かったが、釈然としない思いを抱えているのは否定できなかった。

何故、海底になど住んでいるのか。

何故、地上は放棄せざるを得ないほど荒廃したのか。あるいは、したとされるのか。

そして、遙か昔、地上から見えたという空は今自分が見ている空とどんな風に違ったのだろうか。

いつか友と語った少年の日の記憶が、アランの脳裏に蘇った。

あれは、確か幼年学校の卒業を控えたときのこと。

まだラムサスもプレイボーイではなく、その片鱗ぐらいはあったかもしれないが、二人で色々ないたずらをしては叱られていたものだった。そう、そしてあの時は……



「しかし、実感が湧かないよなあ……」

そうぼやいた親友に、幼き日のアランは怪訝そうな視線を向けた。無言の内に説明の必要を感じ取ったのか、まだ少年だった日のラムサスは空を指差す。

「星」

「星？」

「そ、星。見たこと無いのに『星間戦争』なんて言われてもなあ」「星なら……」

何度も見たじゃないか、と言いかけた金髪の友を遮って、青い髪の少年は苛立たしそうに言う。

「SV（立体映画）も全ドーム型プラネタリウムも、結局は作り物じゃないか。本物じゃないよ」

「そんなこと言ったら、見たこと無いものばかりじゃないか。『雨』だってドームにはないし、第一、戦争だって見たこと無いし」それはそうだけど、と譲歩するラムサスは、やっぱり不機嫌そうだ。頬を膨らませ、唇を尖らせて、全力で「気に食わない」と主張している。

「何か違うんだよ。上手く言えないけど、何か違うんだ」

「うーん……」

「こう、上を見上げたら、本物の星がバーツと広がってさ。『雲』がかかってたりして見にくいかも知れないけど、やがて雲の切れ間から本物の『月』が顔を出して……」

眼を閉じて恍惚の表情を浮かべる友を見ると、アランは自分も段々その気になってきていることに気付く。薄く眼を閉じると、瞼の裏に光るのは幻想の星々。

「いいね。うん、オレも見てみたい」

「いつか、一緒に見に行こう。大人になったら、『陸』に上がって星を見るんだ。作り物じゃない、本物の星を」

静かな風が二人を包み込むように流れた。赤いボールが転がって

きて、アランの足元にぶつかって止まる。

「アラン兄ちゃん、ボール！」

その少女の声に、幼き日の彼はこう答えたはずだ。

「よし、いくよ、リリイ！」

少年の手から離れ宙を舞ったボールは、緩やかな放物線を描きながら青い髪の少女の前で弾む。軽く歪んだボールは次の瞬間には球形を取り戻して、少女の腕の中へと飛び込んだ。少女は兄とその友人を見やり、満面の笑みを浮かべる。兄のものよりやや色の薄い、空色に近い髪が風になびく。少女は駆け出し、青い髪の少年はその後を追って走り出しかけ、友人を見やる。悪戯っぽいその顔に笑い返し、そして二人は駆け出した。

いつか、本物の星を　その想いは幼さを残した少年二人の心に共有された。何よりも崇高で美しい誓約として。

## 第1章(3)(後書き)

第1章終了です。

第2章では戦闘シーン描写に挑戦の予定です。

誤字脱字等のご指摘、感想等々歓迎致します。どうぞ宜しくお願い致します。

## 第2章(1)

フェルマント。海底で生きる人々に、大きな生活の変革をもたらした鉱石である。

いや、むしろ「生活をもたらした鉱石」、と言うのが妥当であろう。フェルマント無しの世界など、最早想像すらできない。

宇宙においては真空がそうであったように、海底においては水圧が生物に牙を剥く。水深十メートルにつき一気圧。水深二五〇メートルの世界では、鋼鉄のパイプすらへし折れる。そんな場所で、巨大なドーム都市が人々の棲家となり、人型ロボットが縦横無尽に飛び回るなんてことは、あり得ない筈だったのだ。数世紀前までの常識からすれば。

そんな常識を叩き壊して踏みじり、良識を嘲笑って蹂躪したのがフェルマント。周期番号一三八番、1s軌道の電子が光速を超えた元素「フェルマニウム」を主成分とし、海底鉱床で産出される物質である。その特性に着目して呼ぶならば、「反圧金属」。特定の条件下で反力領域を生み出し、数百の気圧をキャンセルして、居住可能な環境を作り出す。

だが、フェルマントはその利便性と引換に、相応の対価を酸素を要求した。便利なものが、ただそれだけでは済まないのは、歴史の常ということであるのだろう。発生する反力場は精製されたフェルマントの大きさに従って大きくなるが、その二乗に比例して酸素を分解し、オゾンや活性酸素を放出し続ける。言うまでもなく、人体にとっては毒だ。

つい数十年前までフェルマントの効用が発見されなかったのは、その産地が水深四〇〇メートル以下の深海底に限られていることと同時に、十分な量の酸素、という条件が満たされにくかったことがある。フェルマントの応用法を研究していた軍の施設において密閉壁が敗れ、所内のすべての酸素を喰われて貴重な人的資源が失わ

れた事件も、まだ記憶に新しい。「危険なフェルマントはすべて廃棄すべきだ」という強硬派も少なからず存在する。

ムー遺跡で発見されたのは、このフェルマントを比較的安全に扱い、また指向性をもたらすことのできる小型の装置である。それまでも完全に密閉された空間でフェルマントを用いる方法の開発は進められていたが、後にフェルマント・ドライヴと呼称されるようになったこの装置は、安全性・効率性の両面から従来品を大幅に上回っていた。現在の海中技術は、遺跡群で発掘されるオリジナルのフェルマント・ドライヴと、それを模倣して作られたコピーのフェルマント・ドライヴを基幹としている。

「オリジナル」はどこから与えられたのか。

これはフェルマント応用技術を開発しているエンジニアたちが揃って抱えている疑念であり、各国が揃って遺跡とフェルマントに眼みを利かせている一因だった。

フェルマント・ドライヴがあるのならば、より大きな技術がどこかの遺跡に眠っているのではないか。

それは、世界の覇権を握ろうとする野心家にとっては甘美な夢であり、より多くの利権を得ようとする政治家にとっては見果てぬ希望であり。技術者たちにとっては、無意識のうちに掛けられた呪いのようなものだった。

そして、前線の兵士たちにとっては　ただ、「そこに在るもの」ではない。

それだけのはずだった。

\*\*\*

海底に雪が降っていた。深海の間では星も雨も見ることはないが、雪だけは例外だ。

マリンスノーと呼ばれる、肉眼で観察可能な海中懸濁物である。球状、彗星状、糸状、平板状など様々な形をした海中の雪が、静か

に海中へと降り積もっていく。

「綺麗だな……」

機内の全周囲モニタから周囲の神秘的な光景を目の当たりにして、アランは思わず感嘆の吐息を漏らした。これまでの任務でも何度か眼にしたことがなかったわけではないが、全周に渡って広がるこれほどの規模のものは初めて見る。

「哨戒任務中に何を呆けている、中尉」

どうやら機内の通信回線に紛れ込んでしまったらしい。からかい混じりに飛んできた叱声に、アランは首を竦めた。

「でも、本当に綺麗ですよ。宝石みたいだ」

「語彙が貧困な奴だな。第一、どうせプラנקトンの死骸か何かだろう。餌にはなるらしいがなあ」

情緒の欠片もないなあ、という呟きを、アランは内心に押し込んだ。生真面目で才覚もあり、気さくな所もあるが、会話のセンスには致命的に欠ける。それが、部下たちからカールゼンへの評価である。それと似たような評価が自分に対しても為されていることを、金の髪の中尉は幸か不幸かまだ知らない。左右へと回頭させていた頭部を前方へと向け直すと、再び両脚を駆動させた。

フェルマント・ドライヴを最低限度に抑え、暗闇に溶け込むようにして進む。フェルマントは反応の際に燐光を発してしまうため、相手の眼を避ける必要がある任務には不向きなのだ。流し込む酸素の量を調整することで、機体表面に薄く膜を貼る程度に留める。状況に応じた運用の柔軟性こそ、フェルマント・ドライヴ搭載の機甲兵の利便性だ。

本国での休暇、兵員補充、訓練をこなした後、カールゼン率いる第三艦隊機甲兵部隊は再び戦時の深海へと繰り出した。前線基地付近で任務に着くためである。前回同様の激戦区勤務に部隊員は溜息を漏らしたものだ。アランはラムサスと久々に戦列を並べる今回の任務に常になくリラックスしている自分を自覚していた。この男と一緒にいれば、何でもできる気がする。そう思うだけの時間を、

自分とラムサスは積み重ねている。

第三艦隊は大小二十隻で構成され、機甲兵四十八機を擁する。リチャードは四十八の兵を統率すると同時に、十二チーム四機ずつに分けられたうちのチーム（カルテット）を指揮する。昇進し中尉となったアランはリチャードとカルテットを共にし、全体の指揮も取る必要のある彼に代わって、局所的な場面を指揮することになっていた。

「むしろ俺は背中の方が怖いね」

とは、カリューシヤスと同じカルテットに所属することになったラムサスの弁である。ラムサスはアランと同格だが、他艦隊からの配属転換直後ということもあって指揮権は見送られた。それでも同じカルテットに所属する以上、状況に応じての命令系統の優先順位は存在する。プライドの高い少尉は同じ年ながら上官となった二人に愉快ならざる気持ちを抱いている節があつたが、実力の伴つたプレイボーイとして知られるラムサスに対しては特に点が辛くなるようであつた。

人を模した巨人の足が、海底の大地を踏み締める。どちらかと言えば丸みの強い機体が四つ、ゆっくりと歩行している様は、本人たちの真剣さに反比例して、傍から見れば微笑ましくすらあつた。僅かに巻き上がった砂は、踊るように舞い上がって再び地へと落ちてゆく。微かな振動はコクピットに伝わるまでに全てキャンセルされており、歩行に沿って上下する視界がどこか違和感を伴っていた。暗い深海に向けられたセンサは、敵影にぶつかることもなく滑つていく。モニタの表示に眼を凝らしつつ、アランは一つ息を吐いた。哨戒任務というのも変な時間だ。敵影を見付けようと努力するが見付からなければ見付からない方が良くと常に思っている。軍人としてのものは得てしてそういうものだろう。もしかしたら、人生というものさえ。

少し意識が散漫になっていたのだらう、機体の姿勢が僅かにぐらついた。泥に片足を沈ませかけた機体を慌てて立て直す。

「大丈夫ですか？ クーリッジ中尉」

機内に流れ込んできた、心地良いメゾソプラノ。耳朶を擦るそれに、アランは苦笑しかけた頬を引き締めた。

「済まない。問題ないよ……ブライク少尉」

機甲兵の視界は決して広いものではない。数百メートルのレベルで切り立った崖に挟まれた狭い回廊で、先行する同僚の機影が僅かに手を振るのをセンサが捉えた。オールグリーン。このまま進行してよし。

何事も無ければ、一時間後には拠点に帰還することになる。機甲兵の乗り心地は決して悪いものではないが、閉所に数時間も閉じ込められるのは流石に御免被りたいものであった。拠点の狭い共同部屋がこれだけ恋しく思えるとは。

深海の世界においては、人間はドーム都市など人工の領域内では生き延びることができない。結果として、居住区域は面として広がるのが難しく、各地にある点を線で繋ぐような形で生活圏が構成されていた。拠点となる場所は、ドームの作りやすい平坦な台地のほか、軍事的に重要な峡谷、そして遺跡とフェルマント採掘現場

第三艦隊はこれから二カ月の間、前線に近い採掘現場 即ち、最も激戦が予想される地区の一つ、ボーグラン拠点での警戒任務に当たることになっていた。



## 第2章(2)

\*\*\*

帰還シークエンスを開始。

拠点に設けられた発射孔に戻り、海水を抜く。フェルマント・ドライヴに投入された余剰酸素を放出。反圧領域が残った状態で艦内を歩行させるのは流石に危険だ。強制的に吸い出される水が、断末魔のような耳障りな音を立てつつ、渦を巻いて吐き出された。

係員の指示に従って、格納庫へと移動。誘導波に沿って行われるから、操縦者としては特に意識する必要はない。外部操縦があるならパイロットなどいない方が安全なのだが、生憎と水中では電磁波が数メートルも行かないうちに減衰してしまつたため、遠隔での操作は母艦や拠点に限られる。「機甲兵」に人間が搭乗していなくてはならない由縁だ。オートパイロットの無人機も実用の域にあったが、事前に戦況を予測し行動指令を綿密に行う必要があり、機甲兵と比べどうしても運用性に欠けた。結果として、無人機は「動く砲台」という程度の扱いしか受けていない。

白い耐衝撃パイロットスーツを着た金髪の青年は、機内から身を乗り出して大きく伸びをした。機体の膝を踏み台に二歩で器用に飛び降りると、待ち構えていた整備兵と端末を触れ合わせデータを転送。軽い挨拶を交わすと、整備員は駆け足でアランの機甲兵へと向かっていった。これからの数時間、彼らにとつての戦争が行われるのだろう。すれ違いざまに見えたその頬が、どこか嬉しそうに緩められているのが微笑ましくはあつたけれど。

やや前傾姿勢で待機する灰色のアラン機は、右手に高振動ブレード、左手に水圧弾サブマシンガンを備えたオーソドックスなものである。その隣には、カルテットを組むカールゼンの隊長機が鎮座している。その色は純白。与えられた権限の行使というより、隊長ゆ

えの非明文化された取り決めというところであった。両手に試験段階の小型荷電粒子砲を一丁ずつ、背にバックウエポンとして耐水フェルマント爆薬を四。重武装によって一撃に敵を殲滅することを是とした機体だ。高速機動を生かせる軽量武装が幅を利かせる昨今においてには珍しい設計思想だが、意外と派手好きなカールゼンにはよく似合っている。

アランとほぼ同時に哨戒任務から帰還した同僚たちも、次々と機体を降りて来る。各々が思い思いの動作で開放感を示す中、やはり灰色のETX 280の足元から、ヘルメットを小脇に抱えた人物が歩み寄ってくるのが見えた。

栗色の髪をショートカットにし、やや大股の律動的な歩調で歩み寄る姿は、一見少年と見間違ふ。ただ、パイロットスーツの上からでも確かに見て取れる胸部の膨らみと、左の耳で光るイヤリングが、彼女の性別を主張していた。

「お疲れ様でした、中尉」

同期からの完璧な敬礼に、アランは居心地悪そうにたじろぐ。このあたり、彼がまだ階級組織と向き合っていない証左であろう。

「……あまりそう畏まらないでくれ、ティファ。君にそうされると……その、何だか落ち着かない」

「お言葉ですが、中尉。服務中ははじめを付けるべきかと思ひますので」

澄ました声と、引き締められた口元。……でも、目元の笑いが隠しきれない。困ったような笑みを浮かべたアランは、そのままティファと連れ立って歩き出した。士官学校の同期である彼女とは、それでも正式な入隊後にカルテットを組むのは初めてだ。リチャード・カールゼン中佐、アラン・クーリッジ中尉、ティファ・ブライク少尉、そしてエーリツヒ・ファウゼン少尉の四名から成るカルテット ラムダチーム。

格納庫に隣接するブリーフィング・ルームには、既にカールゼンの姿がある。氷蒼色の瞳を端末により投影された画面に向ける中佐

の下に部下が集まり、哨戒任務の最後にデブリーフィングを行うのだ。画面から眼を逸らさないまま、幾つかの報告がやり取りされる。同じ区域を調査してきたのだから儀礼的なものには過ぎないのだが、僅かな違和感や発見を共有することが時に重大な影響を与えるものだ。アランにも既に飲み込めていた。

「敵影も、痕跡も発見されませんでした。メモリをご覧になりますか」

「いや、構わない……が」

顎を左手で摘むようにして、中佐がどこか訝しげに呟く。合点の行かないことに思考を巡らす時の彼のクセ。少壮の弁護士めいた風貌の彼がやると、どこことなく高級の文官のようにも見える。その実は武官のエースだというのだから分らないものだ。

「何か」

アランの端的な問いに、その視線がこちらを向いた。穏やかな光に包まれたその視線が、敵に向かうときには冷たい刃になることを、金髪の部下は良く知っている。この上官は、例え訓練の時であっても「敵」には手を抜かないのだ。

「妙だな。拠点が動くワケでなし、連邦の斥候が近くまで来ていても可笑しくない」

「しばらく侵攻が無い、ということですか」

希望的観測に過ぎるティファの問いに、カールゼンはやはり首を横に振った。

「そう考えたい所だが……。この周辺を空白にするほど可愛げのある連中だとも思えん。或いは、もう十分に情報が集まっている、か」

その言葉に看過し得ぬモノを感じて、アランは咄嗟に口を挟んだ

「……中佐、それは」

「とにかく、警戒は固めておいた方が良さそうだ。疑うのはあいつの仕事の筈なんだがな」

「……は？」

訝しげな部下の声には答えず、カールゼンは一瞬顔を顰める。デ

ブリーフィングの終了を宣言すると、一足先に格納庫を出ていった。アランとティファに軽く一礼して、無言のままにエーリツヒも去る。この無口な新人が最低限度以上の言葉を発したところを、アランはまだ聞いたことがない。

ブリーフィング・ルームには同期の男女が残される。これで勤務は終了、ここから五時間は勤務時間外だ　　ということとは。

「ああ、疲れた！　飲み物買って来てよ、アラン」  
果たして、ティファはそう宣った。

\*\*\*

(ここまで豹変されると、いつそすがすがしいなあ)

苦笑を押し隠しきれないまま、アランは手近な販売機に向かって歩き始める。同じ部屋の隅に簡易式ながらベンダーが設置されているので、「パシられている」とは言っても左程の手間ではない。

「いつものやつ」

「はいはい」

行き付けのレストランよろしく背中から掛けられた声に改めて苦笑しつつ、ベンダーに端末を押し当てた。機甲兵の管理にも使用する端末は、給与から健康管理まであらゆる個人情報を集積させたものであり、通信機にもなれば財布代わりにもなる。慣れた手付きで「いつもの」銘柄のコーヒーを二本落とすと、一本を後ろ手に軽く放り投げた。緩やかに放物線を描いたコーヒー缶は、狙い澄ましたようにティファの手元に収まる。振り返らずとも、缶を両手で掴んだ軽い音でそれが分かった。

何となく、振り返りたくない気がしたのも確かだ。

「ナイスキャッチ」

「もうちょっと丁寧に渡してよね」

グローブではブルタブが開けにくいのか、やや手こずるような気配。妙な可愛げに、バレないようにこっそりと笑みを浮かべる。自

分もプルタブを開けると、思い切つて喉に流し込んだ。どこかその行動が自棄酒に近いことには気付かないフリ。

まだ士官学校の学生　軍属に過ぎなかった頃から、訓練後によくこうしてコーヒーを飲むのが習慣だった。ブラツクの苦味が喉元を滑り落ちる。酒も嫌いではないが、任地で気兼ねなく飲めるといふ点ではこちらの方が上だろう。

そう言えばラムサスは紅茶党だったよな、とこの場にはいない親友のことを思い浮かべた。女の趣味に合わせることに躊躇しない男だったが、こればかりは譲らなかつた。ティファとも、それで何度もケンカになつていたような気がする。

ティファとラムサス。言うべき言葉があるはずなのに、身体どこかがそれを拒絶している。

「やっぱり、君に上官扱いされるのは慣れないな」

口を突いて出るのは、そんな色気の欠片もない言葉だった。やはり、彼のようにはいかないらしい。横目で見やつた彼女は、短い髪を片手で弄びながら、どことなく不機嫌そうな様子を見せる。

「私だつて慣れないけどね。仕方ないじゃない、そんなもの」

数日前までの同輩が上官になる　割り切りの良さは彼女らしい所ではあつたが、ここではやはりアランの不甲斐なさこそが咎められるべきものだろう。階級を傘に着る上官は嫌われて然るべきだが、指揮系統を崩さないために最低限度の格差は必要なのである。何事につけ、気を回し過ぎることは反つて避けられるべきことだった。

「ごめん、失言だつたよ」

「分かれば宜しい」

気取つたような声。栗色の髪がさらりと揺れ、ブリーフィング・ルームの薄暗い照明を受けて微かに瞬いた。思い切り大きく傾けた缶から、その細い喉へとコーヒーが滑り落ちていく。ジョッキ入りのビールを飲み干したともいうように満足気な息。「大人しい」とは形容しがたい女性だったが、こんな性格でも無ければ男所帯の機甲兵部隊でやっていくのは難しいのだろう。

「どうかしたの」

「……え？」

脈絡もない言葉に、声が裏返る。いつの間にか空になっていた缶を机の上に置いて、茶色のショートカットを揺らした女が　もう、少年少女という年齢ではなくなってしまった　彼の顔を覗き込んでいた。搭乗カプセルの大きさに制約があるために機甲のパイロットは小柄な者が多く、アランも男性平均よりやや小柄だが、彼女は輪をかけて小さい。首の下から覗き込むように見上げる瞳が必然的に上目遣いになっていて、金髪の青年は慄く。慌てて先ほどの哨戒中の自機の動作を思い起こした。

「確かに取り替えたばかりの脚部の動作が不安定で庇いがちだったけど……」

同じ型の部品だからと安心してはいたが、ちよつとばかりZMP制御の計算をやり直させなくてはいけないかも知れない。脳波制御を主なインタフェースとする機甲兵はデリケートなのだ。だからこそ、純軍事的には必要性の薄い人型をわざわざ取っている。

「そうじゃなくてさ」

思考の波に溺れかけたアランを引っ張り上げて、ティファは苦笑した。小さな笑窪がその頬に現れる。

「何か、様子が変だよ。どうにもギクシャクしてるしさ」

「……別に、俺はラムサスじゃないし。女の前で多少ギクシャクするのは当たり前だろ」

「はい、ダウト」

眼前に突き出された指に、怯んだように頭を引いてしまう。ほっそりとした、小さな手。白魚のような、と形容するには少しばかり鍛えられ過ぎていたけれども、女性的なしなやかさを決して失ってはいなかった。腰の高さのデスクにもたれ掛かり、後ろ手に回した両手をつく。

「別に、『私の前で』なんて一言も言っていないじゃない。……ま、自覚症状はあるってことか」

やはり自分は相当に分かりやすい人間なのかもしれないな、とアランは諦め気味に呻いた。動作と気持ち直結してしまうあたり、まだまだ修行が足りない。

「で、どうしたのかな、少年。お姉さんに話してみてご覧なさい」  
そう言っただけで手を当てふんぞり返る彼女の姿は、大人ぶろうとしている少女のようにも見える。アランは、この場が軍の最前線のブリーフィング・ルームではなく、故郷ウルズ・ドームの士官学校の一室であるかのような既視感に囚われた。そこはかたなく甘美で、どこか苦味を伴った泡沫。

「婚約したんだって？ ラムサスと」

喉の奥に引つ掛かっていたようだった言葉が、するりと溶け出してきたような気がした。一字一句違わぬその台詞を言うためだけに、この時間が与えられたかのような錯覚。

「……うん」

一瞬躊躇うような気配の後で、彼女は首を縦に振った。その瞳に喜びよりもどこか悄然とした色合いが浮かんでいるのを見て取って、金髪の青年は戸惑う。おめでとう、と続けようとした言葉が、その形を取る前に弾けて消えた。

後から振り返ってみれば、経過した時間は左程のものでは無かったのだらう。だが、油の差されていない歯車のようにギクシャクとした空間は、二人の距離を磨り潰し、引き伸ばし、埋めがたいものへと変質させていた。

重たげな空気を破ったのはティファの方だった。

「でも、気にしなくて良いよ。同僚なんだし、これまでみたいに楽しくやろうよ」

何をどう気にしなくて良いのか。流石にそれを問い返すほど、朴念仁ではない。気不味い空気を相手に負わせてしまった背徳感から逃れるように、アランは敢えて諧謔的な言葉を発した。

「今は上官と部下だろ」

「……一本取られたわね、アランなんか」

女はクスリと笑う。どこか猫めいたその笑いから、アランはやや苦勞して視線を外した。あの日から変わらないコーヒーの苦味だけが、いつまでも喉に残り続けている。

そう言えば奢りなのかな、とアランがふと気付いたのは一時間後のことだった。

「良いのかよ、ラムサス」

「何が」

「婚約者と親友の逢引現場を放置しといて良いのかってこと」

無粋を煮詰めてエキスを取り出したかのような発言をかましたカリューシャスに、青い髪的青年士官は何でもないかのように首を振った。ケンカの訪問販売をすげなく断られた気分で、カリューシャスは追うように続ける。つい先ほど見掛けた光景に、どちらかと言えば意地の悪い好奇心を喚起されたのである。

「心配とかしねーの？」

「別に？ アイツがそんな甲斐性持ちなら、今頃あの二人にオレが立ち入る隙間は無かつただろうよ」

「ま、違くない」

気に食わない男ではあるが、同期の同僚としての会話ぐらいはする。その言葉の端々に棘が混じってしまうのは、まだ二十代中ほどという年齢にあつては仕方のないことであつた。パイロットスーツに身を包んだ中尉と少尉の組み合わせは、先ほどカールゼン率いるカルテットが帰還したばかりの格納庫にいる。青い機甲兵に立てかけられた簡易梯子を手馴れた様子で登ると、ラムサスはハッチを開けてその中に滑り込んだ。良くも悪くも目立つた塗装を施された機体は、そのパイロットの性格を反映してどこか慇懃無礼とした風情を湛えている。

「随分な気合いですね、中尉」

まだ哨戒の開始までには間がある。機体に乗る込むにはやや早い時間帯だった。昇進したばかりで浮かれているのだ、というカリユ



「シヤスの邪推を嘲笑うように、開けられたままのハツチから面白がるような声が返る。」

「この中の方が落ち着くんだよ。オレが唯一自由でいられる場所さ」「へえ、毎晩毎晩さぞや自由でいらっしやるかと思っておりますがね」

最前線の基地とは言え、事務管理は必要だ。機甲兵部隊の中と比べると、拠点内における男女比率はラムサスのような男にとって好ましい方向に推移している。「最後の余暇を楽しんでいるのさ」とは、その方面で悪名高い青い髪の上官に向けられた公然の域にある陰口だった。付近にいる警備兵たちの表情も、アランなどに向ける表情と比べると心なしか冷たいものに見える。最も、これはラムサスが別艦隊から配属転換を受けたばかりということもあるのだろう。「快樂と安樂は分けて扱う主義ってこと」

いまここでこの男を射殺しても許されるのではないか　カリユーシヤス・イワブチ少尉は七割ほど本気で腰のレーザーガンに手を掛けた。ローレンハイムの敵兵士を天国に送り届けるより、眼前の「味方」を地獄に叩き込んだ方が世のため人のためになるに違いない。この日、部下による乗艦の射殺事件が生じずに済んだ理由は、ちやうど更に階級が上の人物が格納庫に入ってきたという幸運に過ぎなかった。

上官の指示に敬礼で返し、カリユーシヤスは自らの機体へと走る。ラムサスのものと同じETX 280、ただし色はベースカラーの灰色。機体性能には違いがないし、チームリーダーでもないものが塗装をしてもただの自己顕示にしか過ぎないことは理解できている。ただ、理解と感情的な納得が直結し得ないものであることを、青年は嫌と言うほど思い知らされていた。慚然とした表情で自らの機体に取り込み、スロットに端末を差し込む。

起動シークエンスを開始。

出力制御、関節稼働値、操縦予測補助機能を再設定。

兄はエリートだった。自分もそう在れると思っていた。だが、実

際に着実に階段を登っているのは同期達だ。「友人」という形容を、いつの頃からか同期に対して使わなくなっている自分に気付かないまま、イワブチ少尉はやや荒っぽく機体の設定を終えた。

「お前との任務つてのも久し振りだな」

ハツチを閉める直前、いけ好かない声が耳朵を打った。その後ろに「せいぜい足を引つ張るなよ」と無言のうちに続けられたような気がして、少尉は棘を投げ返す。

「余裕つすね、中尉」

いつ敵に遭遇するかも分からない。海底の戦場では、僅かな機体の損傷が死に直結する。だというのに、ラムサスの口調はと言えば、「ちよつと買物に行つてくる」というのと変わらない軽さだった。戦場に対する、耐えられないほどの態度の軽さ。隠し切れない自信。全てがカリューシャスの神経を逆撫でする。

「オレが、この物語の主人公だからさ」

その口元に浮かぶふてぶてしい笑みが見えたような気がして、少尉は顔を顰めた。

「教官が教官なら、教え子も教え子だな」

吐き捨てるような言葉にラムサスは何も返さない。

ただ、その紫水晶の瞳だけが冷たい光を湛えてカリューシャスを突き刺した。

## 第2章(3)

\*\*\*

それから数日間は何事もないままに過ぎた。アランとラムサスは旧交を温め、将棋やチェスに興じる時間まで持てたのである。ラムサスは何故か婚約者の下に通うこともなく、それが反って「最後の余暇」などという陰口に信憑性を与える結果となっていた。「逃げてるみたいだな」とからかったアランに、青い髪の友人は苦笑気味の笑みまで浮かべてみせたものである。

これもまた同室となったカリューシヤスはと言えば、今頃は同好の氏が集まる別室で、やや色の褪せたオレンジ色の髪を時折くしやりとかき回しつつ、クロスワードパズルに興じているはずだ。無粋と乱雑が手を取り合って人格を成したかのようなあの青年には、世界的なパズル雑誌を定期購読し、自作のパズルを毎号のように応募しているというインドア派な一面もあった。アランも何度か誘われて手を出してみたのだが、日頃から勘が鈍いと言われるこの青年のこと、あまり自分向きではないことに早々に気付いて退散している。「これで二十勝五敗、か。あまり手を抜かなくてもいいぞ、アラン」皮肉げな笑みを浮かべて傍らの紅茶を一口啜った瞬間、赤いアランが視界を埋めた。

並べ直しを始めていた駒を投げ捨てると、アランは戦略の敗者から戦場の戦士へと表情を入れ替えた。自分は指揮官ではない、一個の駒なのだ。どこか自嘲じみたその自負は、この時ばかりは金髪の青年を後押しした。ロツカーから取り出したパイロットスーツを手早く身に付ける。

「こんな時に！ 連邦の奴等は旨い紅茶に対する礼儀を知らないらしいな」

残った紅茶を名残惜しそうに見つめた後、一気に喉に流し込んだ

ラムサスもまた、同僚に投げ渡されたブーツに足を通す。

「総員、第二種警戒配備」

拠点内に響く放送に背を押されるように、アランは部屋から飛び出した。フェルマント・ドライブをはじめとする武装を起動するために、構内に回される電力が抑えられ、既に薄暗くなっている。一米ートルも開けず、ラムサスが付いてきているのが分かった。耐G・衝撃性能を重視したパイロットスーツは平時の行動を阻害しかねない代物だが、既に機甲のパイロットとして思考の翼をためかせ始めた二人にとっては何ら問題ないことだ。白いパイロットスーツを教本通りに着込んだ青年と、胸元を肌蹴させた同い年の青年とは、ただ走っているだけでも一對として扱うのが当然のような、完璧な相互作用を見せる。まるで性格の異なる両名は、まさに互いを補完するために存在するかのようにも思えたのである。

慌ただしく走りだす自動車両にアランが飛び乗り、勢いを付けて飛び込んだラムサスを引つ張り上げる。五名ほどの兵士を載せた自動車両は荒っぽい乗客に抗議にも似た音を立てながら、搭乗すべき乗艦へと走り出す。

「そろそろじゃないかとは思ってたけどな」

「何か気になる点があったのか？」

「いや。そろそろ戦闘がないと飽きる奴もいるだろうぜ」

アランは無言で肩を竦める。以前から、この男には自分のいる場所をどこか劇画のように捉える癖があった。さながら自分は主人公の親友役と言ったところか。脚本家の悪意の犠牲になりがちな役柄だけに、どこか惘然とした面持ちになるのも仕方ないことだった。

十分も掛からない短いドライブの後で辿り着いた格納庫には、優美な曲線を描く白い戦艦が鎮座している。どこか生物じみた印象すら与えるその艦の先頭部分には、その艦の名にふさわしい衝角が設けられていた。

第三艦隊旗艦・ロンベルク。神話の槍の名を冠したこの船が、アランとラムサスを戦場に送り届ける母艦となる。既に二人のものを

含めた十二機の機甲兵が格納庫から搬入を開始されているはずだ。整備兵たちの挙げる大声が格納庫内に反響し、二人の若者の耳朵を力強く打った。

哨戒任務における出発地点はボーグラン拠点に設けられた格納庫だったが、あくまで彼等の所属は第三艦隊　すなわち、船の中なのである。現代において、軍の戦術的な主力となっっているのは機甲兵に他ならないが、それは戦略的な視点における軍艦の必要性を否定しない。フェルマント・ドライヴが無ければ只の鉄塊に過ぎない機甲兵は、あくまで短期活動に適したプラットフォームであるに過ぎない。戦場においてその運用性能を最大限に活かすためには、その母艦となる艦船が不可欠なのである。

自動車両の縁に片手を掛け、示し合わせたかのように左右に飛び降りる。迅速に発艦の準備を進めるロンベルク。全長一五〇メートル、決して小さいとは言えないその艦内を引き続き疾駆し、艦内の格納庫に飛び込んだ。

前傾姿勢で待ち構える自らの乗機　ETX 280。結局塗装は行わず、他のベース機とまるで変わらない容貌であったが、そこにはアランだけの知る愛着のようなものが生まれている。道具は道具であって、状況に応じて更新すべきものであり、必要以上の愛着は危険を招く。だが、こと機甲兵に関して言えば、兵士たちはその危険性を敢えて無視する傾向にあった。

起動シークエンスを開始。  
球形のコクピットに乗り込み、正面のスロットに端末を挿し込む。認証　本人と確認。使用者の全身を常に高速スキャニングすることで本人照合を行うため、作られたばかりのクローンでもない限り他人の使用は不可能だ。それですら、数瞬後には本人のデータが書き換わり別人として扱われる。

過去の起動データが呼び出され、機体を再設定。出力制御、関節稼働値、行動予測、すべてがアラン専用仕様へ。

【Welcome Lieutenant Alan.】

表示とともに立体操作盤が出現する。搭乗口閉鎖、非常設備の確認を手動で行い、しかる後にヘルメットを機体に連結。実戦も二桁に届き、身体に染み込んだマニュアルが自然と気持ちを昂ぶらせていく。自らの手足同様に動かすにはまだ修練が足りないが、すっかり馴染んだコクピットが愛おしく感じられる。

僅かな振動が、機体ごとアランを揺らした。ロンベルクが発艦したのだろう。既に戦場の興奮に浸され始めていた脳が、溢れ出るアドレナリンに満たされていく。

同時刻、リチャード・カールゼン中佐の姿は艦橋にあつた。第三艦隊の首脳陣が揃う中に、一回り階級が下がる彼も含まれている。

「いったい何処から湧いて出おつたのだ、奴等は!？」

迫るローレンハイムの軍勢は、確認できているだけでも第三艦隊に匹敵する。これだけの勢力がまるで気付かれずに接近するなど、有り得べからざることだった。

「どうということだね、カールゼン中佐？」

酷吏と形容したくなる容貌の参謀長の言葉に、カールゼンは内心で溜息を吐く。つい先程敵影を発見したのは機甲兵部隊だが、これまで予兆を何一つ掴めなかったのも機甲兵部隊である。隊長としては本国の諜報セクションに文句の一つや二つを投げ付けてやりたいところだったが、生憎と今回は彼自身が務めざるを得ないようだった。

(内通者がいるのよ。それも、あなた達に近いところに)

エレーナの言葉が頭を掠める。

「第三艦隊に所属する全四十八機で規定通りの哨戒を行っておりましたが」

「ここは前線だぞ。念入りな哨戒が必要だとは考えなかったのかね」  
これだから玩具なんぞに頼りたくないのだ、という聞こえよがしの嫌味を表情筋一つ動かさずに受け流す。華々しい機甲兵の活躍を快く思わない者は軍部に少なくなかった。地上時代においても陸・

海・空それぞれの軍が自らの重要性和有用性を競い合っていたというが、それが場と形式を移して再構成されただけのことだ。

相手がこのような態度なら、こちらも慇懃無礼の見本市となるだけのことである。

「失礼致しました。マニュアルの見直しを進めましょう」

「中佐！ 貴様……！」

「そこまでだ。時間がない。問責はまずこの事態を抜けてからで構わんだろうよ」

鷹揚な静止の声を掛けた第三艦隊隊長へと、参謀長が渋々とした様子で向き直る。第三艦隊隊長はカールゼンと左程年齢の変わらない女性だが、容姿ではなくその実力と信望で現在の座を勝ち取っていた。

「中佐。報告を」

「南東十八キロ地点に敵艦隊、艦艇十七、おそらく機甲兵は四十前後。二十キロ地帯の暗黒領域に潜んでいたのでしょうか。残存兵力があることを想定しておいた方が良さそうです」

「結構。海溝の次はボーグラン拠点か。バターンナイフで權益を薄く切り取るつもりかな」

「ですがまあ、バターンというのは鮮度が悪くなると途端に不味くなるものです」

「ふむ。まあ、むざむざ新品を食わせてやる必要もあるまいよ」

立ち上がった艦隊長は、立て続けざまに指示を出した。

「ラムダーより各機へ」

カールゼンから隊内の全機に向けて通信が入る。慌ただししい発艦だったため、通常の作戦前のようなブリーフィングは行われていない。恐らくは突発的な遭遇戦であろう。ある意味で、戦士としての能力が最も評価される状況と言えた。

最も、敵にとっても「突発的」なのかどうかは分からないが。

「確認されている地形データと敵軍の配置データを転送する。秘匿

回線A4で受信しろ。以降、本作戦中における指示は同回線を参照すること」

モニタに表示された敵の配置。推定される機甲兵は四十機。敵が、いる。手を伸ばせばすぐ届きそうなそこに。

「中尉、聞こえるか」

隊内の専用回線を通じて、カールゼンの声がアランの耳に届いた。隊長であるリチャードには、回線を一時的に自分専用にする権限も与えられており、隊全体への連絡のほか個人的な連絡にも使用することがある。だが

「カールゼン中佐。第二種警戒態勢での個人通信は禁止されているはずですが」

「……固いことは言うな」

僅かに気色ばんだアランに苦笑を返すと、カールゼンは用件を思い出したようだった。

「ラムサスとカリューシヤスに注意しろ」

「……は？」

「あの問題児どもを抑えるのはお前に任せる」

「はあ……気を付けます」

「ああ、そうしてくれ」

何とか返答を返したアランだったが、内心では違和感を隠し切れずにいた。わざわざ作戦行動直前に連絡をしてきたにしては、内容が曖昧過ぎる。何を言われたのかもよく分からないままではあったが、一度頭を振るとアランは前方を見直した。



## 第2章(3)(後書き)

いよいよ戦闘シーン。ここまで長かった……。

## 第2章(4)

\*\*\*

標準時一四〇五。

両軍が向き合ったのは、ボーグラン拠点から南に十キロ、水深三〇〇メートルの地点だった。急峻な海底山が多く、艦艇にとっては行動が束縛されがちな地域。エンブローアの勢力圏内であり、周辺の暗黒領域の踏査もエンブローア側の方が進んでいる。ラムサスに言わせるならば、彼の活躍のために用意されたかのような舞台であった。

後に「第三次ボーグラン遭遇戦」と呼称されることになる闘いは、何らの戦術的華々しさも無く、教本をなぞるかのような感動の無さで開幕することになる。

「撃て(ファイア)！」

「撃て(ファイア)！」

「撃て(ファイア)！」

艦砲同士の射撃の応酬が始まる。深海を貫く光の波濤が、両軍の間に横たわる三五〇〇メートルの距離を照らし出した。フェルマント応用技術が進んだ昨今、戦艦には基本的にフェルマント領域のパリアが展開されており、艦主砲と言えど致命傷を与えるのは難しい。このタイミングで勝敗を決せられるとは、よほどの楽観者でもなければ考えていない。様式美の渦の中で、運悪くジョーカーを引き当てた小型艦二隻が爆発に飲み込まれた。炸裂する光芒の中で、数百の命が只の数字となって消化される。

標準時一四三〇。

彼我の直線距離が三〇〇〇メートルを切る。

「ラムダ2、ゲット・レディ。ゴー」

フェルマント・ドライブを始動。不可視の障壁が機械の兵士を包み込む。滑るように進む艦の側面で、次々開け放たれるハッチ。母艦から切り離される機甲兵。泳ぎ出すというより、飛び出すテンポと軽快さ。漆黒の深海、彼らの宙を舞う。ここからは格闘戦<sup>ドッキング・ファイト</sup>。機甲兵の時間だ。

秒速五十メートルの自律する弾丸。天使が瞬く合間に鎌を振る、四十八体の死神。

「ラムダ1より全機へ。指示体系をカルテットに移行　叩き潰せ！」

カールゼンの指示で一斉に散開。一群の流星と化し、星の海ならぬ深海を自在に舞う。一拍遅れ、球形の無人機が百、後を追うように飛び出した。背面と脚部のスラスタを最大出力に。高速で後ろに流れ行く景色を横目に、全方位モニタから伝わるあらゆる情報を一拳に脳内に叩き込んでいく。

（　十時方向俯角二十、九時方向俯角三十四　）  
対物センサが敵機の場合を識別すると同時に、アランは自らの駆る機甲兵を躍動させた。フェルマント・ドライブによって作り出された耐圧空間の中で、機体からの噴流が深海の水を揺らしていく。動力音も、腕の痺れも、全ては戦場の高波の中に消えてゆく。

眼前に迫る、見慣れた敵機。RG281K。機体性能はETX 280とほぼ同等、ベースカラーは紺。やや腕部が大きく造られており、フェルマント領域は上半身寄り。戦闘に必要なデータを反射的にスクリーンにロードしつつ、アランは高速で機体を回転<sup>ロール</sup>。スピードを殺さずに水圧弾ライフルの直撃を躲す。ロールに次ぐロールに踊る内蔵も慣れたものだ。岩肌を穿つ弾痕。  
（お返しだッ）

跳び上がりつつ右手の水圧弾サブマシンガンを速射。至近距離で生み出された無形の弾丸は、フェルマント領域による減速を受けながらも、敵に着弾し僅かに姿勢をよるめかせる。体感時間にして僅かコンマ五秒、だが機甲兵同士の戦においては充分過ぎる時間。加

速。自らの機体のフェルマント領域を割り込ませるように敵の領域を割く。双方の反力領域のぶつかり合い、その僅かに開いた隙間にねじ込まれた銃口。引き金を引く。炸裂した衝撃が致命傷となる前に、無人機の援護射撃を後方に跳んで回避。昼に食べたヌードルが逆流するような不快感。脚部スラスタの推力を最大限に、すれ違わずにブレードの一撃で無人機を破壊する。爆発。

海底における闘いは、平面でもなければ三次元とも言えない。地上戦の時代には高所を取るのがセオリーとされ、星間戦争時代には半球状の包囲網など無重力に応じた戦法が生み出されてきたが、深海の高速戦闘ではまだ常識が確立されていない。戦闘の度、いかに相手を出し抜き出し抜かれるか。命を掛けた騙し合いの世界だ。

海底の砂地を蹴り、峡谷の壁面を蹴つてさらに跳躍。敵機の上に戻ると、一気にその刃を突き落とす。防御。纏れ合うように剣戟。高速で振動するブレードの刃が、反力領域に潜り、機体の装甲を掠める。サブマシンガンの連射。暴れ狂う濁流が過ぎ去った後には、半壊した機体しか残されていない。

これで一機！

一瞬生じた慢心。次の敵を探そうと視野を広げたアラン機に、上方から一気に踊りかかる機影。既に回避が間に合わない距離。

(くっ)

思わず呻いた刹那。来るべき衝撃を前にしたアランの前を、高密度電粒子砲の連撃が通り過ぎた。こんなことができる機体は

「右後背への反応が遅いぞ。悪いクセは早目に直せ、ラムダ2」

純白の隊長機が漆黒の闇に輝く。返事を待たないまま加速した力ールゼン機は、敵機の渦に飛び込むと、摺り抜けざまにバックウエポンの一つを切り離す。地に着弾すると同時に炸裂した耐水フェルマント爆薬が振りまく破壊の雨。

急激な酸素注入によって莫大な反力を生み出したフェルマントをハンマーのように叩き付け、酸素切れによって反力領域が一瞬で崩壊することを利用して水圧を強烈な打撃へと変える、二段構えの武装

防護の要として使われるフェルマントが武器としても有用であることを如実に示すものだった。

轟音に惹かれ、灯りに群がる虫のように敵機がカールゼンに殺到してゆく。有人無人合わせて三機を相手取りながらも、なおリチャードは機中で余裕の笑みを浮かべていた。

「遅いッ！」

敢えて非暗号化通信を利用したのは、味方の士気向上と敵への圧迫を考えてのことか。機体を一拳に加速。通常の機甲兵を飛び回る毒蜂とするならば、さながら飛来する鷲の如く。襲いくるビームをなぞるように螺旋を描くと、摺り抜けざまに至近距離から粒子砲の一撃を叩き込む。四散する無人機を一瞥もせず、次の瞬間には機甲兵を撃ち落としてつつ、もう一体の攻撃をいなす。渦巻く水流が岸壁を穿った。

その傍らへ、蒼く染まった機体が、アラン機を掠めるように飛び去る。大剣を頭上で大きく回したラムサス機は、そのままの勢いを叩き付けるように、カールゼンと切り結ぶ敵機に躍り掛った。スラストアーを噴かせ、蒼き魔人が漆黒の空を飛ぶ。

一閃。

一瞬の隙を貫かれた機体が、躊躇うかのように身をくねらせた後、爆散した。

標準時一五二〇。

「畜生ッ」

再三に渡るライフルの斉射を回避され、悪態が口を突く。カリユーシヤスは逃げ足の早い小魚のように飛び回る敵機を追い、回頭を繰り返す。机上のパズルにおいては経験と識見に基づいた思考を見せるこの青年は、戦場においては武勲への焦りからかやや視野狭窄に陥る傾向があった。回避に徹する敵機を追い、気付いたときには三機の無人機に半包囲されている。

右腕にしたたかな一撃を受けつつ離脱できたのは、それでも彼が

非凡なパイロットであることを証明するものであっただろう。使いた物にならなくなった右腕への動力を遮断し、崩れたバランスを再計算。無意識のうちにモニタに流れる数字を脳裏に叩き込み、彼我の戦力の変動を解釈する。

弾切れのないアクア・ライフルは、まさに彼にうつってつけの武器だった。峡谷の壁面を背に、左手だけで矢継ぎ早の連射を繰り返す。機体が万全であれば確実に敵機を照準に収めた筈の弾丸は、だが青白い燐光を掠めるだけに終わる。義務感と焦燥と嫉妬心が、その強固とは言えない精神の牙城を揺らがして、残った三肢の自由すら奪っていく。

撃つ。回避される。

無機質な筈の機甲兵の表情が、自らを嘲笑うものへと変わったように感じられた。

背筋に凍るような危機感。全身を貫いたアラートに従って咄嗟に飛びすさったその足元に、敵機のブレードが突き刺さり、固い岩盤を薄紙のように切り裂いていく。オレンジ色の髪の少尉は、追う側と追われる側が再び切り替えられたことを悟った。

標準時一五四〇。

舞い踊るような動きで、紺の巨人を灰の巨人が掻き回す。二方向からのサブマシンガンの連射を下方に身を投げ出して回避。海底を擦るように転がり、掻き上げられた砂が敵機の視界から自身を遮断する。水圧弾は不可視、無形の弾丸であるが故に、僅かな砂のヴェールでさえも十分な壁として機能するのだ。

追い詰めていた兎を見失った狩人たちは、躊躇うようにその場に漂う。

その背後に輝く銃身。

「いけ、ラムダ4！」

ラムダ3　ティアファ・ブライク少尉の呼び掛けに答えるように、至近距離からのアクア・ライフルの一撃がRGⅡ281Kの頭部を吹き飛ばす。

突如破壊された僚機に驚き、下手人に向き直ったもう一機のRG  
II 281Kは、砂の守護を捨てて飛び出したティファの斬撃を背後  
から浴びて停止した。

ほぼ互角のうちに始まった戦闘は、次第にエンブローア軍が押す  
形で推移するようになっていた。一部の苦闘もあつたが、全体とし  
てはエンブローアの機甲兵がローレンハイムのそれを圧倒している。  
兵力がほぼ互角の状態にあつて、地の利はエンブローアの側にあつ  
た。付近にはローレンハイムの拠点は無く、侵攻者は補給において  
も弱点を抱えているのである。エンブローアの有利は揺るがず、兵  
士たちの心配は祝杯が十分に用意されているかどうかに移りつつあ  
つた。

同時刻、機甲兵部隊の全権限を担うカールゼンは、機甲兵部隊の  
一部と強襲艇一隻を用いた側面攻撃を具申する。暗黒領域を利用し、  
敵の側面を穿ちつつ、想定される増援の勢いを削ぐ。

作戦は標準時一七〇〇を持って実行に移されることとなった。

## 第2章(5)(前書き)

第2章最終話です。



## 第2章(5)

\*\*\*

標準時一六三〇。

長時間を狭い閉鎖空間で過ごすため、活動時間は四時間が目処となっている。酸素もそれに応じた量が搭載されているが、フェルマント・ドライヴを落とせば最低限の生命維持は可能だ。とはいえ、戦場でフェルマントを放棄することは死に直結する。

二時間の戦闘後、一時帰投を許されたアランは、休憩室で寛ぐ友人の姿を発見した。長い足を無造作に投げ出して、迷惑そうな視線を物ともせずソファアの二人分を占有している。三〇分の補給の間、パイロットは体力と精神力の回復に務める。圧縮睡眠ポッドに向かおうとしていたアランは、友人の傍で足を止めた。

深海に行く船内には、大したスペースも娯楽も用意することができない。そんななか、最低限用意された休息所には、入れ替わり立ち代わり兵士たちが訪れていた。いずれの顔もが、間近な勝利へと向けて隠し切れない高揚を湛えている。軍事評論家はその光景を目の当たりにしていれば、その危うさを指摘していたことであろう。何にせよ、結果論に属することではあった。

「お疲れ様、ラムサス」

「機甲兵二機、無人機三機。お前は？」

挨拶代わりに戦果を自慢する友人に苦笑を返しつつ、アランは端末を確認する。

「機甲兵二機、無人機四機。とりあえず俺の勝ち越しだな」

全く、賭け事にでもしていなければやっていけないのだ。機甲兵を玩具呼ばわりする穴熊たちには、ぜひ前線で命を奪い合う経験をしてもらいたいものだ、この年齢にしてはやや純粹過ぎる生真面目さでアランは考えていた。

アランの言葉を受けて大げさに悔しがってみせたラムサスは、立ち上がって壁面に埋め込むように設置された（振動による倒壊を防ぐためだ）ベンダーへと向かう。端末を押し当てると、ラムサスは溜息を漏らした。続いて、商品が落下する音がする。

「どうした、ラムサス」

「野菜バーが売り切れてる……。あれがないと力が出ないんだがな」  
「カロリーは同じだろ」

「気分の問題だよ。オレたちには野菜が足りない。軍の支給食は繊細な俺の胃には重すぎるんだよ」

カロリー・バーを手早く二つに分けると、一方をアランに投げて寄越す。

「……よく言うよ、人の胃にたびたび穴を開けようとする癖に」

「生真面目過ぎるよ、お前さんは」

アランはやや慚然とした表情で蒼色の髪の友人を見やった。生真面目さは彼にとって先天的な属性に違いないのだが、それに磨きを掛けたのはどう考えても眼前の悪友である。金髪の青年が殻を破ろうとするたび、それ以上の暴走によってバランスを元に引き戻そうとするのだ。気付けば徴兵もない時代に同じ軍服を着て、故郷を離れた戦場でチキン・スープ味のカロリー・バーを分け合うことになっていた。溜息を吐きたくもなるうものだが、アランはこの友人と過ごす時間を何だかんだで気に入っている自分に気付いていた。

標準時一七〇〇。

結局、貴重なるべき三〇分をささやかな祝宴に捧げて、アランとラムサスは戦場に舞い戻った。補給を終えた機体と、僅かながら取り戻された精神的安定が、深淵への廻廊となって兵士たちを導く。既に戦場の趨勢は決しており、後は如何にミスなく終戦を迎えるかだと思われた。

戦闘参加から離れていた一隻の強襲艇が戦線を一時離脱し、戦場を大回りして暗黒領域を目指す。地の利を生かした、八機の機甲兵

による一撃離脱攻撃。この作戦が成功すれば、一気に戦闘を終わらせることになる。

標準時一八二〇。

第三艦隊の期待は、最悪の形で裏切られる。

ボーグラン拠点より一六キロ地点までローレンハイム軍を押し込んでいたエンブローア第三艦隊は、同二〇キロ地点の暗黒領域から突如として出現したローレンハイムの増援軍と正対することになるのである。

ローレンハイム軍、半個艦隊。

彼我の距離は四〇〇メートル。叩き付けられるような艦砲の連射が、この遭遇戦が第二局面に突入したことを高らかに宣言した。

\*\*\*

未だ艦内にあつて、ローレンハイムの褐色の軍服に身を包んだ男は満足そうな笑みを閃かせた。半ば身を入れた機甲兵の色は真紅。かつて彼に機甲の何たるかを教えた老人から、「最強の戦闘兵器の色」として指南されたものだ。

ウォルフガング・ペーターゼン。ローレンハイム連邦軍少佐であり、同軍においてトップクラスの機甲兵乗りとして敵味方に知られる男。最も、その評価は少なからぬ侮蔑と嘲笑に彩られたものである。二年前まで、彼は違う色の軍服に身を包み、異なる徽章を肩に付けて闘っていたのだ。三六歳、壮年の入り口を跨ぎ、小柄ながらしなやかな豹を思わせる肢体は、疑いようもなく隆々たる筋肉の鎧に覆われていた。銀灰色の髪の下で、陽気そうな紫水晶アメジストの瞳が僅かに細められる。

「相手は第三艦隊だったな」

「はい。情報源によれば、その通りかと」

非礼さを微塵も感じさせない、それでいて敬意も匂わせない声音

に、内心で苦笑する。自らの立場を考えればしょうがないことではあったし、それを苦にしないだけの豪胆さをこの男は持っていた。「久々の再会、となるわけだ。もしかしたら最後の再会かもしれん。あまりエレーナを泣かせたくないんだがな……」

肉食獣の笑いを浮かべたその男の言葉を、同じカルテットに割り当てられた部下は慇懃無礼に無視してのけた。知りもしない固有名詞など、相手をしている暇はない。

\*\*\*

通信の途絶した八機を思い、苦虫を百疋ほどまとめて噛み潰すような表情を浮かべたカールゼンは顎を摘んだ。思案に耽りつつ、ローレンハイム無人機の水圧弾攻撃を舞うように回避する。

暗黒領域はそれ相応の理由があつて「暗黒」<sup>アンゼン</sup>となる。通信の途絶は必ずしも全滅を意味しないが、急拵えの作戦が失敗したことだけは確かだった。

そして、戦時にあつて、暗黒領域についての国家間の情報交換は行われていない。

半個艦隊もの軍勢を隠しおおせていたということは、エンブローアの暗黒領域がどこにあり、どの程度の大きさであるのか、詳細な部分までローレンハイムに漏れているということだ。

(なるほど。エレーナの奴が疑いたくなるのも当然だな)

側面攻撃を実行させた二つのカルテット、それぞれのリーダーに万が一の場合の対応は指示してある。待ち伏せする敵の大開きした口につつまんだと気付いた瞬間、転進してくれている筈だ。どちらかと言えば、情報が漏れているかどうかの確認のために送り出したようなものである。

裏切り、と断言するには情報が足りない。こちらの通信が解読された可能性もあるし、少なくとも自分以上の戦術家が敵軍にいる可能性もある。

そして、後者については嫌というほど心当たりがあった。

「緋色の悪魔、か……？」

その背に走ったのが戦慄か歓喜か、自分自身でも理解できないままに。

標準時一九〇〇。

三度目の出撃において、アランは二機を同時に相手取ることを強いられていた。いずれも有人機。彼我の戦力差からすれば当然のことであるだろう。強いて好条件を見付けるとすれば、敵は連携が取れておらず一対一が二つでしかない、という点だった。

どんなに優れたパイロットでも、複数の敵を同時に相手取ることには難しい。この生真面目な青年には、どんなに周囲から高い評価と期待を預けられていても、それが故に自分の能力の物差しをねじ曲げないという美徳があった。回避に徹し、敵の疲弊を待つ。滑るように螺旋を描き、時折ロールを交えて、深海に淡い蒼の文字を描いた。

その文字に一本の線を加えるかのように、同色の機甲兵が深海を舞う。それを俯瞰して見ている者がいたとすれば、確かにそれは舞うというのにふさわしい動きだった。洗練の極致にある機動に、射撃もしくは斬撃の才が伴っていれば、彼女は　そう、彼女は凶悪な殺人者となり得ていたことだろう。残念ながら、神かそれに類する存在は、彼女に必要以上の重荷を背負わせるつもりはないようだった。放たれた射撃は、敵機の装甲に僅かな銃痕を刻んだに過ぎず、その戦意を復讐心によって反って駆り立ててしまう。離脱を敢行しようとした灰色の機甲兵の脚部を、細く鋭い閃光が斜めに貫いた。

標準時一九四〇。

エンブローア軍は壊走と後退の境界上でラインダンスを踊りながら、少しずつボーグラン拠点へと移動しつつある。艦艇の援護射撃

と無人機の支援を受けつつ、第三艦隊機甲兵部隊はなお三十七機の兵力を残していた。漆黒の海の中を飛び回りつつ、機甲兵部隊長・カールゼン中佐は戦況の把握を試みる。

後進は、思った以上にうまくいっていた。これだけの兵力差を持つてすれば、一挙に圧殺されても文句は言えない。敵将が余程に慎重な性格であるのか、

(この上何かを隠しているのか)  
後者に年収の十分の一程度なら掛けても良い。その場合、掛けて得た利益を使う機会があるかどうかは怪しいところであつたけれども。

そして、カールゼンはなかなか賭け事に強い男だつた。

標準時一九四五。

「拠点からの通信が沈黙！」

「主砲、エネルギーを充填中！……何だよあれはッ」

報告に私語を交えた管制官を咎めるものは誰もいない。背面のスクリーンで急速に勢力を拡大する光点を見やり、艦橋にいた者たちは絶句する。

「味方ごと吹き飛ばすつもりか!？」

拠点の主砲を持つてすれば、半個艦隊を壊滅させることなど容易い。しかも、それは正面からの場合だ。背後から襲われる場合など

瞬間、スクリーンを溢れ出る輝きが埋めた。

標準時一九五〇。

主砲の斉射はそれたものの、戦力の一五%ほどを味方によって奪われたエンブローア軍は狂乱の極みにあつた。渦巻く波濤に、機甲兵部隊も五機の僚友を失っている。追い打ちを掛けるかのように、敵は残存の機甲兵部隊を一挙に吐き出した。

その中に、真紅。

嫌と言うほどの既視感に襲われ、カールゼンは彼らしくもない行動を取った。戦場で呻き声を漏らしたのだ。機体の通信を秘匿回線からスピーカーに切り替え、怒鳴るように叫ぶ。空气中を遙かに上回る速度を与えられた音が、瞬間的にもう一人の男に届いた。

「同窓会か何かか、この戦場は！」

赤い機体の主は、それで全てを了解したようだった。

かつての友。ウォルフガング・ペーターゼン。

エレーナの言葉と彼自身の予感、凶らずも絶望的な予言になっていたようだった。

背面に巨大なスラスターを装備し、両手持ちの大剣を構えた姿は、さながら舞い降りた悪鬼の如く。滲み出る燐光に包まれたその身は機甲兵にあるまじき鋭角さであり、水を受け流すのではなく切り裂くかに思われた。「ETX 279」、エンブローア工務局製の指揮官用試作機。かつてローレンハイム軍を蹂躪し、現在はエンブローア軍に牙を向く、通称「緋色の悪魔」。

「おお、リック。久しぶりじゃないか。元気にしていたか」

「お陰様でな、ウォルフ。貴様の残した出来の悪い部下どもの再教育で楽しんでいるところさ」

いつそ穏やかな応酬に続いたのは、荷電粒子砲の斉射だった。カールゼンの機体から放たれた瞬間的な連撃を、ウォルフガングの機体は左右に飛ぶように回避してゆく。フェルマント領域ですら完全には圧力を殺せないというのに、鋭角的な鋭い切り返しを多用した美しい軌跡を描くのは、機体スペック故か、操縦者の胆力と技量故か。

「未調整の玩具で俺を捉えようとはいい度胸だ！」

弾丸を回避し、あるいは受け流しつつ、真紅の機甲兵は一気に彼私の距離を詰める。教本のお手本以上に精密で完璧なタイミングの斬撃は、しかし白い機甲兵の銃身で阻まれた。

「なぜ、コレが未調整だと知っている？」

大型の設備を必要とする粒子砲は戦艦主砲として搭載されることが

主であるが、エンブローアが開発した試験機は片手で持ち運べるほどの大きさに縮小されている。その分取扱いが難しく、誤発動や出力の調整ミスが頻出する未完成品だが、落ち着いているように見えて実は派手好きのカールゼンにと、とある人物が手を回してくれたものだ。

この武器は、エンブローアの制式配備ではない。だが、どれだけの人間がそれを知っているというのか。

(やはり、内通者がいるのか！)

一瞬の隙を突くかのように、真紅の機体のブレードが純白の機甲兵を攻め立てる。両刃の大剣を両手持ちで構えたその機体は、構え合う相手の鈍重さを嘲笑うかのように自在に宙を舞った。他の機体との部品共有の難しさから正式採用は行われず、燃費の悪さなど問題も多いが、その運動性能は現行標準のETX 280を凌駕する。

かつての腕前はほぼ互角。

生理的嫌悪感を減衰するためのあらゆる調整が施されたパイロットスーツの内側を、汗が滑り落ちる。

至近距離では殴打用の武器にしかならない荷電粒子砲を投げ付けると、腰のナイフを引き抜く。突進を回避される。振り下ろされる一撃を脚部の装甲で受け流す。コクピットを染める赤いアラート。

スクリーンが紅いのか、敵影が紅いのか区別が付かない。

その時、突如としてウォルフガングの機体が離れた。二人の間に割り込むように、一つの機影が現れる。灰色のオーソドックスなETX 280。装甲に欠損は見られるものの、この戦場においてほぼ十全を保ったその姿。

躊躇なく放たれた弾丸が、真紅の機体の周囲で小さな火花を散らす。ウォルフガングは身動き一つせず、子供の駄々のように繰り返されるそれを受け止めた。

「……ご挨拶だな、アラン。俺の不肖の弟子は元気にやっているか」「何故です」

これほど当たり前で、これほど意味を為さない質問も珍しい。端



的な言葉のうちに、その場の三人共が誤解なく同じ意味を共有していた。

「こっちの方が楽しそうだったからさ」

機体の中で、ウォルフガングが肩を竦める。見えはしないが、間違いなくそのような動作を取ったと確信できた。この男とは長い付き合いなのだ、嫌と言うほど。

「ふざけ」

「待て、アラン！」

飛び出しかけた部下を制止する。五年後ならいざ知らず、今の段階では刺し違えることすら出来はしまい。

戦場にぼつかりと空いたエアポケットの中で、二人と一人は静かに向かい合う。氣勢を削がれたのか、「緋色の悪魔」はやがて静かに踵を返した。背後の二人であれば背から撃ちはしまいという、信用。それは最早「信頼」と名付けて良いものではなく、感傷と親愛ではなく合理と統計の領域に位置する判断だった。

「旧知の嘉で教えておいてやろう、少年。世の中の物事には二つしかない」

僅かに回頭。頭部のセンサーが、まるで紫水晶の眼のように光る。友と呼んだ男の、皮肉げな素顔が透けて見えるような気がした。

「知る必要の無いことと、知りたくもなかったことさ」

標準時二〇一五。

エンブローア共和国軍第三艦隊による一斉射撃がローレンハイム軍に襲い掛かる。カールゼンの指揮のもと散開した機甲兵部隊はこの隙に各々の母艦への旗艦を敢行。新たに数機の犠牲を出しながらも機甲兵部隊の收容を完了した第三艦隊は、急速後退により戦場を放棄する。味方を主砲で撃ちぬいたボーグラン拠点は、葬儀場のような静けさでもって味方艦隊を受け入れた。

第三次ボーグラン遭遇戦。勝利の女神は再びエンブローアに愛想

を尽くしたかに思われた。

## 第2章(5)(後書き)

マクロスFのような戦闘シーンを文章で表現してみたいと言うことで挑戦してみたロボット戦闘ですが……如何でしたでしょうか。

設定的な問題としては、フェルマントなどの背景設定の関係で大規模な作戦が作りにくかったこと。

文章表現的な問題は……これから考えます(汗

### 第3章(1)

「貴方には面倒なことばかりやらせてしまつわね」

純銀の滝を思わせるその髪を揺らし、エレーナ・ロドクリフはきまり悪げに呟いた。特に聴かせるつもりは無かったが、通信の相手にも届いてしまったらしい。耳に心地よいアルトの響きが、彼女の聴覚を優しく擦る。

「別に、それが仕事だから構いませんよ。あまり気分が良いものじゃないですけどね」

全く、その通りだ。仕事だと割り切らなければやっていられない。それができる人間だと思われたからこそ自分は此処にいて、また彼を引き込んでしまったわけなのだけれど。

さて。報告は終わりだ。本当ならここで通信を終えるべきなのだろうが……

周囲を窺ったのは、仕事上の義務という以上に、これから口に出す言葉に柄にもなく羞恥を感じた為だった。短からぬ躊躇いの後、だがいつも通りの毅然とした表情を保つ。

「それで、無事なの？」

主語が欠けたその文章を正確に読み取ったのか、会話の相手はどこからかう音色を含ませて返答を寄越した。自分の安否を問われていると早とちりしないあたり、全くもって可愛げがない。

「無事ですよ、中佐殿は」

思わず安堵の溜息が漏れる。今回の戦いでは、只でさえ無茶をする彼に余計な重荷まで背負わせてしまった。最早打つべき手もなく待つことしかできない身には心臓に悪い。

「何ならご自分で連絡されたらどうです？」

「そういう訳にもいかないでしょう。そちらは外部との通信が途絶している設定だもの」

「姐さんはもうちょっと素直になっても良いと思っけどなあ」

「ふふ、あまり子供がからかうものじゃないわよ」

この程度の言葉であたふたするほど若くはない。自分で思っ  
ていて、ちよつと傷ついた。

全く、全部あの男が悪いのだ。

音声のみの通信であるのを良い事に、エレーナはその端整な顔を皮  
肉げに歪めた。

「ま、貴方も酷い死に方をしない程度に頑張りなさい」

続ける言葉がどこかつっけんどんになってしまったのは、八つ当  
たりなどではないと自分に言い聞かせる。言い聞かせる時点で既に  
負けているのかも知れないが。

苦笑気味に了承の返事を返して、青年からの通話は途切れた。

ほう、と溜息を一つ。

「ごめんなさい……」

短調の音色にも似たその言葉は、略された目的語には届くことな  
く、独りきりの暗闇の中で溶けていく。

一片の言葉を矛とし、浮かべる微笑を楯とする。それが、彼女の  
戦場だった。

\*\*\*

「誤作動!? 誤作動だと!?!」

何とか拠点に辿り着いた第三艦隊を待っていたのは、「開いた口  
が塞がらない」という言葉を現実化したかのような状況だった。

「誤作動で何人吹き飛ばしたと思ってやがる! あれか、地獄行の  
切符の特売でもやってやがったのか!?!」

「いつそ何かの陰謀であつて欲しかったぜ。三文芝居ぐらいにはな  
るだろうよ」

兵士たちは怒りよりはむしろ呆れをその表情に浮かべ、軍用ベレ  
ーを力なく投げ捨てる。背後からの主砲の斉射。第三艦隊を襲った  
悲劇は、むしろ喜劇作家の手に依るものだったのだ。客席から見て

いる分には健康的だろうが、一度きりの舞台で台本もなく演じさせられた側はいい面の皮だった。

上官は上官で、壁や床にフラストレーションを吐き出すわけにもいかない。拠点の防御指揮官室には感情の超低気圧が押し寄せていた。

（成程。これが「タイフーン」とやらか）

口には出さない。リチャード・カールゼン中佐はTPOを弁えた人物である。どうせならハリケーンも見てみたい、などと思っていることはおくびにも出さない。せめて視線と口元で「良い気味だ」と親切に伝えてやる程度である。

「貴官には大変申し訳ない仕儀ではあるが、その」

「言い訳は結構だ。次にまた同じことをやってみる……」

周囲に部下がいなければ平手打ち（スパンク）の十や二十は飛んでいても可笑しくない、素晴らしい笑顔だったと、その場にいた下士官は後に語る。敢えて最後まで言い切らなかつた艦隊長の言葉と視線に、同階級の拠点防御指揮官は漂白剤を使ったかのような色になって震え上がった。カールゼンは一つ肩を竦めると、彼とて不満だけで十数枚の報告書を埋め尽くせそうな心境ではあつたが、普段は小娘と侮る相手に完膚無きまで脅し付けられた上官を憐れむ気持ちが優つたのである。、とても公式記録には残せそうにない悪態を小声で呟き続ける上官を追う。危うく顔面に叩き付けられそうになつた外開きのドアを内心慌てて支えようと、部屋の中を振り返つてもう一度だけ肩を竦めた。

半ばはパフォーマンスの意味合いもあつたのだろう、廊下を律動的な歩調で歩いて行く艦隊長の姿には、制御しきれない怒りは見られない。カールゼンが追い付いて来たのを気配で悟つたのか、足を止め首だけで振り返つた。その口元にはどこか皮肉げな笑み。

「本当に、只の誤作動だと思うかい？」

どうして参謀長や他の随員を飛ばして、自分がこのクレームの同

行者に選ばれたのか、カールゼンは自身の予感が正しかったことを悟った。第三艦隊機甲兵部隊長は思案気な表情を浮かべ、顎に左手を当てる常のクセを披露する。

「そうあって欲しいところですが……それにしては、敵軍の動きが妙ですな」

「緋色の悪魔」を含む、温存された機甲兵部隊の投入は、後からデータで確認しても、あまりにも主砲の「誤作動」とタイミングが合い過ぎていた。偶然として切り捨ててしまうこともできるが、最近の状況が状況だけに懐疑的にならざるを得ない。

「ふん、きな臭いな」

吐き捨てるように呟いたその瞳は、だが獲物を前にした狼のように鋭く輝いていた。

内通者の可能性について、この上官に報告すべきか。カールゼンの頭脳が高速で計算結果を打ち出す。

(だが、内通者がいるとすれば機甲兵部隊の可能性が高い) ( )  
哨戒任務。側面攻撃。どちらも機甲兵部隊の拳動が手玉に取られていると考えるのが自然だ。下手をすれば、次の出撃で味方の機甲兵を全く信じられないことになってしまう。無論、自分も例外ではなく。種を蒔く前に、混乱と疑惑という名の雑草を引き抜いて、土壌をきちんと整えてやる必要がある。

既にローレンハイム軍は戦列を整え直し、半包囲の陣容をとってボーグラン拠点を囲んでいる。ご丁寧に、主砲の到達距離を僅かに超えた領域だ。主砲の届く範囲について仲良くデータを交換している筈もなく、嘲笑うかのような佇まいは情報の流出を嫌というほど思い知らせた。

「ちなみに、カールゼン中佐。貴官は酒を嗜むかな？」

「は？ まあ、人並みですが」

唐突な問いに眼を白黒させて月並みな返答を寄越した部下を見やり、艦隊長は悪戯を思い付いた童女のような笑みを浮かべる。

「それなりには飲めるといふことか。結構、少し付き合え」

自棄酒だ、と笑顔で歩き出した上官を内心慌てて追い掛けながら、カールゼンは自分の予感やはり間違っていたのかもしれないと戸惑う。念の為、と口に出した言葉は、どこか自分自身にも言い訳じみて聞こえた。

「しかし、自分などでなくても参謀長殿がいらっしやるのでは」

「あれはダメだ。アルコールと軍服が劇薬反応を起こすと本気で信じているクチでね。この仕事を続けたいなら酒は控えろ、と小言が始まるのがオチさ」

「ははあ……」

「別にかけて悦に入れるような仕事でもないがね」

「それも、参謀長殿の前では言えませんな」

「違うない」

くすり、と微笑を漏らした艦隊長の顔を何故か正視できず、カールゼンは思わず眼を背ける。そういえばつい最近こんなことがあった気がするな、と振り返りながら。

(帰国したら、エレーナに何か土産でも買ってやろう)

言い訳がましく、心の中のメモ帳に朱で書き込んだ。



### 第3章(1)(後書き)

ネタバラシ回その1。

艦隊長さんの元ネタは結構分かりやすいかも知れませんが、いずれ彼女らをメインにした話も考えてみたいのですが、今回はあくまで機甲兵部隊の一兵卒たちの物語ということで、名前すら出していない状態。

カールゼンのおっさんは当初のプロットよりよほど良い目にあっております。

### 第3章(2)

\*\*\*

本国『ウルズ・ドーム』の工務局ほどではないといえ、最前線であるからにはボーグラン拠点にも必要最低限の設備はある。採掘にも機甲 戦闘用ではない、本来の用途での が用いられるため、純軍事的な拠点と比べても潤沢と言つて差し支えないだろう。

先の戦闘で少なからぬ打撃を被つた機甲兵部隊は、いつ終わるとも知れない安寧の時間を最大限に活用して修繕に当たつていた。デリケートな機甲兵を最大限に運用するに当たつては、パイロットと整備兵の信頼関係と意思疎通が欠かせない。傷ついた装甲に触れ、関節の悲鳴に表情を顰めるのは、第三艦隊の一員として戦場にやつてきた整備兵達だ。

必然、その感情は拠点防衛部隊よりは艦隊寄りになる。

彼等が口に出す同情と憤りの言葉に何となく気疲れを感じて、アランは少し離れた橋桁の上から自らの機体を見下ろしていた。聴覚を震わせる歯車の音と、鼻孔を擦る機械油の饅えた匂い。揺蕩う空気は空調すら間に合わないほどに汚れていたけれど、それが反つて心地良い。

(無事に退役できたら、機甲の職人になるのも悪くないかもな)

振つて湧いたようなその感情は、なぜか驚きよりも納得の音色を持って胸中に響いた。できれば、戦闘用ではなくて民生用の いや、工務局でタバコ片手に、下士官を若造とからかうのも、なかなか楽しそうな特権ではないか。時には、訪ねてきた蒼髪の友人と酒を酌み交わすのも悪くはない。白髪の混じつた髪と皺の入つた顔を突き合わせて、若い頃の無茶を肴にしつつ、標準暦二百四十年もの貴腐ワインを傾けるのだ。

「なに悟りきつた爺さんみたいなこと考えてんの」

幸せな未来像に浸っていたアラン・クーリッジ中尉は、背中から掛けられた声にどうしようもない現実引き戻されて、慌てて振り返った。ショートの栗色の髪が、空調の風に揺られている。整備兵たちに混じって自身の機甲を診ていたのだろう、その頬に僅かに煤がこびり付いていた。あまり優れない表情に、やや躊躇いつつも声を掛ける。

「どうだった？」

「データから予想はしてたけど、見事に駆動部を撃ち抜かれてる。取り替えて慣らしてる暇はないし、せめてスラスタが動くように誤魔化してもらおう。足なんて飾りみたいなものだもん。拘りでどうこう言えるほど偉くないし、私」

アランの隣に立ち、手すりに両肘をついて顎を乗せる。やれやれ、と言わんばかりだ。

彼らが二十代の前半を捧げた士官学校では、卒業時の成績と評価に応じて、キャリアの出発点が異なる。機甲兵部隊であれば、上位者は少尉任官、下位者は准尉任官だ。ティファはアランやラムサスと同じく「少尉組」だったが、その後目立った戦績を上げることができず、「准尉組」のキャリアシヤスに追い付かれていた。内心はどうあれ、それを苦にした様子を見せない部分で、彼女の美徳なのだろうと金髪の青年は思う。

「とりあえず、四人とも無事で良かったよ」

「出た、優等生発言」

狙ってやってないところが凄いわね、と褒めているのか貶しているのか判断が付き難いことを言う。表情の選択に困ったアランはとりあえず肩を竦めるに留めた。別に上官のクセを見習ったわけではないが。

「少なくとも、キャリアの奴は絶対にそんなこと思ってないわね。」

あの嫉妬心は国民栄誉賞クラス」

「総務課に推薦状でも送っておいてやれよ」

「そうする。アランの名前使わせてね」

「注意書きを忘れるなよ。『この推薦状はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません』」  
「何ソレ」

二人は共犯者の笑みを浮かべ、喉の奥でクツクツと声を出して笑う。喧騒はどこか遠く、ゆっくりと滑り落ちる時の雫が、心地良い雨となってアランを浸した。そこにどこか後ろめたさを感じていることを自覚して、青年は慄く。

「あいつってほんとバカ。誰もお兄さんと同じになれなんて言っていないのに」

二十五歳で士官学校の機甲兵部隊教練課程を卒業してから、もう三年が経とうとしている。たかが三年、されど三年。ここまで生き延びているというだけで、カリューシャスの才能は「欠けている」には程遠い。だが、本人は部隊のエースと目されていた兄と、エンブローアにおける機甲兵の父と賞賛される祖父とに囲まれて、自身の不遇と不幸とを嘆くことばかりに時間を割いてしまっている。いつそ、機甲とまるで関係のない職業に付いた方が彼のためなのではないか。

それは、近しい友人の誰もが隠し持ち、だが面と向かって本人に叩き付けるには気後れしてしまう類の助言だった。ただ一人、あの蒼い髪の男を除いては。

彼女も、同時に同じ思考の曲がり角に達したのだろう。

「ラムサスは」

その名を出して、ティファは少し困ったような表情を浮かべる。俯いたその唇から溢れた声はか細く、工房の音に掻き消えてしまいきそうだったが、確かに「よく分からない」と聞こえた。

（こんな時に気の利いた台詞の一つでも言えれば良いのにな）

自嘲しつつ、無意識のうちに右手の人差し指で頬を掻いている。気不味い沈黙の城壁を破壊するための言葉という槌を、生憎と生まれる前に落として来てしまったようだった。

そう言えば、と青年は思う。

先程描いた夢想の中で、彼女の居場所はどこにあるのだろうか。  
「ねえ、アラン。私、時々思うんだけど。私達って、もしかしたら  
所詮は神様のボードゲームの駒に過ぎないんじゃないかって」

そう呟くティファの声は、投げ遣りというには少しばかり複雑な響きを伴っていた。唐突な言葉に虚を突かれたアランには頓着せず、彼女は先を続ける。

「七面倒臭いルールで、誰も全貌なんて把握していない。プレーヤ  
ーも今どうなってるかよく分かっていなくて、気付いたら勝ち負け  
が決まってる。ゲームが終わって、オッズ通りに賭金を分配したら、  
残った駒は捨ててしまうの。並べ直した駒は、もうさっきまでの駒  
じゃない」

キングを失った後のポーンにも、王を取られた後の飛車にも、誰  
も興味を示さない。物語はそこで終わる。でも、彼らはどこへ行く  
のだろうか？

「だとしたら、神様って凄いい残酷だよね」  
ティファの言葉に頷くことすらできないままに、アランは立ち尽  
くす。まるで本当に操り人形みたいじゃないか、と内心で自嘲した。  
自分を操っている何者かがいるのであれば、声を大にして問い掛け  
たい。自分に何をやらせるつもりか、自分は何をすべきなのか、と。  
「……この子達はどう思っているのかな？」

彼女の視線を追って、アランは眼下の機甲兵達に眼を向ける。  
人の手に依って造られた、殺戮の機械。親しみやすい姿や名称で  
どんなに取り繕って見たところで、本質的な部分は変わらない。駒  
として使われ、戦争という名の過酷なゲームが終わるまで駆けずり  
回るのだ。

そして、そのゲームが終わりを迎えたならば。  
それが誰かにとってのゲームであったことすら知らなかった登場  
人物たちは、どうすれば良いのだろうか。

「ねえ、アラン。ラムサスが私と婚約したって聞いたとき、貴方は

どう思ったの？」

話題の転換もまた唐突だったが、おそらくそれは、彼女にとっては同じ領域に属する事柄なのだろう。自分が自分であるのか、それすらも分からなくなつて。責めるでもなく、請うでもなく。どこかで誰かと逸れてしまった、迷子のような表情で。

纏めるならば、神の残酷。

「俺は……」

躊躇う。その挙動が全てを雄弁に語つてしまっていることから、敢えて眼を背けて。それが正しいのか確証を得られないままに、口を開く。

「良かった、と思った。君にも、ラムサスにも、幸せになつてほしいと」

彼女は、失望とも納得とも付かない表情を浮かべる。

「……リリシアの分も？」

続けられた言葉に、アランは凍てついた彫像となつた。

リリシア・コーンフィールド。愛称リリイ。享年十九。

五年前、フェルマントの応用法を研究していた軍の施設において密閉壁が破損し、所内の酸素を全て喰われて貴重な人的資源が失われた。その事件での、唯一の民間人の死者。ラムサス・V・コーンフィールドの妹。

そして、アラン・クーリッジと仄かな慕情を交換しつつあった女性。

「リリイは関係ないよ。君達は、お似合いだ。誰が見ても」

意思の力を総動員してその名を口に出したとき、心の奥底が軋みを上げるのを確かに聞いた。そして、その軋みが眼前の彼女にも届いてしまっていることも。ティファはアランの言葉よりも、むしろその軋みに対して口を開いたかに見えた。

「良い子だったものね、リリシアは。……絶望的な程に」

そう、それは絶望かも知れない。酷く薄っぺらで便利な言葉だ。だが、この胸中の重たげな悲鳴を、他にどう表現すれば良いのだろう。

零れ落ちる時の砂粒。ザラザラとしたそれは、粗目のヤスリのように精神をすり減らしていく。鈍い痛み。

「ごめん。ちよつと変だな、私。今の話は、忘れてくれる？」

「仕方ないさ、こんな状況だもの。誰だって変になりもするよ」

気不味げにこちらの様子を窺うティファに、アランは胸中の動揺を押し隠して返す。おそらく、それすらも見透かされているのだろうと予感した。

作業に戻るといつて逃げるように立ち去ったティファを見送る。

寂しさではなく安心が胸中を満たしていることを自覚して、酷く自嘲的な感傷に駆られた。

（相変わらずだな、偽善者）

脳裏に響いたその言葉が誰の声音をとっていたのか、アランには分からない。カリューシャスか、ラムサスか。それとも、アラン・クーリツジ自身か。

機甲兵達の物言わぬ瞳だけが、ただ彼を見上げている。

\*\*\*

「お帰りなさい。中尉殿もやりますか？」

一時的な自室として与えられている拠点内の官舎に帰還すると、同齡の部下が床に寝そべってクロスワードパズルを広げていた。その傍らに乱雑に積み重ねられた同様の書籍類の上に、ティッシュを重ねて菓子を乗せている。行儀悪いこと夥しいが、何となく落ち着いて見えた。上機嫌なのか、大して上手くもない鼻歌まで奏でている。

「ごめん、止めておくよ」

軽く片手を上げて謝るアランを改めて振り返りもせず、「そうで

しょうね」と返す。彼に似合わず言葉が丁寧だったのは、どうやら心ここに在らずであった為らしい。アランは苦笑じみた笑みを浮かべた後で部屋を見回した。二段ベッド二つと小ぶりなテーブルが入っただけでほぼ埋まってしまう狭い四人部屋は、先日の戦闘を経て一人分広くなってしまっている。こんな状況だというのに、持ち主のいない荷物は既にどこかへ運び出され、シーツとマットを外されたベッドが空っぽの木枠を晒していた。

ふと、もう一人の同室者がいないことに気付く。

「ラムサスはいないのか？」

「別に、あの野郎が部屋に落ち着いていないのは今に始まったことじゃないでしょう。どうかしましたか？」

「……いや、大したことじゃないんだ」

ティファとの会話の印象が強過ぎて、ついラムサスを探してしまった。彼を探してどうしようというのか。婚約者と親しげに話してしまったことを謝ろうとでも？ それとも、彼女が彼に疑念を抱いていることを忠告するのか？

（少し、頭冷やそうか）

備え付けのカップにインスタントコーヒーを注ぎ、あぐらを掻いて床に座り込む。口に含んだコーヒーはまだ少し熱過ぎて、ヒリリとした痛みに顔を顰めた。アランの好みからすると、使っている豆がやや苦い。息を吹きかけて冷ましていくと、心の水面も少しずつ静まっていくような気がする。

「ラムサスの奴なら、MP（軍警察）に呼び出されてましたよ」

だが、せっかく落ち着かせた気持ちは、すぐにカリキュシャスによって打ち壊された。いつの間にやらパズルから顔を上げ、悪戯を成功させた子供のような笑みを浮かべる。

「MP？」

軍警察がいったい何の用だと言うのか。民間人にとっての警察以上に、平穩に過ごしている限り、まずご厄介にはなりたくない相手である。



「さあ？ 大方、女絡みじゃないですか」

カリューシヤスの言葉は冗談と苦笑で済ませられそうなものだったが、何故か金髪の青年の中で何かを刺激した。飲みかけのままテーブルに置かれたコーヒーが、小さな波紋を立てる。

「お前、何を知ってるんだよ、カリュー」

「いえ？ 俺は特に何も」

上機嫌な笑みを隠そうともしないまま、オレンジ色の髪の少尉は再びクロスワードパズルに眼を落とす。答えを思い付いたのか、嬉々として鉛筆を動かし始めた。指の周りでペンをくるりと一回転させる。

「ただまあ、この機会に色々面白いことが分かるんじゃないかとは期待してますよ」

「どういうことだよ」

音色の階段を急降下したその声音に気付く様子もなく、カリューシヤスはなおクロスワードに顔を落としたままだ。癩に障る、と急に感じた。

「ペーターゼンと関係の深い奴等を疑うのは当然でしょ」

戦場に「緋色の悪魔」が現れたことは、既に衆知となっている。それだけの影響がその名にあることを誰もが知っていたのだ。だが、アランはその名がここで出てくることに疑問を感じた。本気で、疑問に思っていたのだ。少なくとも自身はそう信じていた。

「何でペーターゼン少佐の名前が出て来るんだ」

「……本当に分からないですか？ 分からない振りをしてるんですか？」

もう一度面を上げて同い年の上官の方を見やる、その瞳に浮かぶのは 侮蔑、嘲笑、そして優越感。少なくとも、向けられて心地よい感情ではないということだけは、鈍いという自覚のある青年にも分かった。

その口から飛び出したのは、つい数週間前にエレーナがカールゼンに語ったものと同じ。ただ、そこに悪意と敵意を加え、とびき

り辛い味付けをしたような言葉だった。内臓を鋭利な刃物で抉るような声に、アランは昔聞いた警句を思い出す。「人を殺すのにナイフは要らない、ただ一片の言葉さえあればいい」。

「内通者が機甲兵部隊の中にいる。その前提に立って、誰が最も可能性が高いか考えてみて下さいよ、中尉。いきなり一兵卒が裏切りを申し出て、それを連邦の奴等がハイハイと受け入れるとでも？ あの裏切りは『緋色の悪魔』だからこそ成功した。だったら、次の裏切りが彼のツテでない保証はどこにもないと思いますかね」「ペーターゼン少佐のツテだという保証もないだろ。そもそも、裏切り者がいると決まったわけじゃない。飛躍し過ぎだよ、カリュー」アランの言うことは正論だった。自覚すらもしていた。だが、それは逆に言えば正論であるという以上の強みがないということでもある。それで十分な時もあるし、そうではない時もあった。今のように。

「それに、ペーターゼン少佐の教え子はラムサスだけじゃない」教官はまだ若い士官が務めることが殆どだ。そもそも、機甲兵が実戦配備されてから未だ四半世紀すら経過していない。必然、一人の教官が何人もの士官候補生を鍛え上げる形になる。

オレンジ色の髪の子は、だが上官の言葉に「救いが無いな」と言わんばかりの笑みを返す。その表情は、童子が言葉遊びで相手を引っかけた時のものと左程変わらない。

「カールゼン中佐の立てた哨戒スケジュールや作戦は、第三艦隊内部の情報。四十八人の中に、あの男の教え子が何人います。……付け加えましょっか。日本海溝よりボーグランの方が被害が大きいということ、その間の変化。即ち、第四艦隊から加わった新参の七機が怪しいってことです」

「何言ってるんだ。第四艦隊は先の戦闘で大打撃を受けてるんだぞ。自分をそんな危険に晒すなんて可笑しいじゃないか」

これ見よがしな溜息。あからさまに相手を苛立たせようとしていることが見えても、憤怒の濁流が胸中で湧き上がっていく。自制心

を総動員して、心のドアに鍵を差し込む。

「だから中尉は甘いと言うんです。そんな状況でいつも生き延びている方が不自然だという当たり前の思考に、どうして辿り着けないんです？」

第三艦隊機甲兵部隊は今回の遭遇戦で既に二十に近い戦死者を出している。帰国後、カールゼンの責任が問われることはほぼ確実だ。そして、そんな状況においても、ラムサス・コーンフィールドは大きな負傷もなく生存している。彼の技量を差し引いたとしても、その確率はいかばかりか。

「何で機体をわざわざ目立つ色に染めたんでしょうかね？」青い機体には致命傷を与えないように』なんて指令が連邦では出てるんじゃないですか？ 何なら、部隊みんな機体を同じ色に染めてみま

す？ はは、幸せの青いイルカだ！」

「死ななかつたのが可笑しいだなんて……そんなことをよく平気で言えるな、お前。不謹慎な話はもう止める」

相手よりも自らを抑えるべくして放たれたその諭しは、短くなりきつた導火線の根元に火花を押し当てて結果となった。急速に沸騰するその感情。

「テメエは本当に偽善者だよ！ 思ったことはないか？ あの男さえないなければって。冗談でも感じたことがないと言えるか？」

既に敬語など振り捨てて、オレンジ色の髪青年は掴みかからんばかりの勢いで言葉を重ねる。その言葉が理由など振り捨て、至極個人的な敵意に満ちる。

「俺はあるね！ いいよなあ、主席サマは！ あんな歩く猥褻物に負けるなんて耐え難い屈辱を味わわずに済むんだからよ！」

「それはお前の個人的な感情だ！ 自分が嫌いな相手は裏切り者呼ばわりかよ！」

「あいつがいなけりゃ、ティファだってお前と」

「カリュー、お前ッ！」

アランがカリューシヤスの胸倉を掴み上げたとき

「おっと、お取り込み中だったかな。出直そうか？」

「ラムサス……」

不敵というよりもふてぶてしい笑みを伴って、最後の同居人が姿を現す。背後で音もなく自動扉が閉じる。

「ケンカなら俺も混ぜてくれよ、どうにも拠点中がギスギスしていいいけないね」

アランから眼をもう一人に移したカリューシャスが、分かりやすく失望の色を浮かべた。

「今日から二人部屋になるんじゃないかと期待してたんだけどな」

「生憎と、此処のMPには良い女がない」

鼻で笑う。

「なかなかの名推理だったな、少尉。国に帰ったらミステリ作家を目指すといい。ただ、探偵役のキャラクターはもうちょっと練った方が面白くなる」

アランの飲みかけのカップを覗き込み、そこで揺れている液体の原料が豆であることを確認すると、心外そうに顔を歪める。

「取り調べでも当たり前のようにコーヒーを出しやがる。茶会党ティーパーティーが黙ってないぜ」

毒気を抜かれた二人が思わず顔を見合わせると、見計らったタイミングで口を挟んだ。

「一つ、付け加えさせてもらおうか」

アランは背筋に冷たい物が流れるのを自覚した。

長い付き合いだ。次の展開は大体読める。この男はカリューシャス以上に人の感情を逆撫でするのが上手い。

そして、いつもアランの制止は間に合わない。

「俺の師匠は確にお前の兄貴の仇だろうがな。オレを恨むのは筋違いってもんだぜ、ブラコン野郎」

爆弾は効果的に炸裂した。

「……貴様アツ！」

「やめるカリューシャス！」

自身の思考が個人的な恨みに起因することを痛烈に皮肉られ、元来がビニールのように脆い堪忍袋に大きな穴が開いた。中に猫を入れても死にはしまい。

「フザケンな、殺す！ 二回殺してやる！」

「保険金は二倍貰えるのかな？ 四階級特進で大佐殿か、カールゼン中佐に敬語を使わせるのも悪くないな」

「ラムサスもそのぐらいにしてくれ！」

暴れ回るカリューシャスをアランは必死に抑え込む。脇の下から両腕で拘束するが、振り回される腕を躲すのでやっつとだ。

害も無さそうなにこやかな笑顔を浮かべるラムサス。憤怒に染まったカリューシャス。

アランにとつて余りにも長いその時間は、唐突に終わった。

「……もういい、放してくれ、アラン」

その拳が力なく垂れる。一瞬の逡巡の後、アランはカリューシャスを解放した。振り乱した髪もそのままに、怒りの余りに制御しきれない足取りでラムサスの脇を擦れ違う。

「殺す。正面からだ。家族と一緒に死んだ方が良かったと思うほどグチャグチャにな」

自動ドアがその殺意に満ちた背中を隠した。女性向けアイドル誌の表紙を飾れそうな程に良い笑顔で、ラムサスは肩を竦めてみせた。「口直ししようぜ。とっておきの茶葉を分けてやるよ。どんな泥水好きも正しい道に宗旨替えしたくなる味だ」

呆然としていた金髪の青年は、蒼髪の青年の言葉に無意識のうちに首肯する。残っていたコーヒーが無残にも流しに捨てられたことに気付かないでいられたのは、むしろ幸福の領域に属することであったかも知れない。

「すまないな、アラン」

掛けられた言葉が謝礼ではなく謝罪であることには、気付かなかった。

### 第3章(2) (後書き)

同期たちの狂騒曲、な回。

とりあえず伏線らしきものをバラまきつつ、三角関係的なものを構築してみました。

### 第3章(3)

\*\*\*

ラムサスから投げ付けられた、痛烈な皮肉。

他人がどう解釈しているかは定かではないが、カリューシャス・イワブチは自分が兄の死を受け止めきれないことをはつきりと自覚していた。それだからこそ、あの擲掬が深く突き刺さったのだということも。

自分がアラン・クーリッジに語った物語が、疑惑の樹海を偏見という名の鎌で強引に切り裂いて作った道に過ぎないという自覚も、確かにあった。

高く高く飛翔していく同期たちを、ただ見上げ続ける。心の楼閣は少しずつ、だが確実に削り取られていく。

(兄貴……俺はどうすればいい?)

真っ直ぐに歩くことができなくなったのは、いつからだっただろうか。

昔は、ただ前に進んでいるだけで良かった。前に進んでいるということすら意識しないままでも、気付けば在るべきところに辿り着けると思っていたのだ。

答えはもう、どこにも見えない。

起動シークエンスを開始。

出力制御、関節稼働値、操縦予測補助機能を再設定。修復された右腕の感触を確認。定着率七十五%、戦闘行動に大きな支障なし。

発艦シークエンス。

予め戦艦に運び込まれた機甲兵を、誘導波によって一時的に拠点内へ移動。発射孔へ。人を模した灰色の機械が、僅かな起動音とともに飲み込まれていく。

「イワブチ少尉、大丈夫かい」

通信を通して聞こえた声に、僅かに顔を顰める。流石は偽善者、抜かりはないといったところか……そこまで考え、はたと気付く。

「ええ、問題ありません。クーリッジ中尉」

あの男が自分に気を遣って、必要がなければ階級を口にしないことには気付いていた。本人は隠しおおせているつもりなのだろうが、悪意のない見下しに気付かないでいられる程子供ではないのだ。なるほど、階級差を確認したくなる程度には憤っているらしい。見え透いた同情よりは余程心地よい。

漆黒の海底に浮かび上がる、青白い燐光。脚部スラスタから吹き出す推進剤。

飛翔する。

鈍い機体の振動だけが、今の自分に許された現実だった。

\*\*\*

エンブローア共和国のボーグラン拠点は、ローレンハイム連邦軍の全面攻勢に晒されつつある。意に沿わぬ異性への執拗な告白のように、間断ない攻撃。ただ疲弊を狙って繰り出されるそれに、意図を悟りつつも踊り続けるしかない。途切れた通信は、本国からの増援がすぐには期待できないことを示していた。

通信が妨害されているということは、情報の途絶のみならず娯楽の減退も意味している。居室のスクリーンはノイズに満ち、肉体的な急速と裏腹に精神への圧力は分針のペースで増大していった。採掘に従事する民間人の間でも軍部に対する不満が高まってきている。調整役は対応に必死だ。

「限界」。誰の精神の中にも、その単純な言葉が忍び寄る。

機甲兵部隊もまた、拠点壁面で蠢動する敵の工作兵を排除するため、度重なる出撃を余儀なくされていた。



アラン・クーリッジ中尉は再び海中の戦場に在る。

拠点破壊してしまう心配がある分、守勢側の行動は制限される。半球型のドーム、その表面近くに位置取らねば、サブマシンガンですら満足に運用できないのだ。

主砲を含め、拠点の砲台群は敵艦隊の牽制に追われている。全方位への射線を確保した設計とはいえ、対空砲火の網を縫って次々と紺色の機影が接近する。

ちなみに狙う区域は「空の中」ではなく「海の底」なのだが、「地図」同様に古来の用語が適用されていた。

渦巻く濁流のように押し寄せる水圧弾と、光の噴流となって襲い掛かるレーザーを、波に乗るように回避してゆく敵機。

「やらせるかよッ」

大声で放つ言葉は、まるで子供向けアニメのキャラクターのようだ。現実逃避気味な自己顕示欲にまですがり付きたくなる心境だった。拠点の壁面を軽く蹴って浮かび上がり、大上段に構えたブレードを振り下ろす。常とは比べ物にならない、緩慢な動作。言うまでもなく回避され、強かな逆撃が加えられる。体勢を崩し、落下。

内心でガッツポーズ。

堕ちてゆく機影を掠めるように、一筋の光芒が深海に光の軌跡を描く。アランへの攻撃で一瞬動きの止まったRG-281Kを捉え、その半身を吹き飛ばす。小規模な爆発。姿勢を整えて着地を成功させたアランは、水を通して伝わってくる振動を堪えつつ、傍らに立つカールゼンを見遣る。

「こんな雑魚相手に引つ掛け問題を作らんといけないとは……」

「教官時代を思い出しますか？」

「いや、先日の模擬戦を思い出すな。あれは酷かった」

互いにより上手い諧謔も思いつけなかった師弟は、それぞれやや苦笑いらしきものを浮かべると、次の獲物を求めて別々の方向に地を蹴った。

「タダでモグラ叩きができるんだ、気張れよお前たち！」

八割方が自棄っぱちで構成された氣勢を受けて、二十機ほどが出撃した第三艦隊機甲兵部隊、あるいはその残党は、沸き起こる波濤の中で無形の弾幕を張る。炸裂する攻防。天空の光届かぬ深海の底に、太陽が堕ちてきたかのような光。

第三艦隊機甲兵部隊に十二あったカルテットは、今や殆ど機能していない。ラムダチームは既にそのうち一人を永遠に失い、ラムサスもカリューシャスと二人きりだ。出撃前のミーティングとも呼べないような短時間でカールゼンが命じたのはただ一つ。各機の間で有機的に連携を取りつつ、戦闘を続行する。聞こえは良いが、要するに「自分で何とかしろ」ということだった。

蒼い機影が飛び退る。その足元に突き刺さる大剣。天井部の外壁を傷付けたその一撃に報復するかのように、固定砲台群の攻撃が壁面を掠めて飛びさってゆく。

打ち鳴らす剣戟。鈍い衝突音が、水中で不気味な弔鐘となつて響く。追う者と追われる者が瞬時に入れ替わり、渦巻く水流が敵味方関係なくその行動を阻害する。

剣戟では埒があかないと判断したのか、蒼い機体はその手に持つ高振動ブレードを眼前の敵に投げ付けた。耐圧領域を抜け、海底の水圧で即座に押し留められた投擲だが、目眩まし程度の効果はあつたらしい。即座に飛び退つたラムサスは、一基の砲台を外部から操作し自機の操作系とリンクさせる。無断で仕事を奪われた砲台手からすれば業腹だろうが、その判断は恐らく正しい。

即座に二射。

機甲兵の携行武器の数倍に相当する威力を誇る銃撃が両腕を破壊し、戦闘能力を奪う。胸部を蹴り飛ばされ、身動きとれないまま闇の中へ。一秒後、別の砲台から飛来したレーザーの一撃が暗闇に一輪の華を咲かせた。美しく、とても残酷な海底の名花。

そのままドームの天井部を踏み締め、ラムサス・コーンフィールドは機体とリンクした砲台を構え直して的を探す。いや、探す必要は微塵も無かった。既に、彼等の周囲を敵が取り囲んでいるのだ。

から。

「……こいつはいい。女を落とすよりよっぽど楽だ」

女権論者が聞けば眼を三角にするような言葉を背に受けて、無形の銃弾が次々と水の障壁を割く。動くことのできないラムサスを援護するべく、灰色の機影が二機、蒼いETX 280へと泳ぎ寄った。

アランは知る由もない。その時、一人の男の中に天啓とも呼ぶべき閃きが堕ちてきたことを。それは陰謀や狡知の類ではあったが、閃きには違いなかった。

続け様に七発を撃ち放し、素早く回頭して次の敵に照準を合わせろ。その右斜め上から降下する敵機。自分の弱点であるだけに意識していたアランの反応は素早かった。

その素早さを僅か五分後に後悔することになるとは思いもしない。降り注ぐ水圧弾を自らの機体のフェルマント領域で受け流しつつ上昇。螺旋を描き、彼我の速度をプラスからゼロ、マイナスへ。スクリーンに浮かぶ照準。センサから得られた諸条件を元に修正。捉えた。

サブマシンガンを一気に撃ち放つ。弾数に制限のない水圧弾でもマシンガンの利点はその速射性能だ。フェルマント領域は絶対の物ではない。弾幕を張りつつ、後ろに控えるラムサスに援護を要請する。

機体が傾いだ。

転落する感覚。呆然。脳裏で疑問符がライندگانスを踊っている。世界から音が消えた。

無意識のうちに手がコンソールに伸び、機体の詳細な状態を呼び出していた。背部スラスタに損傷、戦闘行動に支障あり

脇を掠めて昇っていく水圧弾がやけにゆっくりに見え、突如行動を停止したアランに止めを刺そうとした敵機を追いやる。

着地というよりも墜落という言葉が相応しいような状態で、アランはラムサスとカリューシヤスの側に背中から降り立った。蒼い機体と、灰色の機体。全く同じ姿をしたそれは、どちらも彫像のように固まっている。

呼び掛ける声は、どこか遠くの世界から聞こえてくる気がした。

### 第3章(3)(後書き)

ちょっと間が空いてしまいましたが更新します。

### 第3章(4)

\*\*\*

「アラン……ッ！」

慌ただしく救護室に駆け込んできたティファに、青年はターバンのように包帯を巻いた頭で照れくさそうに笑ってみせた。流石に手を振ったりはしていない。右肩から吊るされた左腕にも処置が施されているからだ。

「大丈夫、ちよつと骨にヒビが入って、身体のおちこちに打撲があるぐらいだから」

「それは普通大丈夫とは言わないぞ、アラン」

自動ドアを潜りつつ、カールゼンは無粋なツッコミを入れた。四人部屋をパステルカラーのカーテンで区切っただけの空間は、三人目の人物を受け入れてやや窮屈になる。

「しかし、よくそれだけの軽傷で済んだな」

「怪我人に対して二言目にはそれですか……」

「いや、これで三言目だ。回収時に声を掛けているからな」

そつという問題じゃない、という部下たちの視線を受け流し、二人の部下を交互に眺めて意地の悪い笑みを浮かべた。

(……まあ、若いうちは色々とあるだろうさ)

口に出したのは真面目な話だ。

「既に事情聴取は終わっているようだが……念の為に確認しておくか。何があつた？」

「背後から攻撃を受けて背面スラスタを破損、落下して胸壁に叩き付けられました。負傷は衝突時のものようです」

「背面からの攻撃、か。つい最近、同じような言葉を聞いたことがある気がするな」

「……やはり中佐もラムサスを疑っておられますか」

「そう不愉快そうな顔をするな。讒言や諛言を素直に入れるようなことはせん」

「諛言は素直に入れて下さい」

ティファが呆れたように肩を竦めるのが横目に見えた。

カールゼンも既に「カリューシヤス理論」を耳にしている。彼がまた、それを上申したがっているということも。余計に話が拗れることが分かっている以上、査問の場上官として席のある自分自身の意見を伝えることが、最大限の譲歩だった。

部下であるアラン・クーリッジ中尉は被弾しつつも大過なく帰還を果たしていた。破壊されたのがスラストーのみであり、十分な援護があれば自力で稼働できたのが大きい。

だが、機体を穿った弾丸はそれ以上の精神的被害を部隊にもたらした。その場で目撃したカリューシヤス・イワブチ少尉の言葉から、ラムサスに対して「同士討ち（フレンドリー・ファイア）」の嫌疑が掛けられたのだ。

台頭する「裏切り者待望論」も拍車を掛けた。内部に敵を飼っていたという時点で軍部の失態にはなるが、分かりやすい理由と敵を与えることで、敗戦続きの軍部に対する風当たりを緩めようという思惑が透ける。裏切り者は英雄と同じ株価で取引されるのだ。

「中佐。宜しく願います」

自分のことのように頭を下げるアランを見遣って、カールゼンは複雑な表情を浮かべた。

「……俺は中立の立場で参加するだけだ。どちらかの肩を持つことはできません」

「ですが！」

「生憎と、ウォルフが敵に回ってから、親しい人間ほど疑おうという嫌なクセがついてしまっただけだ」

例えば、仮初の恋人のことさえも疑わなくてはいけないほどに。エレーナは「機甲兵部隊に裏切り者がいる」と言った。だが、裏

切りが起きる可能性よりも、通信が傍受され、暗号が解読される可能性の方が余程高いはずではないか。それなのに何故、裏切り者がいるという結論に至ることができたのか。

それとも、裏切り者がいると機甲兵部隊長に思わせたかったのか。エレーナ・ロドクリフはリチャード・カールゼンにも伝えていない何かを知っている。

その「何か」に辿り着く手掛かりであるならば、部下と言えど利用するだけの覚悟はあった。だからこそ、自身が怪我を負わされたにも関わらず友人を案じているアランが、眩しく、また危うく見える。

辞意を示して廊下へと出ると、壁にもたれ掛かるように、もう一人の当事者が佇んでいた。流石に顔を合わせるのは気不味いのだろう。ここまで来たのなら中には入れれば良いのにと思わなくもないが、上官が口を出すようなことでもない。

或いは、「気を使っている」つもりなのかも知れなかった。ラムサスからティファへの感情は、愛情というよりもむしろ「友人の背中を押す」類のものではないかと感じるのだ。

「行くぞ、コーンフィールド中尉」

「了解しました、中佐」

敬礼した彼の左手、その薬指に、淡い蒼の光を放つ宝石が光る。

「何だ、この期に及んでようやく婚約者を大切にする気になったか」

「はは、御守りという奴ですよ。恋人は大事にしなくてはいけませんから」

どことなく含みのある視線で見られたような気がして、カールゼンはやや慚然とした表情を浮かべた。

\*\*\*

「コーンフィールド中尉。呼び立てて済まないね」



「いえ、自分への嫌疑はご尤もです」

皮肉を鉄壁の笑顔で流して、ラムサスはむしろ傲然と胸を逸らした。コの字型に長机が並べられ、空いた部分に置かれた丸椅子に浅く腰掛けている。

査問と言えど、要は体の良い吊るし上げだ。拠点防衛指揮官は嬉々とした表情を隠しもせず、ねっとり嫌みたらしい口調でラムサスの日常態度が「いかに軍人らしくないか」を批評し始めた。まずはラムサスへの心証を徹底的に悪くしておこうというところだろう。それはそうだ、この下士官は拠点防衛指揮官の失態を「帳消し」にしてくれるかも知れないカードなのだから。

室内には拠点防衛部隊の上級士官たち、そして第三艦隊の上層部の面々もいる。いち下士官に対する査問にしては錚々たる　　といふよりも、むしろ度を越えた扱いだ。ラムサスの所属が第三艦隊であるため、主導権は拠点防衛指揮官が受け持っていた。

「さて……君の人柄がよく分かったところで、端末のログを見せてもらいたいと思う」

「クーリッジ中尉が攻撃を受けた時点のログは既に提出されている筈ですが」

本当に分かっているような顔を浮かべる。煮ても焼いても食えない男。

「ああ。その件についても仔細に検討しているよ。だが、ぜひとも君がこの拠点に着任してからのデータをじっくり見せてもらいたいと思ってるね」

「我が軍では勤務時間外のプライバシーは尊重されていると思いますが。コーヒーを飲もうが紅茶を飲もうが、小官の自由です」

「ルールというものは作った者に使いやすいようにできている。その有り難い事実を噛み締めているところさ」

「できればお断りしたいですね。私的な交友関係にヒビを入れたくないもので」

「生憎だが。君にその権限はないよ、中尉。君が誰とベッドを共に

したのか、私たちには知る権利がある。単数形だろうと、複数形だろうとね」

直裁な言葉に、室内の女性士官たちから白い眼が向けられ、防衛指揮官は「失敬」と呟くとわざとらしく咳を繰り返した。

「我々は、あらゆる手段を用いて君から真実を聞き出すつもりだ。エンブローアの軍人として、君には協力の義務があり、また進んで協力してくれるものと信じている」

「協力、ね。美しい言葉です」

「意見が共有できて嬉しいよ、中尉」

ラムサスが懐から端末を取り出す。してやったり、といった表情で、防衛指揮官は身を乗り出した。

ここからは、内容の解釈についてが争点か。

何としてでもラムサスを陥れようとするであろう防衛部隊に、いかに抗戦するか。こんな時にも関わらずセクシヨナリズムを持ち出そうとする人々を内心で嘲笑い、またそれに参加しようとしている自分にはつきりと苦笑を浮かべつつ、カールゼンは部下を見た。晒っている。

「申し訳ありません、ここが潮時のようですね」

「何………?」

立ち上がる青年は、自らよりも階級が上の者達を前に、いつそ自分が支配者であるかのように悠然と立ち上がった。

「ちょうど、連邦軍が拠点の入り口を突破したようです」

「何を、馬鹿な………!」

防衛部隊の上級士官がラムサスの言葉に反駁するのと、室内に泡を食って一人の下士官が飛び込んだのはほぼ同時だった。

「何をしている! 今は査問中だぞ」

「し、失礼致します。………ですが、緊急事態です」

「前置きはいいい。言いたまえ」

側に立つカールゼンの言葉に、防衛部隊所属と思われる下士官は一度自分の上司を見遣ってから口を開いた。

「標準時一七一二に、拠点入り口の識別コードを突破され、敵艦隊強襲艇が拠点内に侵入を……！」

第三艦隊参謀長が立ち上がる。彼の端末から壁面に投影された拠点内部図に、リアルタイムで外部の情報が書き出されてゆく。

「これは……！」

「流星に行動が迅速ですね。高級士官が頭突き合わせて仕事から離れているとはいえ、この侵攻速度、『緋色の悪魔』は伊達じゃないということでしょうか」

「コーンフィールド中尉……貴様ッ」

「おっと、これに注目」

蒼い髪の青年が薬指から外して掲げたそれに、一同の眼が向く。

青白い輝きを放つ、宝石。……否、それは宝石ではない。

「フェルマント……！」

自身の迂闊を呪うカールゼンの搾り出すような声に、周囲の高官たちが一斉に顔色を変えた。

入室前にももちろん入念なボディチェックは行われている。だがまさか、婚約指輪に偽装して一線級の危険物を持ち込むとは！

「宝石にして一カラットにも満たないような小さな石ころですがね、純度はかなり高いですよ。この部屋の酸素を食い尽くすのに十分は掛からないんじゃないかな。ああ、安心して下さい。表面の防護膜を削り取らなければ綺麗なだけの代物ですから」

海底のドームは密閉性の高い場所だ。まして、ここはフェルマントの採掘現場。重大な障害を引き起こす「酸素漏れ」が起きないよう、その管理は高度なシステムの基に運用されている。もしも、こんな所でフェルマントが暴走すれば。

数年前の事件の再現になる。

蒼い髪の青年が、人の悪い笑みを浮かべた。

「運試しと行きましようか。連邦軍がここまで踏み込んで来られたらオレの勝ち。上層部全員を人質に取られている状況で、何とかできれば皆さんの勝ちです……ああ、止めておいた方が良いでしょう」

艦隊長から突き付けられた銃口に、面倒臭がるようにヒラヒラと手を振る。

「小官の身体から力が抜けたら発動しますのでね、コレ」

「くく、蛙の子は蛙、ということか」

「オタマジャクシですよ」

さて、と天井を見上げる。

「部下たちに抵抗を止めるよう勧告していただけませんか。無駄な血は流れない方がお互い幸せというものです」

「……やらせると思うか」

「カールゼン中佐。貴方にはできればここにいて欲しくなかった。カリューシャスのせいで、だいぶ予定が狂ってしまいましたよ」

次の瞬間、カールゼンは首筋に鋭い痛みが突き立つのを感じた。全身を通り抜けるような脱力感。

「く……!?!」

しまった、と理解する時にはもう遅い。

先程、急を知らせた下士官が、カールゼンの首筋に針を突き立てている。麻酔か、あるいは神経毒か。ラムサスに意識を取られ、他の動向から眼を逸らしてしまった自分の迂闊を呪う。

急速に遠のいていく意識。横倒しになる視界の中で、蒼い髪の色がどこか寂しげな笑みを浮かべるのが見える。その唇が紡ぎ出す言葉を最後に、視界が暗転した。

「それでは皆さん、良い夢を（ハブ・ア・ナイス・ドリーム）……」

### 第3章(4)(後書き)

査問の状況みたいなのがうまく書けない……。  
というわけで、かなり省略気味です。

銀英伝が手元にあれば……汗

#### 第4章(1)(前書き)

また間が開きました。待つてくださっていた方が万が一いらっしゃれば申し訳ないです。

## 第4章（1）

本国から離れた採掘拠点に国家の生命線が委ねられるこの時代にあつて、採掘拠点は同時に軍事拠点としての性質も持つ。本国からの増援を待つ間に攻撃を耐え凌げるだけの人員、装備、糧食、そして営倉や捕虜収容所といった設備もある。無論、採掘に従事する民間人のための居住区域や生活のための設備も多数存在する。人が居れば社会が生まれ、社会が生まれれば自ずと商売が始まる。商売があれば経済が回り、経済が回れば制度が作られる。職業の偏りに眼を瞑れば、一つの都市と言うことすらもできるだろう。

とはいえここまで一方的な「結果」に対応できているはずもなく、室内に入りきれない兵士たちは、電磁手錠で拘束されて床に転がさされている有様だった。拠点正門の識別コードを破つて突入した身の丈七メートルの機甲兵に生身の人間が抵抗できるはずもなく、水圧弾の代わりに放たれた催涙弾と催眠ガスに一瞬で抵抗力を奪われたのである。

古来より、一頭の狼に率いられた羊の群れは、一頭の羊に率いられた狼の群れに勝る、という。だが、上級士官のほぼ全てを人質に取られ、指揮系統の瓦解したエンブローア軍は、率いる者のない羊の群れに過ぎなかった。

アランもまた、カリューシヤスらと共に営倉に放り込まれている。怪我の具合が然程重くなく、救護室の使用が不要と判断されたためだ。電磁手錠が不足したためか、ご丁寧にも軍服の上着で両腕を縛られていた。痛めた左腕が鈍い痛みに疼く。

ラムサス・V・コーンフィールドは賭けに勝つたのだ。そして、彼等は負けた。纏めればそれだけのことだった。

虚実の迷宮を嫉妬の弾丸でぶち壊して真実に辿り着いていた男も、それを誇るでもなく慥然とした表情を浮かべている。最後っ屁ということでもないだろうが、皮肉を載せる口だけは元気によく回った。

「どうだい、中尉。この期に及んで『あいつには何か考えがあるんだ』とでも？」

皮肉げな笑みを浮かべた少尉に、アラン・クーリツジは向き直る。「当たり前だ。ラムサスに考えがない訳がない。どんな考えかは分からないけどな」

「……前から気になっていたんだがな、アラン。友情と盲信は違うぜ。そのぐらいは分かっているんだろう？ だったら、お前はラムサスを信じているんじゃない。アイツを信じていられる自分に悦に入っていたいだけだ」

「構わないさ。俺はアイツを信じていたい。もし裏切られているのだとしたら、どうせ俺がラムサスに勝てるわけがないしね」

「謙遜は度が過ぎると嫌味だぜ、主席」

向けられた瞳の奥には、憤りの炎が燃料をぶち込まれて燃え盛っていた。

\*\*\*

「まずは礼を言わせてもらおう、コーンフィールド中尉」

査問の場から「救出」されて数刻。持てる者と持たざる者との逆転を果たした蒼髪の青年は、新たに拠点の支配者となった初老の男と向き合っていた。弛んだ頬と、胸板の倍ほどもある腹部とで、武人というよりは町内の顔役となった商人のような印象を与える。拠点防衛部隊の指揮官シートにおさまった男は、収まりの悪さを誤魔化すように身動きを繰り返していた。

見掛けと実情とが比例しない例はどこにでもあるものである。眼前に座る男に派手な軍功はないものの、堅実な部隊運用の手腕でコーンハイム連邦軍中將の座に在った。名は確か、シグムンド・コーウェルといった筈だ。階級が分かれば名前などはどうでもいい、ビジネスはそれだけで円滑に進む。

「お役に立てたのなら幸いですよ、中將」



「貴官と、他の協力者のお陰で、双方に大きな損害を出すことなくボーグラン拠点に進駐することができた。これからの『話し合い』でも君の手腕に期待させてもらって良いかな」

「小官の最善を尽くさせていただきましょう」

青年の言葉に、中將は満足気に頷いた。「スマイルを売ってもゼロ円だからな」などと思ってしまうのは、敵からコーウエル中將が「ローレンハイムの戦場成金」と、畏怖を込めて揶揄されていることを知っているためだろう。つるりと禿げ上がった頭頂部を撫でて、中將は口を開く。

「さて、勲功者には報奨を与えなければならんな。これだけの軍功だ、軍の規定では適応できまい。何か望みのものはあるかね。なに、私の懐は傷まないからな、いくらでも大きなことを言うといい」

こういった台詞を普通に言い放つのも「成金」と呼ばれる由縁である。幸い、ラムサスはこの手の冗談を気に入るタイプの人種だった。下手な社交辞令より素直で宜しい、と思ってしまうのは、正直にも程がある友人が側にいたからか。

今頃は官倉の中で自分への恨み言を叫んでいるのだろう。彼を騙すのは心苦しいが、既にルビコン川を渡り始めてしまったのだ。投げられた賽からは、できるだけだけの投資を回収するとしたものだろう。「では、お言葉に甘えまして。貴軍における一階級上の地位と、本拠点内における高度なアクセス権限。それと……」

一度言葉を止め、迷うように首を傾げてみせる。

「後は、美女の入れてくれた紅茶を一杯、所望しましょうか」

「成程な。階級は手続きが必要だからすぐというわけにはいかんが、他はただちに手配させよう。好みはあるかね、大尉？」

「幼少時に貴国で味わった『ダージリン』の古来種、あのファーストフラッシュの味は忘れられません」

口に出しつつ陶然とした気分になってしまったラムサスは、ふと視線を下ろした先に訝しげな表情の中將を見出し、何かへまをしたかと冷や汗をかく。

「……なるほど、女性の好みより茶の好みが優先か」

悪童の表情で笑う中将に、ラムサス・コーンフィールドもまた笑みを返した。

「どうやら、この新しい上司とはうまくやっっていけそうだ。」

たとえ、短期間のことであっても。

第4章(2)(前書き)

一挙更新。

## 第4章(2)

\*\*\*

権利の行使に躊躇しない、という点で、ティファ・ブライクの婚約者は非常に正直な男であるらしい。その権利がどこから付与されたものか、頓着しないのはいただけないが。

そして、恐らく権限の行使だけではあるまい。ドアの隙間から見えた、監視の女性兵士の頬がやや上気していた。……腹が立つ前に呆れる。

「よう、婚約者殿。<sup>フィアンセ</sup>気分はどうだい」  
「……お陰様で最悪」

男性兵と同じ場所に放り込むことは流石に自重されたのか、女性兵たちは主に女性用官舎で拘束されていた。監視として付けられている兵は必ずしも女性では無かったが、国際法に則れば、捕虜への暴力は性的なものも含めて禁止されている。人類連合(UH)からの脱退まで強行した国に 自分の国も同じ立場なのだが どこまで人道を守る誠意があるのかは知らないが。

ひよっこりと覗き込んだ蒼髪の男を見て、ティファは驚く前から顔を顰める。

「どうしてココにアンタがいるわけ」

「謝礼としてお願いした『高度なアクセス権限』に女性用官舎への立ち入り許可(アクセス権限)も含めてくれたらしくてね。いや、気が利く大人ってステキだよ」

「それは良かった。だったらアンタもステキな大人になろうと思わない？」

何に対する礼かは問わず、暗に出て行けと告げた女に、男はむしろ面白がるような笑みを浮かべた。

「オレも十分にステキだと思わないか？ なにせ君の婚約者だぜ」

「何？　こんなコトになつてどの口がそういうコトを言うワケ？」  
「『なつて』ではなく『して』だよ。オレが主体的な人間であることは認めてほしいね」

言葉尻を捕まえて揶揄され、ティファの頬に怒りとは別源の朱が混じる。拘束された両手で、栗色のショートカットを撫でようとしたラムサスの手を振り払った。

「美女の五人や十人、簡単に侍らせられるんじゃないの？　英雄サマでしょ、アンタは」

「オレは婚約者を大事にする男でね」

「その婚約者との指輪に偽装して危険物を持ち込んだのは誰かしらね？」

痛い所を突けたのか、ラムサスは瞳を逸らすと、黙って人差し指で頬を掻いた。

「まあ、うん。あれはちょっと悪かったと思ってるよ」

「……それで？　最初の質問にまだ答えてもらってない」  
どうしてココにアンタがいるのか。

今度は鋭く尖らせた瞳だけで語ったティファに、蒼い髪のプレイボーイは朗らかに　それはもう、後ろ暗いことなど何も無いというかのように、綺麗な笑みを浮かべてみせた。つい先日、この笑顔にほだされてしまった自分がいることに目眩がする。

「君を迎えに来た」

「へえ？　何を聞き出そうって言うのかしら？」

「尋問じゃないさ。……君はオレの婚約者だ。一緒に来てくれるなら、ローレンハイムでの安定した地位を約束できる」

ラムサスの投げて寄越した爆弾に、ティファは声を出すこともできず、しばし眼を瞬かせた。

「……つまり、私にも裏切り者になれと。そういう冗談を真顔で言うの、アンタは。この期に及んでまで、新しい発見があるものかね」

「それを『英雄サマ』と表現したのは君じゃないか」

「……最低よ、アンタ」

吐きかけた唾が、蒼髪の青年の端正な頬を伝う。伝った雫は、床に零れ落ちる前に青年の白い軍服で拭い去られた。

「確認するまでもないでしょうけど、婚約は破棄させてもらう。不履行で訴えるなんて言わないわよね」

「残念だよ、ティファ。……アランと仲良くやるといい」

その言葉に自嘲と寂寥と、そして何故か安堵がトツピングされているのに気付कि、ティファ・ブライクは訝しげに視線を向ける。

背中を向けた婚約者 否、元・婚約者からは、先の言葉に繋がる糸を一つも見付けることができなかった。

\*\*\*

「それで、これはどういう趣向だ」

ティファ・ブライクが婚約者に決別を言い放ったのと同刻。高級士官として部下とは別に拘禁されている筈のリチャード・カールゼンは、今や別の人物の居室となった自身の部屋へと舞い戻っていた。無論、彼自身の意思ではない。ここまで彼を引き立ててきたローレンハイムの軍服の下士官は、捕虜を部屋に送り届けると、関わり合いになりたくないとはかり退出していった。

眼前の人物の、敵国での評価が分かるうというものである。

「時間はあるんだ。旧交を温めるぐらいのことは許されると思わな  
いか」

「無くなったものは温めようがない」

「ふん」

勧められた席に座ろうともせず、部屋の入口で傲然と立ったままの旧友を見遣って、ウォルフガング・ペーターゼン少佐は皮肉げに笑ってみせた。

「お前は紅茶党だったな。良い茶葉がある」

無言のまま立ち尽くすことしばし。カールゼンが日常的に使って

いた丸テーブルの上に、湯気の立つ紅茶のカップが置かれる。二つ置かれた椅子の一方で同じ紅茶を啜り、機体ともども「緋色の悪魔」と称される男は厳しい顔を旧友に向けた。

「座れ。毒なら気にしなくていい。お前に効く毒なんぞ在る筈もないからな」

「何を聞き出すつもりだ。言っておくが、大した情報は持っていないぞ。第三艦隊の運用に関する情報は殆ど用済みだろうしな」

最後の言葉は丁重に流し、指し示された椅子に座ったカールゼンに、ウォルフガングは呆れたように眉を上げた。

「お前らしい生真面目さだ。だが、そういう時は、情報を持っていくフリをして譲歩と隙を引き出すものだろう。いつまで棒を振るしかない能のない前線兵士でいるつもりだ？」

「生涯現役だよ、ロートルを気取るつもりはない」

「どこぞのジジイみたいなことを言うじゃないか。まあ、忠告は素直に受けた方がいいぜ」

「次があれば覚えておこう」

「次があれば、か」

含みのあるウォルフガングの返し。

「先に言っておこう。どんな条件を積まれようが、どんな上等な紅茶を提供されようが、俺は祖国を裏切るつもりはない。どこかの誰かと違ってな」

「愛国心旺盛だな」

「自分が言われると腹が立つな、その台詞は」

エレーナとのやり取りを思い起こして呟く。それを知らないウォルフガングが訝しげに疑問符を浮かべるのを見て、カールゼンはこつそりと溜飲を下げた。

「教えてくれ。どうして国を、俺達を裏切った？ 国からの待遇に不満を持っているようにも見えなかった。むしろ、最新鋭の実験機を貸与されるほどの扱いだ。あれからいくらか考えたが、合理的な理由は見付からない」

「捕虜の側が尋問をするのか、それは倒錯という奴だろう」

「盗作は犯罪だが、倒錯がそうだとは聞かないな」

開き直った台詞に、紫水晶の瞳を持つ男は肩を竦めた。教え子と、同じ色の瞳。

「……この戦いに意味がないことを俺は知っている。知ってしまった瞬間に国などどうでも良くなってしまっただけのことさ」

「どうでも良いのなら、それまでの国にいたほうが楽だろう。お前に旅行の趣味があった記憶はないぜ」

「嫌がらせをしてやりたかったんだよ」

「……嫌がらせ？」

訝しげに返したカールゼンの瞳に、ウォルフガングは天井を指さしてみせる。アランがいれば、ラムサスに似た拳動だと評価したかも知れない。

「『上』の奴等に、な」

「『上』……？」

微妙なニュアンスで放たれた言葉は、ただ政治の主導層と取るには奇妙な響きを伴っていた。鸚鵡おしむのように問い返すカールゼンに、祖国に背を向けた男は顔を顰める。

「体験版は此処までだ。生憎と製品版の提供は未定だが」

「ウォルフ！」

「呼び付けて悪かったな。お前ほどの腕前なら俺でなくても誰かしらが勧誘するだろうが、まあ気が向けば軍服の色を変えてくれ。そう悪い着心地でもないぞ、多少の汚れが目立たないのも良い」

勝手なことを言って紅茶を啜り出すかつての友に、これ以上の会話の意思が無いことを悟って、カールゼンは席を立った。ドアへと向かう。恐らく先程の下士官が待機しているだろう。ノックをすれば開けてもらえる筈だ。

ドアに手を触れさせかけて、ふと、思い付いたことがあった。

「ウォルフ、こいつは俺の独り言だ。返答の必要はない」

「……」



「恐らく、ラムサス・V・コーンフィールドも、『上』とやらのことを知っている」

言葉は返ってこない。だが、背中に当たる強い視線に、カールゼンは自身の思考が真実と遠くないところを辿っていることを確信した。

「そして、エレーナ・ロドクリフも」

返事はない。

## 第4章(3)

\*\*\*

敵国の軍靴に自分達の聖域が蹂躪されるのを、搭乗兵も工務兵も歯噛みして見守ることしかできない。第三艦隊の機甲兵が並べられた格納庫には、引き立てられた機甲兵部隊の残存メンバーと、そして彼等を拘束するローレンハイム軍の姿が在った。

負傷などお構いなしということか、アラン・クーリッジもまた残った二十名ほどの同僚と共に、中央に固めて座らされている。数時間振りに会う面々もいたが、再会を喜び合う気持ちは毛頭起きなかった。

古巣に興味を示さなかったのか、その場にウォルフガング・ペーターゼンの姿は無い。代わりというわけでもないだろうが、でつぶりと太った将校が捕虜達の前で人好きのする笑みを浮かべた。

「やあ、エンブローアの勇者諸君。君たちの誠意ある協力を得られて私は大変に嬉しいよ」

シグムンド・コーウェルと名乗ったローレンハイム軍中将が、捕虜たちの前で胸板の二倍はある太鼓腹を揺らす。まるで閲兵を行う司令官のように、前傾姿勢で固まる機甲兵たちの前をゆっくりと進んだ。平時であれば眼前の男など片手だけで捻り潰すことのできる機甲兵と言えども、搭乗者がいなければ只のデフォルメされた人形でしかない。

その足は、カールゼンの白い乗機の前で止まった。見上げる瞳に、資産価値を値踏みする不動産屋のような光が宿った。色が白い他は普通のETX 280でしかない。おそらく、その興味は両手の装備にあるのだろう。荷電粒子砲の砲身に触れ、中將は言葉とは裏腹に満足気な溜息を吐いた。

「成程、こいつがエンブローアの欠陥品か。よくもまあ、こんなも

のを取り回す気になったもんだよ。戦場の常識を知らんと思えん」

「全くもって同感だよ、使用者として言わせてもらえばな」

いっそ傲然と言い放ったカールゼンに、周囲を取り巻く連邦兵が非好意的な視線を向ける。突き付けられた銃口を意にも介さない豪胆さに、不気味なものを見るかのような表情を浮かべた者もいた。

「緋色の悪魔」のかつての盟友の名を知る者もいたかも知れないが、眼前の文官然とした男の容貌は戦場の雄とは結び付け難い。

「君が、リチャード・カールゼン中佐か。『緋色の悪魔』から噂は聞いている」

「では、その情報に三割ほど上乘せしたのが実像だな」

カールゼンの言葉を聞き流しつつ、男は矯めつ眇めつしながら、嘗め回さんばかりの近さで白い機甲兵を睥睨する。

「コーンフィールド大尉、この奇妙奇天烈な武器のデータが欲しいのだが、どこにあるのかね？ 私達にも理解できる平易な言葉だと良いのだが」

掛けられた声にしばし思索した素振りを見せてから、蒼い髪の青年は目線で先刻までの上官を指し示した。彼に向けられる、先刻までの同胞からの刺すような視線には全く頓着した様子を見せない。

アランが向けた視線を、ラムサスがさりげない素振りで見外した。

「カールゼン部隊長殿の端末を見るのが手っ取り早いでしょうね。制式に配属された兵器ではありませんから、整備データのバックアップなどが規定の場所にあるとは限りません。実戦データも本体の方が豊富でしょう」

「ふむ、端末か……。まあその程度は仕方あるまい。誰か、この男の端末を持って来い」

携帯端末は本人にしか扱うことができない。たとえ上官であつても、そして征服者であつてもその条件は同じ事だ。本国の管理センターを占拠したわけではないから、エンブローアの組み上げた情報管理システムに従わざるを得ない。至極合理的な理由から、囚われ

の身となったカールゼンの携帯端末使用が許可されることになった。拘束されると同時に没収されていた端末が、カールゼンに手渡される。片手に収まるほどの立方体は、あらゆるプライバシーと公共的な情報を溜め込んで、今や個人そのものと言ってもいい。だが、両腕の戒めこそ解かれたものの、代わりに両脚を拘束され、後頭部に銃口が突き付けられているとなれば、素直に喜ぶ気分にもなれないだろう。

「余計な事は考えない方が良くと思うよ、中佐。貴官の端末で、その新型兵器の使用データを出してもらおう」

「何もしないさ、勝てない戦はしない主義だ」

「ほう、負けたから捕虜になっているのだと思っていたが。認識の違いだろうか」

「主義と現実はいさば乖離するものでね」

「面白い男は好きだよ、中佐。そのあたりの哲学はいずれゆっくりと話し合おう」

器用に肩を竦めて、カールゼンは端末を起動した。壁面に大きく投影された映像が次々と切り替わり、搭乗する機甲兵のデータを表すものへと変わる。

「……」

食い入るように投影画面を見つめるコーウエル中将から眼を背け、アランは奥歯を噛み締めた。鈍い灼熱が顎の奥に籠る。

自らが育て上げた機甲兵の全てを敵の前で曝け出される、それはいったい、いかばかりの屈辱か。

横目に見たカールゼンの表情は一見して泰然としていたが、士官学校時代からの長い付き合いであるアランは、彼が全力で自身を抑え付けていることを悟った。立ち昇る怒気が急速に膨張していくのを感じる。学生時代であれば、同期生たちに接近警報を傳達するレベルを遥かに超えていた。

「機体の細かな運用データは後で構わない。先にその馬鹿げた武器のデータを見せてくれるかね、中佐」

「あまり気が進まないな。あいつは恥ずかしがりなデータでね。自分がいかに馬鹿げているか自覚しているらしい」

「……君とは正反対の性格らしいな」

コーウェル中将の右手が上がる。カールゼンの右頬に強かな一撃が加えられた。首から上が大きく振られるが、僅かにもぶれない姿勢に、むしろ叩いた兵士の側が慄く。

「失礼。部下の手が滑ったようだ。作業に支障はないね？ 続けてもらおう」

「……貴方の舌と同じようだ」

「君の舌とも、な」

再度の打撃。唇の端が切れ、真紅の血が浮き出した。さすがに堪え切れなくなる。

「何をしているッ！ 捕虜に対する人道的な配慮は国際法で取り決められている筈だ」

「上官思いの良い部下を持っているな。だが、怪我人は黙っていた方が良い」

立ち上がったアランは強く左腕を掴まれ、痛みに堪えかねて再び膝を折る。

「さて、始めようか、カールゼン中佐。国際法に敬意を表しつつ、ね」

「分かっているさ。わざわざ部下達まで此処に置いてくれているんだからな」

「聡い男だ。聞いていたのとは大分違う」

そこまで聴いて、アランもようやく事情を悟った。

カールゼンは剛毅の人だ。自身の肉体に対する肉体的な打撃であれば、かなりのレベルまで耐えてみせるだろう。少なくとも、情報に対して少なからぬ労力を強いることができるはずだ。だが、部下の身を初めから人質にするつもりなのだとすれば。

カールゼンが「端末をリセットする」という手段を取らなかったのは何故だったのか。

愕然としたアラン達の視線が見守る中で、カールゼンは無言で指を動かした。

エレナ・ロドクリフから託された武器の詳細なデータが、投影された画面内に表示される。細かな事情は知らないが、エンブローアの中でかなりの技術的な進歩があったのだらう。

「興味深いな。遺跡の『オリジナル』でない技術を見て、これだけの驚きを覚えるのは久し振りだよ」

次のページを促され、唯々諾々と従う上官の姿に、自分たちが敗北したのだということをまざまざと突き付けられた。

\*\*\*

表示されたデータを一通り眺め、コーウエルは満足を覚えたようだった。

「技官。データを回収して本国へ送ってくれ。無論、私の名義でな」  
「しかしながら、中将……」

反駁した技官は、次の瞬間に表情を引き攣らせる。得物を狙う蛇の眼で、「戦場成金」が自身を見据えていることに気付いたのだ。

「私は『やれ』と言ったんだ。問題があるなら解決しろ。事情があるならどうにかしろ。そのためのお前たちだらう。君達の労働力が適正な価格で資本主義社会を回っているか、もう一度確かめ直してやることもできるんだぞ」

息を飲んだ部下を哀れんだのか、相手の無知をからかう気になったのか。自分でもよく分からない衝動のままに、カールゼンは口を挟む。

「エンブローア軍とローレンハイム軍とでは端末に使っている通信プロトコルが異なります。情報の漏洩を避けるために、私のデータをローレンハイムの皆さんが受け取ることはできないようになっていのですな。まあ、もちろんご存知でしょうがね」

「成程。解説痛み入るよ、カールゼンくん」

表情を歪めて答えた中将は、すぐに視線を横に振った。流石にキレる、と思う間もなく、カールゼンと同じ結論に辿り着く。

「コーンフィールド大尉。この親切な上官の言うことが正確であるのだとすれば、君の端末であれば受け取れるということだな？」

「……！ はい」

僅かな動揺を見せて、蒼い髪の青年は罨を警戒するような足取りでカールゼンの下に歩み寄った。左手で自らの髪を弄りつつ、右手に持った端末を突き出す。

「流石ですね、カールゼン中佐。誰も気付かないようであれば私から提案しようと思っていた所ですが、手間が省けて結構ですよ」

「そうじゃないだろう、中尉。いや、大尉と呼んだ方が良いのかな」  
小声で返した言葉に、ラムサスが訝しげに眉を潜めた。

「君が自分の端末を他人に見せたがるとは思えない。例え君が連邦に付いたのだとしても、自分の武器を曝け出すようなことはせんだろう。あの男の端末を使うつもりじゃなかったのか」

固有名詞を廃した言葉は、正確に眼前の青年に伝わったようだった。

「……やはり、敵に回したくない人ですよ、貴方は」

「お前もウオルフも苦労するな、同情するぜ」

ポケットから取り出したケーブルで手早く端末を有線接続すると、カールゼンにデータの転送を指示する。皮肉げな笑みを浮かべ、かつての部下の指示に従った。

「すみませんね、中佐殿。これが小官にとっての『冴えたやり方』という奴でして」

「『上』とやらと関係があるのか」

青年の表情が一瞬強張る。無言の肯定に、カールゼンは満足気に頷いた。

「……どこまで気付いたのかは知りません。邪魔だけはしないでいただきたいですね」

データの転送が終了し、ケーブルを引きぬいた青年は背後を振り

返る。

瞬間、拠点中の照明が一気に落とされた。



## 第4章(4)

\*\*\*

カールゼンの行動は素早かった。視界が奪われた瞬間、身を沈めると自由を奪われたままの足で背後の兵士を横殴りに蹴り倒す。宙を舞ったカード型プラスターを躊躇いなく掴み取ると、足の拘束錠を破壊して疾駆した。

目指す場所は見えなくとも、この身体が覚えている。梯子無しで白い巨兵に飛び乗った。素早く端末をセット。

起動シークエンスを「無視」。

「起動チエック省略、脳波制御停止、全手動制御！」

「こんな無茶をするのは士官学校で教鞭をとって以来のことだ。」「万が一の場合」に備え、脳波制御が行えない場合でも機甲兵を動かせるよう、最低限のカリキュラムが組まれている。まさかこんなところで役に立つとは思わなかった。予感から「端末のリセット」という手段を選ばなかった数十分前の自分にも感謝だ。

あらゆる手順を無視されたことに抗議するかのように小さな唸り声を上げ　カールゼンの愛機が暗闇の中で立ち上がった。元来が漆黒の海底で起動することを前提に設計された兵器。停電など障害にすらならない。センサが闇に包まれた室内を光瞬く戦場に変えてモニタに映し出す。

跳躍。着地と同時に数人を押し潰す。こんな場所ではフェルマントは使えず、従って荷電粒子砲も本来の用途では使えない。殴打用の武器と化した両手の砲身が舞う。悲鳴と怒号が反響する。疾駆。味方と敵とを一瞬で識別し、確実な打撃で戦闘行動を永久に中断させる。

非常灯が灯ったとき、その場に残っているローレンハイム人は太り気味の中将だけになっていた。無論、狙って創り上げたシチュエ

「シヨンド。このぐらいの意趣返しは許されるだろう。巨人を見上げた瞳は、今や好奇心を上回る恐怖に染まっている。」

「ヒツ……」

腰を抜かした男の足元に滲み出る液体。掃除が面倒そうだ、と思いつつ武器を持ち替える。

「悪いな。勝てる戦は徹底的にやる主義だ」

巨人のナイフが男の肥大化した臓器を抉り出した。

機甲兵から飛び降り、自由になった両腕で部下たちを解放する。

幸い、得物は多量に転がっていた。先程の大暴れで使えないものが増えてしまったことはこの際無視する。

「ラムサス、あの野郎!」「隊長、吊るし上げてやりましょう!」

「いいや、あの男なら生かして去勢してやる方が効果的だ」「死体の口にコーヒー豆を詰め込んでやるぜ」

カールゼン同様に自由を取り戻した部下たちがいきり立つ。カリユージャスに至っては「見付け次第、顔も判別できない状態にして殺してやる」と、その瞳が雄弁に語っていた。

どうする？

一瞬思案したカールゼンは、コクピットで幾つかのコマンドを高速で叩き込む。警告のアラートを無視。全ての確認にイエス、イエス、イエス……完了。

「アラン。お前、機甲兵の全手動制御は覚えているな?」

「は、はい」

士官学校主席。全教科の優等生。愛弟子 アラン・クーリッジ。躊躇いつつも思い通りの返事を返した青年に、カールゼンは決意を固めた。

「コイツを貸してやる、ラムサスを追え」

アランの自機もここにあるが、端末がない以上、ただの置物に過ぎない。だが、自分の端末はここにある。機甲が、動く。

それが狙ってのことなのか、偶然なのかは自分には判断できない

が。

唾然として言葉も出ない様子のアランを見下ろし、カールゼンは言葉を重ねる。

「俺の端末を一時的に解放してある。お前が乗っても文句は言わんさ、コイツは」

ただ暴れ馬だから気を付けろ、と。それだけを伝えれば十分。

ハッチを開け、機体から飛び降りる。立ち尽くす金髪の青年に近寄る。肩を叩く。

「あの野郎のことはお前に一任する。行け、アラン！」

階級ではなくその名を呼び。もう一度強く、力を込めて。

そして、青年は放たれた矢となって走り出す。

#### 第4章(4)(後書き)

ようやくアラン氏が主人公っぽい展開に……。

## 第4章(5)

\*\*\*

その時のリチャード・カールゼン中佐の判断は、決して責められるべきものではなかった。彼は自らの信念と理性の命じるままに、最も合理的な判断を下して、順当に権利と権限を行使したに過ぎない。むしろ、賞賛を送る者もいることだろう。

だが、その行為がカリューシヤス・イワブチ少尉の精神を完膚無きまでに破壊したのも確かだった。

『あの野郎のことはお前に一任する。行け、アラン!』

自ら葬るべき敵と見定めた男を他に委ねられたこと。

上官が自分ではなく他の同期生を選んだこと。

肥大化した嫉妬心と自尊心は、この男の脳裏から残された冷静さの欠片を奪い去り、誰もが己に課している枷を、一時的にとはいえ取り去った。

行動は迅速だった。行動の善性と発揮される能力とが比例しないという、それはある種の皮肉だったかも知れない。

「カリューシヤス!」「お前どこ行く気だ?」

呼び掛ける同僚の声を背に、カリューシヤス・イワブチは格納庫を走り出した。廊下に飛び出したところで、先の停電が只の停電では無かったことに気付く。

電磁手錠が、外れている。

無線による電源供給が絶たれたためか、それともIDに依る集中管理の側から全て解除されたのか。いずれにせよ、立ち上がったエンジニア達は一瞬の停電のうちに自由を回復していた。そして、その足元に転がる拘束具は、簡易の殴打武器となる。

軍人であるカリューシヤスとて、訓練や記録でしか見たことのない、拠点内での肉弾戦が、今まさに眼前で展開されていた。機甲という絶対的なハードウェアに頼るのではない、原始的な闘争の形。

「やあ、君。さっきまでは随分と仲良くしてくれたじゃないか」

眼前で慌てるローレンハイム軍の兵士の肩に気易く手を置いたのは、確か民間人の代表を務めている男だったはずだ。

「御礼をしたい。もちろん、受け取ってくれるね？」

「あ、あ……」

朗らかな笑顔に一拍遅れ、顔面を變形させかねない程の力で拳が叩き込まれる。吹き飛んだ兵士は、泡を吹いて白目を剥き、その武器を右手から落とした。

「ふん。着払いにしないだけ有り難く思え」

聞こえていないだろう相手に台詞を吐き捨てたところで、男はカリューシヤスに気付く。

「ようやく御出座しか、軍人。早く戦わねえと俺達だけで片付けてしまうぞ。まさか民間人は黙ってるなんて言わないよな？」

拾い上げたサブマシンガンを構え、連邦軍の兵士たちと纏れ合う仲間のただ中へと踊り込む。その背中から眼を逸らして、カリューシヤスは眼前に倒れこむ兵士の軍服を探った。

目当ての物を拾い上げ、喧騒に背を向けて走り出す。

自動車両であれば十分程度の距離は、走るとなるとそれなりの時間を要した。目標がこちらに近付いて来てくれたのは嬉しい誤算だ。

彼女もまた右手に不慣れな銃を構えて、小走りに格納庫へと向かう途中だったらしい。

「カリューシヤス！？ どうしてここに」

「中佐の命令だよ」

どうせ確認など取りようもない。取れる前に片付ける。歪んだ笑みを抑え込むことすら思い浮かばず、カリューシヤス・イワブチは

目標　ティファ・ブライクの腕を掴んだ。

「ティファ。ラムサスの野郎を止めるんだ。手を貸してくれ」

燃え盛る思考の中で、ただ一つだけの真実が囁きかける。　手  
段を、選ぶな。

「止めるって……ちょっと！　引つ張らないでよッ」

人目のない所へ。どうせ監視カメラなど気に留める余裕などある筈もない。その場で見付からなければ良いのだ。手近な部屋のドアを開け、ティファを床に突き倒す。転がった武器を蹴り飛ばす。

最後に残された良心が、オレンジの髪 of 青年に制止を訴えかける。だが、すでにタガは外れ切っていた。素早くマウントポジションを取り、両肘を押さえ込む。

「アンタ、こんな時に何をッ　！」

軍服を襟元から裂く。懐をまさぐる。

「イヤ、何やってんの、やめっ……」

ばたつかせた脚を強く打ち据える。体術の成績なら然程違いは無いが、不意を取って体格差のあるマウントポジションだ。逃れられるわけがない。

下着まで剥き出しになったところで、カリューシヤスはようやく手を止めた。鼻息を荒げるでもなく、冷酷なまでの悪意を纏ったその瞳に、ティファも自分の予想とは違うベクトルで絶望が進行しつつあることを悟る。

「安心しろ、こんな時に欲情してるわけじゃねーよ。……よし、隠し武器はねえな」

「何を……」

「人質が武器なんざ持ってたら台無しだろう。喜べ、主演女優にしてやるよ」

カード式レーザーブラスターの銃口をその側頭部に突き付ける。良い具合に着衣も乱れている。これなら、あの男とて平静ではいられまい。

「ラムサスはお前を殺せない。アランもお前を見捨てられない」

「……同期のうち二人がクズ野郎だと分かるなんて、今週は収穫が多いわ」

「早計だな。三人に増えるかも知れないぜ。……来い」

\*\*\*

自らを主人公と任ずる男は、視界の消えた格納庫を脱して、自らの機体を求めて構内を疾駆していた。彼の目的を達するには、機甲があることが望ましい。恐らく、白い機体が追い掛けてくるだろう。その搭乗者がどちらになるかは五分五分、といったところだろうか。主人公とはいえ全能の存在ではない。むしろ、大変な目に遭うからこそその主役なのだ。

手元の端末を見やり、経過時間を確認する。なるべく自分の通るべきルートが空くように捕虜の配置などに手を回したのだが、やり過ぎれば足が付く。完璧な計画などあり得ない、だからこそその時間との勝負だった。

そして、不確定要素があるとすればもう一つ。

ラムサス・コーンフィールドは、かつての上官達の実力を、甘く見積もり過ぎていたのではないか。

氷の精に背中を撫でられるような悪寒が現実のものとなるまで、然程の時間は必要としなかった。

「よう、坊主。久しぶりじゃないか」

突如、背後から掛けられた声に、ラムサスは声を押し殺した。

胡座をかいたままのウォルフガングがカード式の光線銃を片手にひらひらと手を振っている。

「教官……！」

青年の行動は素早かった。胸元から光線銃を取り出すと、滑らかな動作でかつての上官の胸に狙点を当てる。だが、ラムサスのそれを遙かに凌駕する速度と正確さで、ウォルフガングの銃口が額に向けられていた。



「お前さんも割に合わない仕事をするな。ちゃんと残業代はもらっているか？」

飄々と嘯きながら、正確にラムサスの眉間に合わせられた銃は一瞬たりともブレることがない。僅かでも身じろぎをすれば、頭蓋骨に必要な穴が増えることになる。冷や汗を押し隠しつつ、ラムサスは応じた。

「ええ、二階級特進しなくても遺族が困らない程度には」

「フム。まあ、給金が多くて困ることはあるまいよ」

咄嗟に身構えるラムサスの前で、ウォルフガングは腕に装着した端末を見やり、意地の悪い笑みを浮かべると大儀そうに腰を上げた。「生憎だが、あと十七分二十四秒は休憩時間だな。就業時間外に仕事は持ち込まない主義だ」

「……」

「仕事でもないのに青二才と遊んでいるほど、大人は暇じゃないのさ」

そのまま踵を返すと、肩越しに手を振りつつ歩き去っていった。

手元の光線銃をその背中に向けることも忘れたまま、ラムサスはその場に立ち尽くす。認めがたいことに 本人は確実に否定したであろうが、普段は周囲を手玉に取って遊ぶこの豪胆な男が数秒、呆気を取られていたのだ。

「……敵わねえな、畜生」

やがて負け惜しみのように絞り出された言葉は、誰の背中にも届くことなく、空調の風に紛れて消えた。

## 第4章(6)

\*\*\*

「まさか、こんなモノを使うハメになるとは……」「これ、どこ持  
つんスカ」「バカヤロウ、そこは刃だよ、手エ斬りたいのか!？」  
「うわ、血イ出た!」

緊張感の感じられない会話を交わす、機甲兵部隊の所在は武器庫  
である。通常使われる武器ではなく、陸戦用のものだ。拠点防衛部  
隊(ムダ飯ぐらい)に使用させるため、拠点内に分散して武器庫が  
用意されており、その中には「必要な時のための」武器が置かれて  
いる。日頃は予算のムダ使いだと思っていたが、思わぬ所で役に立  
つものである。

「まあ、消火器や火災予知機も無ければ無いで困る」  
身の丈以上もある長柄斧ハルバードを持ち上げて、装甲服姿のカールゼンは  
どこか憮然とした様子で呟いた。数瞬が生死を分ける機甲兵の戦闘  
に熟練した者達にとって、人間のスピードでの侵攻など慌てる必要  
性を感じないのだ。元より、ここまで生き残っているというだけで  
も豪胆な者が多い。

「旨いですからね、カンパン」「貧しい食生活してるなあ」「黙れ、  
カンパンの旨さを理解できない奴は庶民の敵だッ」  
(とはいえ、のんびりとし過ぎているのも不謹慎だな)

ウォルフガングであれば鼻で笑うところだろうが、カールゼンは  
集団行動における規律の重要性を無視してはいなかった。

長柄斧ハルバードを床に突き立てると、その両の掌を力強く打ち付ける。風  
船を割るような強い音が、一同の動きを止めた。

「機甲兵部隊諸君。逃げるなら今の内だ。諸君の給料に肉体労働が  
入っているという条項は寡聞にして知らない」

生真面目なカールゼンの言葉に、十九人の部下から失笑が漏れる。

十九人。四十七人の部下のうち、二十四人は既に天国ヴァルハラだか地獄だかに旅立った。四人、同期の若手たちはここにおらず、それぞれが銘々の目的のために動いているのだらう。残された者達の三十八の瞳が、ただ一人の指揮官に向けられる。

「……良いだらう。ならば武器を取れ。壊せ、滅ぼせ、あの世に送れ。君達も俺も、そのための、それしかできないイキモノだ」

次の言葉を言うべきかどうか、僅かに躊躇う。何だか自分らしくないような気もしたからだ。だが、その胸の内から迸るような言葉も、今の自分にとって真実なのだらう。

「国のためだなどと考える必要はない。軍のためなどと考える必要はない。君達の信じるただ一つの何かのために」

誇りでもいい。夢でもいい。もしかしたら、愛などとほざく奴もいるかも知れない。ただ、それぞれの物語の終焉けつまつにある、たった一つの宝物たからもののために。

リチャード・カールゼン中佐は思う。

あの若造達はどれだけ理解しているだらう。

いま、ここに在る者達が、どれだけ恐怖と絶望をその身に秘めているのか。

祝宴のような彼等の空気の裏に、何を思い描いているのか。

数多の物語が。数多の伝説が。これまでも、そしてこれからも端役であるだらう彼等のために用意されているのだ。

端役であり、同時に主役でもある彼等のために。

お仕着せの主人公は要らない。語り部が物語を作るのではなく、物語が語り部を作るのだ。

(そうか、ラムサス。もしかして君は )

そこまで考えて、カールゼンは首を振った。今となつては詮無いことだ。

「何かカッコいいこと言ってますけどね、中佐！ 本音は!？」

部下の一人の言葉にニヤリと笑う。最近、どうもあの悪友の影響が強く出てきたような気がして困る。

「面倒なこと（しゅやく）は若造どもに任せておけ！」

そちらはそちらで好きにやればいい。ここから先は、俺達の物語だ。

\*\*\*

人生とは知りたくなかったことを知ることだと。

そんな分かりきったことを口にした馬鹿はどの馬鹿だったか。

「邪魔だ、そこをどけえッ！」

両腕に構えた荷電粒子砲を振るい、立ち塞がる紺色の機甲を打ち倒す。狭い構内で大威力の武器をぶっぱなせば、結果は推して知るべしだ。

仮想ペダルを踏み込み、身を低めて一気に加速する。

全自動制御、しかも慣れないピーキーチューンの機体だ。よくもこんなじゃじゃ馬で遊んでいたものだと、感心するより前に呆れる。本来は移動がせいぜい、とても戦える状態ではないが、これが火事場の 否、水場の馬鹿力といったところか。

停電時に格納庫の中にいたのが功を奏して、まだ連邦の機甲はあまり出張ってきていない。だがそれも時間の問題だ。いくら隊長機とはいえ、一対数十では勝負になろう筈もない。

駆ける。ただひたすらに。

機甲兵は決して陸戦使用の兵器ではなく、陸、それも狭い室内での活動はかなり制限される。地を蹴り、僅かな対空時間をフェルマント領域での重力制御で延長。スラスタの最低出力で小刻みな移動。機体に任せた自動制御では、安定性に欠けるとして絶対に採用されない技術。ただ、先へ。時間は紅玉よりも貴重だ。

十字路。前方、右、左、それぞれから敵機が現れる。

現状、味方で動いている機甲兵はこの一機だけ。恐らくこの一機を潰すことに全力を掛けてきているのだ。

(行けるとしたら、いずれか一方！)

時間を取ってしまえば囲まれて殲滅される。構内の詳細マップをモニタの片隅に表示し、ラムサスが向かうであろう場所を検討する。自身のカンでは右。機体の計算によれば 右。

床を蹴って自身の眼前に躍り出てきたアランに、紺色の機体はむしろ虚を突かれたように一瞬立ち止まった。三方を押さえられ、引き返すとも思っただろうが 元より、後退などという選択肢は無い。

絶対的な数の優位という油断、構内での戦闘への戸惑い、その他の条件から非情な方程式のように導かれた結論。頭部のセンサを殴打し、崩れた体勢に更に連撃を重ねる。

「うわ、見えねえ」「おい、暴れるなッ」

跳躍し、天井を蹴って敵機を飛び越える。背後に集まる三体の敵機。

( 行け！ )

予め切り離していたフェルマント爆薬が炸裂し、無形の衝撃が悲鳴も絶望も屈辱もまとめて吹き飛ばした。吸い出される空気に反応した隔壁が降り、退路を遮断する。進行方法が閉じられてしまう前に、アランは慌てて先を目指した。

「 鬼ごっこはここまでにしよう、ラムサス」

「！……予想はしてたけど、やっぱりアランか」

そもそも、白い機体を見た瞬間にカールゼンと判断しなかった時点で、この男が何かしらの予想を立てていたのは想像がつく。

数メートル先を疾駆していた青い機体は、アランの言葉を受けてゆっくりと振り向いた。

「全部、お前の掌の上か？」

「それでもない。不確定要素には結構面倒を掛けられてるよ。教官

達にもかなり見破られているっぽいしな」

「そうか」

機体を並べて戦ってから、まだ二十四時間も経っていない。どこで何を踏み外したのか、どこで何を見逃したのか、アランにはよく分からなかった。

「俺を撃ちに来たんじゃないのか？ その為の機甲だろう」

問われて、はたと気付く。

「……追い付くことだけ考えてて、その後でどうしようかなんて思いもしなかったよ」

「ハハ、お前らしい」

向かい合う二つの機影。そのコクピットに座る二人の表情を移すこともなく、ただ無機質なセンサを向け合って。

「それで、どうするんだ？」

「お前次第だ。返答次第によっては……撃つ」

「返答、ね」

思案の沈黙が永遠にも思えた時、ラムサスはその機体の手を差し伸べた。

「こついつのはどうだ？」

真実を、教えてやる。その先をどう

決めるかはお前次第だ」

カールゼン中佐は言った。他の誰にでもなく、「アランに任せる」と。それは、彼が判断を投げたということではない。恐らく、彼の選んだ答えを、アランなら取るであろうという予想、信頼、その他の何かだ。

ならば、それに沿った答えを出すのが自分の存在理由というものであるろう。

平時の自分ならばどうするか。カールゼンの考える自分であれば、どうするか。

「……良いだろう」

アランは機内のマニピュレーターを掴むと、機体を前方にスライドさせた。

#### 第4章(6)(後書き)

機甲兵部隊の諸氏をもっと早く出せば色々とネタを作りやすかったのだからなあ、と今更ながらに後悔。生憎と彼等の出番はここでほぼ終了となります。お疲れ様でした。

## 第5章（1）

遺伝子を調整し、地球表層に生きた時代とは比べものにならないほど外見の多様性が増した人類にあっても、ヘモグロビンの司る紅はなお戦場を染める。緑髪の青年も、紫の瞳の少年も、吹き上げるのは赤い血飛沫だ。

港へと至る道は、白銀と赤の色彩に埋め尽くされた。

鏡面装甲の隙間に運悪くレーザーが命中した戦死者を余所に、戦鬪は中距離の射撃戦から肉弾戦へと移る。壁まで傷付ける火薬の類では、一歩間違えば友軍ごと深海に放り出されかねない。戦場の姿は太古の時代へと逆行し、ハルバード長柄斧やトマホーク戦斧、ナイフが視界を埋める。違いと言えば、海底の鉱床で採掘された材質が、刃をより強靱により残虐に駆り立てていくことであろう。

勝負の要は互いの艦艇がある港。辿り着くまで、機甲部隊もまた肉弾での鬪いを余儀なくされていた。滅多にない状況にも、カールゼンは不敵に微笑む。

「的も武器も小さ過ぎるな、やりにくくて敵わん」

機甲の中にあつてはもちろんのこと、生身の鬪いであつても歴戦の勇士であることを証明するまで、それほどの時間は必要としなかつた。

無造作な前進。戦斧を構え突撃してきた先頭の兵士を長柄斧の横殴りの一撃で吹き飛ばす。脳天をヘルメットごとかち割られた二人目が倒れこむ間に、三人目の首と胴体を切り離す。四人目を地に這わせたところで、目前の死を目の当たりにして怯んだ少年兵が目映った。

「お若いの、面白いもんを見せてやろうか」

右手だけで長柄斧を頭上に持ち上げ、無造作に放る。首を竦めた少年兵のヘルメットを掠めた長柄斧は真円を描きつつ宙を舞い、今まさに彼の部下に斬り掛かるうとしていた兵士を三人まとめて死神



に手渡した。

「軍隊で一人前になりたいなら、この程度の芸は練習しておけ」

呆然とした少年兵からあっさりと言を奪い取る。左手で少年を持ち上げると、驚きの声を上げる彼を大きく前方に放り投げた。装甲服をすっかり着ていれば骨折もせずに済むだろう。

八人目の犠牲者になるかもしれない男に向き直り、顔を顰めた。

「若者には説教を、か。なかなか中年親父が板についてきたじゃないか、中佐殿」

「……重役出勤とは余裕だな、ウォルフ」

「お前と違って効率がいいのさ、リック」

邂逅は唐突。

白銀の装甲服を真紅の染料で染め上げながら、旧友にして仇敵たる二人は刃を交えた。

長柄斧の一撃を戦斧の柄で捌き、返す一撃は宙を薙いで流れる。

きらめくカーボンクリスタルの刃が絡み合い、弾き合う。飛びすさって距離を取り、受け止め、受け流し。どちらも決定的な一打を与えられないまま数合。不意を狙った足蹴は咄嗟に腕で防がれる。荒くなり始めた息の下で、先に口を開いたのは祖国に背を向けた男だった。

「聞き忘れていたが、エレーナは元気になっているか？」

「お前がいなくなって、夜な夜な泣いているそうだ」

「……相方がいなくなって、ジョークの質が余計に落ちたな。嘆かわしい」

のほほんとした会話の所々に剣戟の粒を交えつつ、死神の伸ばす握手の手を押し付け合う。洗練された一撃一撃は武術の型を思わせ、だがそのどれもがギリギリで相手を捉えることはない。ここが戦場でなければ二人の死闘は達人同士の剣舞のように見えたであろう。

鮮血を軍靴の下に踏みしめ　半瞬、ウォルフガングの姿勢が乱れた。疲労か、痛みか、それとも死者の呪いか。理由はどうあれ、銀の髪を翻した勝利の女神は僅かばかり余所見をしたのだ。そして、

女神の浮気相手は半瞬を正確に貫き通した。

「終わりだ！」

単純だが強烈な一声と、それを上回る単調で暴力的な一撃が、かつての同胞の右半身で炸裂する。尚も左腕を伸ばそうとするかつての友人の姿を、氷蒼色アイスブルーの瞳が映し出した。

「……！」

装甲服の胸部と腰部の隙間、僅かな可動部に、針を通すような正確さでナイフが突き立つ。間髪入れずに捻りを加えられた刃が、ウォルフガングの生命を削り取る音を立てた。豪胆な男は自らの身体に奔る衝撃に、むしろホツとしたかのような笑みを見せ　そのまま仰向けに倒れこんだ。

切り落とされた右腕をまたぐと、リチャードはその側に静かに屈み込む。かすれる息の中で、独り言のようにウォルフガングが呟くのが聞こえた。

「裏切り者の末路としては、ちと、定型文テンプレートに過ぎるな。脚本家にもり直しを要求したいね」

「……あいにく、墓碑銘の無料サービスはないぜ。さっさと自分で決める」

冷たく突き刺すような視線は、たとえ無理に作るうとしたものであったとしても、そうとは見せないだけの意思の強さを伴っている。旧友の固い表情を見上げて、かつての同僚はかすかに微笑んだように見えた。

「……」

急速に生気の失われていく、その口元が紡ぎ出した言葉。リチャードは一文字一文字を脳裏深くに刻み込む。

振り返る。戦斧トマホークを拾い上げる。

端役の幕はここで閉じる。だが、誰も知ることのない舞台裏で、なお終わることの無い戦いがあるのだ。

「エンブローア兵士諸君ッ、ポーナスの稼ぎ時だぞ！」

## 第5章（1）（後書き）

最終章突入。

カールゼンVSウォルフは機甲ではなく生身、という形になりました。ここでもつかい深海に出ていくのも何か不自然ですし。現段階でカールゼンの機甲はアランが乗ってるので……。 「緋色の悪魔」にラムサスが乗ってる。的な展開もありえたのですが、彼は自分の乗るだろうということ却下。

実はこの部分、かなり初期の段階で出来上がっており、ここに沿うように展開を制御した面もあります。「あれ、連邦は機甲使えば勝てるんじゃない……」と気付いてしまったので、前章でアランくん頑張ってもらったことになりました。合掌。

## 第5章(2)

\*\*\*

薄暗い夜の中を二人歩く。字面だけを眺めると何やらロマンチックな光景に思えるが、その実は裏切った男と裏切られた男が雁首揃え、巨大ロボットを走らせているだけのことである。山場クライマックスにしては色気に欠けること甚だしかった。

半球型の拠点を、ひたすら中心部へ。気付けば、軍部とは関わりのない、採掘現場としての区画に深く入り込んでいる。大扉を開ければ、地中に斜めに掘り下げられた坑道に出る。普段であれば、民生用の機甲によってフェルマントの採掘が行われる場所だ。透明なチューブで覆われたその先に、岸壁のそこかしこで光るフェルマントの薄い光芒が煌めいていた。此処を護るために、彼等は戦ってきた。言わばそこは、立ち入ることの許されなかった聖域だ。

「奇妙だと思わないか？」

突如掛けられた声にアランは戸惑う。無言を肯定と受け取ったのか、紫水晶の瞳の青年は振り向かないまま言葉を紡いだ。

「都合が良過ぎる いや、悪過ぎるんだ、この世界は」

海底で済むことを余儀なくされた。

そこに、都合良くフェルマントが在った。

フェルマントの応用技術が行き詰まった。

ムー遺跡が見付かった。

「何か問題が生じるたび……それに対する手段と解答が与えられている。まるで幼年学校の初等教科書みたいにな」

「それは……そういうものじゃないのか？」

アランは歴史の学徒ではない。歴史というのは、偶然と必然とが寄り集まったタペストリーのようなものだ、漠然と認識していた。あるべくしてあるもの。それが歴史だと。

「そう考えられるレベルかもしれない。でも、作為があると考ええるならば、辻褄が合う。因果律の女神ではなくて、小汚い作詞家の領域だよ」

「もしも、此処が誰かがお膳立てした舞台なのだとしたら。」

「誰かの掌の上で、自分たちは戦争ごっこをさせられているだけなのだとしたら。」

「そもそも、この戦争の理由からして不可思議だ。俺達は何のために戦っているんだ？」

「何故って……それはフェルマントのためだろう」

「それを本心で信じられるか？ 経済、政治、あらゆる事情をすっ飛ばして、何でただ『フェルマント』のためだけなんだ？ まるで鋳型のようにシンプルなんだよ。彫像のように滑らかで穢れなく、聖者のように分かりやすい思想さ。本来、戦争なんてものは、様々な社会的事情が重なってようやく生まれるものだ。道義と正義で仮面を被り、策略と籠絡で敵を悪役にする。後先考えず、ただ戦いたいから戦うだなんて、そんなのはガキの遊びに過ぎない」

「そんな穿った見方をすれば、何だってそうなるじゃないか」

「何でフェルマントが必要なんだ？ 実際、フェルマントが何に使われているのか考えてみたことはあるか？ 戦争用の機甲のためにフェルマントを求めるなんてのは倒錯だ。確かにフェルマントのお陰で遠距離輸送が簡単にはなっただろう。でも、フェルマント無しで生活が考えられないんじゃない、考えられなくさせられているんだ。フェルマントが見つかる前にだって、海底で人は暮らしていたんだぞ」

「ラムサス……お前、何が言いたい？」

「こいつは、この世界は、都合良く造られた物語に過ぎないんじゃないかってことだ」

頭がクラクラする。この男は　ラムサス・コーンフィールドは何を言っている？

「物語に飲まれるんじゃない、アラン！　天の声なんかには耳を貸す

な、お前と話しているのは俺だ。お前の言葉はどこにあるんだ？」  
強い叱咤の声。

もしも、これが造られた物語に過ぎないのだとしたら。  
死んだ仲間たち。撃つた敵。壊れたもの、壊されたもの。

「じゃあ、エンブローアが危機的状况に追い込まれたのも」  
「その通り。このオレが、物語の主人公だからさ」

\*\*\*

「物語つてのは、ずっと均衡状態じゃ面白くないんだ。主人公はピ  
ンチに陥らなくてはならない。そして、そこから逆転劇を起こさな  
くてはならない。物語というのはどうでもいい誰かの一生をダラダ  
ラと書き連ねるものじゃない。他の誰にもできない何かを成し得る  
者がいて、そいつが成長するその一瞬を切り取ったもの、それが物  
語なんだ」

「……何を言っているんだ、ラムサス」

「『奴ら』はオレを主人公に 『視点の持ち主』に据えたのさ。  
物語の中核で踊るための体の良い人形にな。わざわざ青い髪の毛と  
紫水晶の瞳なんて外見的特徴まで超越しやがって」

まあ、お陰でプライベートは楽しめたがな。

飄々とした調子の友人に、アランは頭に鈍い疼痛を感じた。この  
時代にあつて、外見的特徴など遺伝子のレベルで弄れるものでしか  
ない。それにしてもコーンフィールド家の青い髪は珍しいものだっ  
た。それが、然るべきものとして設定されたのだと、彼は言うのだ。  
「『奴ら』……政治家のことか？」

「当たらずとも遠からず……か。それにしてもお前も存外、軍閥化  
思想の持ち主だったんだな」

混ぜっ返すような言葉に顔を顰める。無論、相手には見えていな  
いだろうが。

「そりゃあ、色々と思う所はあるさ。毎月の給与明細とかを見てる

とな」

「フム、至言だな」

急な傾斜をホッピングするかのようになり、二機の機甲兵が降りていく。チューブのそこかしこに巨大な二重扉が付いているのは、そこから作業用の機甲兵が出ていくためのものだろう。傍らには生身の人間用の高速エスカレーターもあったが、ラムサスはどうやら機甲に乗ったまま深部にまで往くつもりらしい。

「ん……？」

奇妙だ。本来、発掘というのは次第に奥まで掘り進めていくもの筈だ。それなのに、この坑道には延長した痕跡がない。

まるで、最初から最深部まで到達しているかのように。

両端が出来上がった坑道を、少しずつ内側から喰い広げるように発掘が進められている。

「気付いたか。やっぱり、この奥に在るんだな、宝箱が」

「宝箱……」

いつの間にか、ラムサスの言葉を繰り返すだけのオウムになっている自分に気付く。衝撃的で絶望的で刹那的な真実。

そして、ようやく気付く。ラムサスは裏切ったわけでも、裏切っていないわけでもない。

そもそも、裏などないのだ。世界が二元論から乖離した今、相反する答えなど存在しない。エンブローアもローレンハイムも、ラムサスにとつての絶対にはなりえない。

自ら人形である気付いてしまったオートマタ自動人形は、もうカラクリ仕掛けのままではいられない。いつか降臨する機械仕掛けの神の正体デウス・エクスマキナに気付いてしまったのなら、その枯れ尾花に触れてみずにはいられない。

ならば、この男の目指すものは。

「お前の敵は、誰なんだ？ ラムサス」

「……地上に住んでいる支配者共。この醜悪な物語の脚本家さ」

\*\*\*

それは、ウォルフガング・ペーターゼンがリチャード・カールゼンに語り、エレーナ・ロドクリフとラムサス・コーンフィールドが共有した秘密。

天上　否、地上の支配者。

何故、海底になど住んでいるのか。

何故、地上は放棄せざるを得ないほど荒廃したのか。あるいは、したとされるのか。

そして、遙か昔、地上から見えたという空は今自分が見ている空とどんな風に違ったのだろうか。

アラン自身も己に問うた、童の語り歌のように御伽噺じみた無意味な問い。そういうものだと受け入れた、ありのままの現実。

「星間戦争は確かにあったんだろう。だが、その先が違う」

歴史は勝者が作る。ならば、この場合の勝者とは誰なのか。

「オレたちは星間戦争の明確な勝者を知らなかった。ただ、地上が荒廃して住めなくなったのだと。だが、地上は本当に荒廃しているのか？ 負けたのは、地上の側だったのか？ もし、地上は勝者の側だとしたら」

数年前　軍施設で起きた、フェルマントの暴走事故。あの日、その場にいた民間人はラムサスの妹・リリシアのみだった。だが、既に軍属であったラムサスもまた、生と死の境界を揺蕩うことを余儀なくされていたのだ。

「あの日　オレ達は研究施設で研究員をしていた両親の所へ行っていたんだ。研究が大詰めになって帰るに帰れなくて、あのままじや何日でも着の身着のままでもいいそうだったからな」

あの年齢にしては、自分と妹の仲は良好だった。それが恨めしい。もしも、自分が一人で研究所に行っていたならば。



そして、事件は起き。

かすれる意識の中で、ラムサスは集中治療を受けた。他でもない、ラムサス一人が。

『死なせるな！ こいつは「主人公」だぞ』 『今度の興行にどれだけのスポンサーが付いてると思ってるんだ！？』 『くそ、誰だよ家族が死ぬなんて悲劇イベントを用意したのは。本人巻き込んだじゃ台無しじゃないか』 『大損だ、何としても生かして海底に戻せ』

そして、海底の技術では決して助からぬ傷を負っていたはずのラムサス・コーンフィールドは、地上の意思によって帰還した。それは、生という名の呪い。終わりたかったものを終わらせることのできない、「主人公」という孤独。

全ては仕組まれた歴史ものがたりの通りに。

「エレーナの姐さんにどういう事情があるのかは知らない。おそらく、軍部の広報官をやっていた時期に、何かしら知ることがあったのかもしれないな」

そして、もう一人。

「教官が ウォルフガング・ペーターゼンが国を捨てたのは、オレのせいだ」

抱えた真実は、二十を僅かに過ぎたばかりの青年が一人で保ち続けるには大きすぎるものだった。だから、彼はその時点で最も信頼のおける大人 全てを失った彼に残された、敬愛すべき教官に全てを話したのだ。

「あの人は、オレ以上に早く理解した」

この戦争は、全てが地上の人々にとって「興行」でしかないということ。海底での戦争を、彼らは遊戯か何かのように鑑賞しているのだ。ならば、これまでの戦いは。これからの戦いは。

己の半生が茶番に過ぎないと知らされた、その困惑と憤怒は。「そして、世を夢んで国を捨てた」

それは、地上の人々としてはあり得ない暴挙であつただろう。彼等が創りだしてきた物語のバランス、その後の展開の全てを書き直させる、それ以上ないほどの「嫌がらせ」。もしかしたら、それすらも彼等の台本に織り込まれていたのかも知れないが。

そして、エレーナ・ロドクリフという次の理解者を得たラムサスは、行動を開始した。エンブローアの情報局とコンタクトを取り、二重スパイとしての活動を始めたのだ。エンブローアの情報をローレンハイムへ。ローレンハイムの情報をエンブローアへ。双方にとって有益な存在となつて、己の求めるものを探し続ける。どちらの味方でもなく、ただ自分の目的のため。

「主人公」の暴走を見咎めた「地上」は、ローレンハイムの側に肩入れすることでエンブローアが不利になるような状況を作った。胴元が仕掛けをしているのだ、プレーヤーはいざ知らず、駒にはどうすることもできない。

「地上の奴らは、確実にオレを追い詰めようとする。それでオレがエンブローアのために何かすれば儲け物だし、ローレンハイムに本当に寝返ったところで、何とかうまく帳尻を合わせたんだらうよ」  
そして、ついにラムサスは「宝箱」を見付けた。

## 第5章(2)(後書き)

謎解き解その1。

ミステリを志向したわけではないので伏線とかを十分に検討して張ってはいません。「なんじゃそりゃ」とモニターを投げられない程度に……。

## 第5章(3)

\*\*\*

「主人公」が裏切り者であるかもしれないという状況のまま、物語の幕が上がる。

「裏切っている可能性が一番高いキャラクターを視点にすることは物語としての破綻だ。だから、俺は主人公だけれど、視点の所在ではありえなくなった。おそらく、オレの代わりに「主人公」になっているのは、お前かカリューだ。まあ、性格的にカリューはあり得ないだろうがな。ここにエレナさんがいない以上、教官たちの物語はそれそのものとしては成立しえない筈だ。ヒロイン不在、というわけにもいかない」

裏切りを演出することで、本来「主人公」であったはずのラムサスは誰かの視点になることから逃れた。影の存在として一矢報いる機会を求め続けていたのだ。

「地上」からの情報を使ってエンブローアを追い詰めるローレンハイムに絶妙なバランスで肩入れをしつつ、エンブローア軍が崩壊しないように手を回す。その目的は、誰にも見咎められずに「宝箱」に辿り着くこと。

「そのためにわざわざ査問を受けさせられて、無血開城の状態を作つて、このタイミングで反撃の糸口を作つた……？」

エンブローアもローレンハイムも拠点の主導権を握ることに意識が向いている。フェルマント採掘坑に眼を向けるものなど誰もいない。軍人だけではなく、民間人の採掘者も武器をとって暴れているのだ。

地上の人々が描いた台本に反旗を翻す、ラムサスの手になる異伝。「それは買ひ被りだよ。カリューの奴が邪魔をしなければ、もつとうまいやり方は幾らでもあった。お陰でティファには嫌われるし、

散々だぜ。それに、思ったほどオレに疑いが集まらなかった。下手をすると、準備が出来る前に見破られて、主人公に返り咲かされてしまつかもしれない。一時はどうしようかと思ったよ」

エレーナに耳打ちされた言葉は、カールゼンに迷いを生じさせただろう。それでも彼は部下であるラムサスに不当な扱いを一度足りとも行わなかった。そして、親友である青年もまた、友人の善性を疑うことがなかった。

それは何て素晴らしい、何て物悲しい、計算違い。

「でも、教官の　ペーターゼン少佐のお陰で、俺が裏切っても可笑しくない下地ができた」

只の一兵卒が何をしたところで状況は変わらない。ラムサスに疑いを抱いてもらうためには、彼一人だけでは難しかった。かつての上官が裏切っていたからこそ、彼を疑うにふさわしい状況が作られたのだ。彼の存在が迷探偵の暴走を引き起こした。

裏切った教官。嫉妬する同僚。代わりの主人公としての親友。自分を疑う上官。そして、親友と自分を繋ぐヒロイン。誰がこの場に欠けても成立しなかった綱渡り。

「なあ、もしかしたらあの人はそこまで考えて　」

「まさか。少佐のことだ、何かする意志があるなら自分でどうにかしただろうよ……まあ、そんな綺麗な結末を信じるのもお前らしいかもな」

チラリと振り返る。

「もうちよつと具体的な証拠に戻ろうか。フェルマントが地球の海底にあること自体が奇妙なんだ。西暦の昔、地球表層時代にだって地球の人々は海底に達していた。海底鉱床について十分な調査だつて行われていたはずだ。どうして、俺達の時代になってフェルマントが海底で見付かって、その効用が発見されたのか」

過去よりも今が素晴らしく、今よりも未来が輝いていると思いつむのは個人の自由だ。だが、こと社会について言う場合、それは必ずしも成り立たない。過去の技術レベルを低く見積もるのは勝手だ

が、過去の人々がその通りに生活してやる義理も義務も存在しないのである。

「考えられる可能性は、二つある。一つは、此処が地球ではない場合。つまり、適当な地図を作って、ここが地球だと偽っている場合だ」

ラムサスに言われるまでもなく分かった。彼は、この可能性を信じてはいない。

考えてみれば単純なことだ。ここが地球でないのならば、わざわざ地球だと思い込ませる必要がないのだ。アランたちは星間戦争の存在を　たとえ、思い込まされているだけだとはしても　知っている。だとすれば、その後、人類がどの星の地表に拘束されようと、本質的な違いはない。

それよりは、他に比べて詳細な海底の「地図」がある地球の方が、この箱庭の戦場を創り上げる上でも、管理する上でも楽だったことだろう。

「……もう一つは？」

「ここが地球で、わざわざどこから持って来たフェルマントを埋めに来る奴らがいる場合」

オレは後者に賭けるがね、と彼は続けた。アランにも、もう異論はない。

二人の短い旅路は、いよいよ終着点を迎えようとしていた。

「ココだよ、オレの目的地　そうさな、『約束の場所』とでもしておこうか」

ラムサスが指差したその巨大な扉を見やり、アランはようやく合点がいったというように頷いた。

ボーグラン採掘拠点、最奥部。一部の高官のみが入ることを許された場所。

「別に女子寮に入りたかったから高度なアクセス権限を要求したわけじゃない。ただの一兵士には開けられない、秘密の扉。宝箱は、此処にある」

その扉を開く。

\*\*\*

開かれた扉の奥、廊下の薄暗さに慣れた眼を射抜くほどの明度。採掘坑の深部、本来であれば未踏のフェルマントが眠る筈のその地に、巨大な円筒状の機械が鎮座していた。流線型を描くそのフォルム。底部にはスラスタらしきものと尾翼がある。潜水艦を思わせる形状だったが、その先は天井を向いていた。

「これは……？」

「地上からフェルマントを運んだんなら、輸送手段がどこかに残っている筈だろう」

研究が進められるムー遺跡であれば、海底の人々に気付かれてしまいやすい。そのためのもーグラン拠点。周辺を急峻な海底山脈に囲まれた、入り組んだ地形。最前線であり、研究者が立ち入り難いのもカモフラージュとして機能しただろう。

天井を見上げれば、恐らくはシャトルを運び込んだのである。開閉式の扉がご丁寧についている。ラムサスは一つ息を吐くと、機甲兵から降りて輸送機の傍に歩み寄った。しばらく色々と手を触れていると、やがて機甲兵のコクピットの物に似た立体操作盤が顕現する。

「よし、まだ生きてるな」

男性的な逞しい指を力強く動かし、次々とコードを入力してゆく。アランも彼の傍に降り立ち、その満足気な表情を訝しげに覗き込んだ。

「おい、これが『宝物』なのか？」

歴史的な遺物ではある。もしかしたら、海底にはない技術も載っているのかも知れない。だが、それがラムサスの言う宝物には思えなかった。

しばし傍らの親友を見遣った後、ラムサスは呆れたように、それ

でいてホツとしたように、微笑んでみせた。

「こいつでフェルマントを返してやるのさ、地上へ」

唐突な内容に処理の追いつかないアランに、蒼い髪青年は言葉を重ねる。

「知ってるか？ 地上つてのは、空気に 酸素に満ちた場所なんだ」

フェルマントは、酸素を媒介にして反力を発生させ、オゾンを生み出す。フェルマント自体は触媒として働き、自身を変化させない。即ち。地上という開放された空間において、フェルマントは酸素を喰らい尽くし、毒を撒き散らす猛威と化すのだ。この海底ですら、あの鉱石の扱いに失敗した軍の研究所が丸ごと犠牲になったではないか。

もしも、此処にあるフェルマントが纏めて地上に送り込まれたなら。

ラムサスの熱を帯びた瞳に反比例するかのようには、アランの胸中を冷たい風が吹き荒れた。

「何を考えてるんだ、ラムサス！ その地上人だって生きてるんだぞ」

「はは、やっぱりお前は『完全無欠の偽善者』だよ……でもな」

無邪気な子供のような微笑み。その裏にある憎悪と決意を、いつから自分は見失っていたのだろうか？ 機甲兵に乗って会話をしていた時間にも、彼の表情はこんな色を浮かべていたのだろうか。熱病に浮かされたかのような友人の瞳。普段は美しいとさえ思うその紫水晶の瞳が、今はただただ、怖い。

「オレはオレの周囲にいる人間の方が、この手で触れられる人々の方が大切だ。聖人君子志望のお前とは違うんだよ」

「俺は別にそんな ッ」

「それ以外の何だつて言うんだ？ オヤジは死んだ、お袋も死んだ、リリシアはもう戻ってこないッ！ それでもにこやかに踊らされ続けているというのか!？」



「ラムサスっ」

「オレは止まらないぜ。それとも、力尽くでも止めてみるか？」

その挑戦的な瞳。燃え上がる憎悪の焰。それが反って、アラン・クーリッジの思考を冷やし、冷徹なまでにクリアにした。

機甲兵を振り返る。痛めた左腕を今更ながらに意識する。

「真実を聞いた上で決める。そう、言っていたよな？」

これは裏切りなのかも知れない。知らない方が良かったなどと言うつもりはないが。知ってしまった上でしがみつこうとする自分は、海底の人々全てにとって許せない敵なのかもしれない。たとえ最初で根源的な動機が復讐だとしても、ラムサスの目指すものは解放だ。それは、ここにいる全ての人々を救うための、たった一つの方法なのかも知れない。

だが、それでも。そうであっても。今その手を染めようとする友人を止めずには居られないのだ。自らも理解しきれぬ衝動のままに。

金髪の青年の声に嘆息を重ねて、ラムサスもまた、己の機体を振り向いた。

「良いぜ、こうなることは分かっていた気がする」

「それなのに俺を連れてきたのか？」

「さあて、どうしてだろうな？ 最後にコインを投げてみたかったのかも知れない」

蒼と白。各々の機甲の元へと歩み寄る。物言わぬ鋼鉄の巨人。どこか寂しそうに見えるのは、自分の中の感傷のためだろうか。手を經由して跳躍、コクピットを開放。中に滑り込む。起動シークエンスも発艦シークエンスも終了している。もう、躊躇うための時間はない。

「……準備はいいか、アラン」

覚悟ができたなら、始めよう。二人だけの、死の舞踏を。ラスト・ダンス

左腕の荷電粒子砲を投げ捨て、腰からナイフを引き抜く。落ちた砲身が床に傷を付け、鈍い音を立てて転がった。

「こんな時まで、冷静だな」

「こんな時だからこそ、だろうな」

この親友といれば、何だつて出来る気がしていた。彼が隣にいるときでも、背中にいるときにでも。

だが、彼が正面で。しかも、向かい合っているときならば、  
どうなのだろう。

自分は彼を撃てるのか。その問いに十分な時間を与えられないまま。

「サヨナラだ、アラン！」

二人が今まさに互いに銃口を向け合おうとしたとき。

三人目と四人目の闖入者が同時に現れ、アランは疑問に答えを出す機会を永遠に失った。

## 第5章(4)

\*\*\*

「ラムサス、貴様ア！」

「カリューシャス!？」

「ティファ……!」

宿命という言葉があれば、こんな時に使われるのかも知れないと、ティファは思う。胸元をはだけさせられた格好のまままで恋人とその親友の前に突き出される羞恥と憤怒を、状況への冷めた諦念が上回っていた。

「貴方たち……こんな所で何を戯れてんのよ。白鯨に乗ってヒロインを助けに来てくれるトコロじゃないの？」

思わず皮肉が口を突いて出る。

「……それを言うなら白馬だろ」

彼女の言葉に先に反応したのは、元・婚約者の方だった。概ねは予想通りである。

「馬ってよく知らないのよね」

「初デートの時に陸族館で見ただろッ！」

「捨てたオトコのことは即座に忘れる性質なのよ、私」

「お前、オレと付き合うまで彼氏いない歴を順調に更新して……いや、済まない」

夜叉の表情になったティファをセンサで捉えたのか、ラムサスは言い淀んで口を閉じた。

「カリューシャス、いったい何を……」

漫才に取り合わず、現状認識をいち早く取り戻したのはこれまた予想通りの人物。どうせなら別のことに動揺して欲しかったものだけれど。

そして、ティファ・ブライクは思い出したくもない現実と改めて

向き合った。

その瞳から完全に正気の色を消去したカリューシャス・イワブチは、アランとラムサスが向き合っている現状を見て唇の片端を吊り上げる。

「ようし、アラン……。その男の婚約者はこの俺が押さえている。安心して殺せるぞ」

(元・婚約者だけどね……。あ、こいつ知らないか)

「カリュー……。自分が何をやっているのか分かってるのか!？」

「友軍の支援、という奴さ。それ以外に何がある？」

半身をこちらに寄せた蒼い機体が、呆れるように一言呟いた。

「理解しているか？ お前、いま最高にみつともないぜ」

「裏切り者が何を偉そうにッ」

咆哮したカリューシャスは白い機体へと向き直る。

「撃てッ、撃ち殺せッ！ そのための機甲兵だろッ、それはッ。撃てなければ何の意味がある！ 俺達はそのためのイキモノなんだぞ！」

かつて、リチャード・カールゼンから聞いたのと似たような言葉だった。だが、似ているのは表面だけだ。その奥に潜む覚悟と自嘲を、きつとこの男は忘れている。取り違えた誇りほど、醜いものはない。

「カリュー……」

固まるような静寂。銃口をもう一機の機甲に向けたまま、アラン・クーリッジは固まっている。状況の急変に、その生真面目な思考が付いていけないのだ。全く彼らしいと、こんな時だというのに笑いたくなる。

自分に向けられた冷たい銃口は、気付くまでもなく意識の外にあった。

「何でだよ！ どうしてだよ！ 撃てよッ、撃ち殺せよッ！」

激昂する同僚の姿に、もう何も言うことができない。ただの独り相撲だ、こんなものは。

こんな奴に殺されるなんて業腹だが、人生などこんなものかも知れない。

(美人薄命って言うしね……)

だったら自分は長生きだ、と笑い飛ばしたこともあるが。

自身でもそうと分らないほど混乱していたのだから、思考の寄り道を繰り返していたティファ・ブラ行くは、次の一言で我に帰った。

「アラン、てめえはやっぱりその裏切り者の味方かッ！ もついい、俺がやるッ」

欲しい物を買ってもらえない幼児のような表情で。目の前でオモチャを取り落としてしまった童子のような憤りで。全てを剥ぎ取られ絶望だけを残された素のままの自分で、カリューシヤス・イワブチは銃口をティファに強く押し当てる。

「止める、カリュー！」

「その機体、端末の個人使用制限を解除してあるんだっただな……？ 降りてこい、アラン・クーリッジ。機甲兵<sup>ぶき</sup>を俺に寄越せッ！」

コクピットが開く。金色の髪が顔を出す。彼が自分の側頭部に押し当てられた銃口を見る視線。その中に怯えと恐怖が混ざっているのを確認して、自分も泣き出しそうになる。

「こつちこいアラン！ この女抑えてろッ」

カリューシヤスを刺激しないよう、ゆっくりと歩み寄ってきたアランの手が、ティファのそれを掴んだ。温かな温もり。

「よし、そのままだ。こつちを見る」

銃口をティファに向けたまま、カリューシヤスが一步步離れてゆく。緊張のあまり崩れ落ちるティファと、彼女を支えるアランとを、その瞳に映し込んだまま。

白い機甲に手を掛ける。

「ラムサス、武器を捨てて表に出ろ」

「……分かった」

落ちるブレードとサブマシンガン。念を入れてそれらを蹴り飛ば

させておいて、カリューシヤスはコクピットへと躍り上がった。

\*\*\*

三人の同期が見守る中、カールゼンの愛機のコクピットが閉まる。復讐と絶望に取り憑かれた男をその中に宿して。

「アラン」

怯えたような彼女の声に、アランは一瞬の躊躇いの後、親友の恋人を抱き締めた。これで、彼女の恐怖が僅かにでも取り除かれるのならば。

「見せ付けてくれるねえ、お二人さん」

彼の髪と同じ色の機甲兵。その掌の上で腕を組み、ラムサス・コインフィールドがそんな二人を見下ろしていた。

「ラムサス……これは、その」

「構わねえよ、どうせもう『元・婚約者』だからな。それに、ティファが好きなのはお前の方だ。横恋慕なんてするもんじゃないね」

「分かってたんなら、どうして告白なんてするのよ、貴方……」

「そりゃあ、いつまで経つても素直にならない誰かさんをビビらせるためだろう。オレの妹を好きでいてくれるのは嬉しいんだがね、そろそろ解放されても良いんじゃないか」

「……こんの、大馬鹿男」

この期に及んでなお余裕のある口調を崩さないラムサスに、白い機体の右腕が真っ直ぐに向けられた。

「くくく……裏切り者め、この俺が始末してやる……！」

「どっちかというとお前の方が悪役つばいけどな」

「言っている。ようやく俺が勝つ。俺が認められる。俺が英雄だ。ついに、ついに、ついにッ！」

「寂しいねえ、こんな風にしか自己表現ができないお子様は」

白い機体を淡い燐光が包みこむ。その色は蒼。吹き荒れる反力の嵐に、周囲の壁面が押されるように崩壊してゆく。アランはティフ

アは庇うように身を寄せた。

「やめるカリューシャス！」

カリューシャスがやるうとしていることを悟り、金髪の青年は必死に呼び掛ける。駄目だ、そんなことをしてしまえば

「死ねえエエツ

！！」

白い巨人は、その右腕に持った荷電粒子砲を最大出力で作動させた。

そう、未完成の、非制式の化物兵器を。

吹き荒れる光の波濤はオレンジ色の髪の毛の男が狙った方向に飛ぶと同時に、全てを喰らい尽くす勢いで暴走する。砲身を取り巻き、周囲を焼き尽くそうとする白い業火。

至近距離でその渦を受けた純白の機甲兵は、搭乗していた男が訪れた死の天使を認識する暇すら与えず、一瞬で消滅した。

## 第5章(5)

\*\*\*

「くく……最期の最期までかき回してくれたな、あのバカが」  
吐血。カリューシヤス・イワブチを飲み込んで収束した暴走兵器は、その刹那に蒼い機体の搭乗者にも大きな傷を残していた。

リチャード・カールゼンをもって「じゃじゃ馬」と称される機体を、半ば正気を失った状態で、しかも全手でマトモに制御出来るはずが無い。カールゼンもアランも、そんな状態である化物兵器を使用できるなどという幻想には取り憑かれなかったのだ。完璧に完璧に完璧を期してようやく制御できる、未完成の究極兵器。それをこんな場所で最大出力で扱ってしまったえば。

「まあ、こういうことに、なるよなあ」

採掘坑の最奥部、地上からの支配の痕跡を残したその場所は、カリューシヤス・イワブチによって無残な破壊に晒されていた。

ラムサスが打ち上げようとしていた輸送機械も、格納庫部分に大きな傷跡が開き、とてもフェルマントを搬送できそうな状態ではない。

（こいつは、賭けに負けたことになるのかな？）

まさかのジョーカー。カリューシヤス・イワブチ。地上から送り込まれた執行者なのではないかと疑いたくなる。だが、此処はラムサスの物語。地上に反旗を翻すための、残された主人公の最後の生き様だ。カリューシヤスはその中で、さらに自身の場所を創り上げた。

（大したやつだよ、お前は）

ただその言葉だけを手向けに。

腹部から滲み出る生命の証を押さえつつ、ラムサスは紅の滲む視



界で親友の姿を捜し求めた。倒れ伏した少女を助け起こす、金髪の髪の青年。

「ティファ……」

「無事だよ。意識を失っているだけだ」

「そうか」

安堵の吐息は、激痛となって全身を駆け巡った。もう長くはないだろうと、他人事のように思った。アランは無事だ、ティファも生きています。それならば、もう一つの目的は達せられたことになる。復讐でもなく、正義でもない、彼に残された小さな欲求<sup>エゴ</sup>。

そして、残りはあと一つ。我ながら欲深いことだ。

小さな足音が近付いてくる。いや、これは自分の耳が機能を失いつつあるのだろうか。どちらでも大した違いはない。でも、せめてもう少しだけ。

「……アラン、頼みがある」

声を掛けられる前に呼び掛けた。

もう、どうにもならないことが一目で分かったのだろう。目の前の青年は必死で感情の波を押し殺しているように見える。それさえ駄々漏れなのだからお笑い種だ。あんなに、他人の感情には鈍感なのに。

良いよな、リリイ？ オレ達兄妹から、この男を解放してやっても？

アランの傍に、もういない妹の姿が薄っすらと見えた。あの時と同じ姿と声で、「仕方ないわね」と頬を膨らませながら。もうこの瞳は、世界の境界を渡り始めている。

大丈夫、もうすぐ其処へ行く。遥か空へ。天上の星へ。

「大丈夫か、ラムサス」

何時まで経っても「頼み」を口に出さない友人に、アランは心配になったようだった。こんな状況で大丈夫もヘツタクレもないだろうに。こんな朴念仁にティファを任せていいのか、本気で心配になっってくる。

「あの輸送機械は、まだ生きてる。設定も、残っている筈だ。オレの死体を、オレの機甲ごと打ち上げてくれ」

「……どうということだよ、ラムサス」

ああ、そこで理由を問うのか。

本当に察しが悪い男だ。もううまく動かない顔面の筋肉が、薄っすらと苦笑を形どった。

「悪いが、先に星を見に行かせてもらうぜ」

星を見に行く。その約束。一緒に叶えるわけにはいかなかったが。

天上まで打ち上がるあの箱舟なら、水の障壁も、天上の闇も貫いて、きつと地上まで自分を運んでくれる。終わらない夜を抜けて、失われた本物の空まで。

「お前……まさか最初からそのつもりで」

「まあ、解釈はお前に任せるよ。その方がみんな幸せでいられる」  
馬鹿な男だ。だけど、だからこそ、彼は近くの人々を幸せにするのだろう。自分にはできなかったことだ。それを羨ましく思うこともあったし、妬ましく感じることもあったけれど。

オレが認めた唯一の親友。オシリー・ワン

「それと、こいつはお前が持つててくれ」

痛む身体を叱咤し、左手の薬指から外す。婚約指輪……否、それを模しただけの、フェルマントの指輪だ。ティファとお揃いの本物の指輪の在り処は、このまま自分の心に仕舞い込んで持つて行く。それぐらいの贅沢は許されるだろうか。

「こんなのがお前の役に立たないことを祈ってるよ……ティファを、頼む」

意識が薄れる。でも、もう十分だ。言いたいことは全部言った。友人が自分の遺志を継ぐのか。それとも、このまま世界と折り合いを付けて生きるのか。それは、もう自分の物語ではない。

サヨナラだ、ラムサス・V・コンフィールド。

カーテンコールは、要らない。

\*\*\*

友の名を呼ぶ悲痛な叫びは、打ち上げられてゆく機械の轟音に飲まれて消えた。

## 第5章(5) (後書き)

ラムサスが死ぬことは規定路線でした。ある意味で、執筆者に最大限に抵抗したのはカリューシヤスかも知れませんが。奴の動きは本当に掴めなかった……。ティファを取り合い四角関係にする案もありましたが、結局ラスボスみたいな形に。

前作(消去済み)などで「キャラクターを無理に動かしている」という指摘を受け、今作でも途中まで同様の感覚が拭えませんでした。それがゆえ、そこから脱却するという意味での、脚本家に反旗を翻すキャラクター、という路線でもありません。

彼等の物語は彼等だけのもの。執筆者はそれをデバガメさせてもらうだけ。

次回で最終話となります。

## エピソード

?ラムサス・ヴィンセント・コーンフィールド

255~283 (享年 二十七)

星を目指した男、此处に眠る?

「先、越されちゃったな」

アラン・クーリッジ中尉は親友の墓標から少し離れて立ち、今や二階級上になつてしまつた友への恨み言を呟いた。右手にぶら下げた花は、蒼い花弁から穏やかな香りを放っている。その花の代金の半分は、あの若い整備兵達の賭け金から支払われた。賭けの勝者はラムサスであると主張し、全額をせめてもの手向けにしようとした彼等の思いを拒む理由は、アランには無かつた。

彼と墓標の間にあるのは、親友たちの間に割つて入ることを許された、生者ではただ唯一の存在。真新しい墓石の前に黒衣を身に纏つた若い女性がひざまずき、婚約者の冥福を祈る。声をかけることも出来ず、アランは祈りの言葉が鼓膜を打つに任せた。見上げたドームの空は、雲一つ無い快晴。彼と、その妹を思わせる、透き通つた蒼が揺れる。

やがて立ち上がり、アランを振り返つた彼女の瞳は、乾ききらぬ涙に濡れて輝いていた。穏やかな『春』の風が、彼が愛してやまなかつた栗色の髪を優しく撫でていく。その髪を押さえた手は、頼りないほど小さく、白い。

「アイツ、星を見ることができたのかな」

ティファの声は不思議なほど落ち着いていた。全てを知り、共有した者同士の言い表しようの無い連帯感が二人を包む。

勿論、と強く言い切ることは出来ず、アランの答えはやや曖昧なものとなつた。

「きつと、満足したと思うよ」

しばしの沈黙。アランは歩を進めて彼女の隣に立ち、親友の髪を彷彿とさせる花束を墓石へと手向けた。ティファの方を向いた彼は何かを思いついたようで、慎重に言葉を選びながら話し始める。

「昔……。詳しくは知らないけど、人類がまだ地上に住んでいた時代に、『死者は星になる』という言い伝えがあったらしい。あいつも、きつと……」

ティファはアランから目を逸らすと、彼が手向けたばかりの花へと眼をやった。僅かな逡巡の後、その唇を動かす。

「子供騙しだね。……でも、素敵な話」

瞳を閉じ、祈るかのように頭を垂れた彼女は、やがて頭を上げてしっかりとアランを見据えた。

「私、いつか星を見に行くよ。ラムサスが夢見た、本物の星を」

そして、星の海の中からアイツを見つけてみせる。

ティファの誓いに、アランも黙って頷く。

きつと、すぐに見つかる筈だ。彼の星は、一際綺麗に、青く輝いているはずだから。

彼女の瞳が強い光を放っているのは、もはや涙のせいばかりではあるまい。

アランは無言のまま、もう一度強く頷いた。二人は示し合わせたかのように上を見上げ、いなくなってしまった人達のことを想う。

しばし後、どちらからともなく、彼等は連れ立って墓地から歩き去っていった。死者を忘れることは無い。だが、彼等が明日を生きなければならぬこともまた事実なのだ。

\*\*\*

物語は終わった。語り手はもう用済みだ。だが、最後に一つだけ、語られるべきことがあるとするならば。それはきつと、この物語の「主人公」のことだ。主人公であることに抗いながら、それが

故に主人公となつた、誇り高き青年のことを。

\*\*\*

あれからどれほどの時間が流れただろう。数時間か。数日か。それとも数年か。

ある晩。一匹のイルカが波間を漂う不思議な球体を見つけた。かつて蒼かった球体は、長い間潮風にさらされ、やや変色してしまっている。海流に乗って漂うそれを、好奇心旺盛なイルカは突つついてみた。何度か繰り返しても何も起きず、興味を削がれかけたイルカが最後に強く叩いてみると、聞いたことも無い不自然な音を立てて球体に切れ目が走る。驚くイルカの前で、球体は半分に割れ、中から見たことも無い生き物が顔を出す。

しばし傍に寄り添つて、イルカは自らの認識を改めた。これは「生き物」ではない。もう、生きていない。それがかつて地上を制圧し、多くの生き物を我が物顔で支配した動物の成れの果てであることを、まだ若いイルカは知らなかった。

ラムサス・ヴィンセント・コーンフィールドであつた肉体は、今やあらゆる束縛から解放されていた。物言わぬ身体は、身体の前に真っ直ぐ手を突き出している。イルカが再度加えた衝撃で、その身体は後ろ向きに倒れこんだ。

その両腕は、まるで星を包み込もうとするかのように空へと向けられた。光を失つた瞳に、空を埋め尽くした星々の輝きが映り込む。星を目指し、海ステラ・マリスの星となつた男は、星の海に抱かれて安らかな表情を浮かべていた。

( F I N )

## エピソード（後書き）

以上で『ステラ・マリス』完結となります。

完全な蛇足かも知れないのですが、気が向いたらキャラクター設定なんぞあとがきのにまとめてみようかと思えます。もし宜しければお付き合い下さいませ。



## 脚本家のひとりごと

というわけで、『ステラ・マリス』完結となります。

ここまで読んでいただいた皆様、誠にありがとうございました。

以降、創作秘話の体裁をとった懺悔コーナーです。ご興味のあるという奇特な方、ぜひお付き合い下さいませ。

なお、重度のネタバレですので、本編を未読の方はUターンを推奨します。

ではでは。

舞台装置と主軸の設定について

考えた順番、ということではここから。

作者はロボットが非常に好きです。現実的なロボットも好きですし、空想科学読本の考察対象になってしまつようなロボットも好きです。というわけで、ロボットがドンパチ闘つ作品を書いてみたくなりました。

宇宙はガンダムやマクロスでもうどうしようもないぐらいやられてるので、じゃあ海底に行ってみようか、という安直。

そんなわけで『機甲兵<sup>ドルフィン</sup>』が生まれ、ドンパチするための理由として海底国家群とフェルマントが生まれ。

また、何となく戦記モノで将官にはかり焦点が当たるのが釈然としなかったため、とことん一兵卒にスポットを当てた作品にしよう、というテーマが入りました。

さらに、友人同士がイデオロギーやのっぴきならない事情のために対立する構図って燃えるよね、ということ、「裏切り」をメインテーマに。結局、アランが良い子過ぎてあまり機能しなかった気も。

キャラクターとストーリー

アラン・クーリッジ

主人公（？）

初期案では完全に主人公でしたが、ラムサスがあんなことになったので、主人公の友人・兼・メインの視点キャラに格下げ。

性格はラムサスとの対比のためです。優等生全開。

途中、「ラムサスが裏切り者と思わせておいて、実は主人公っぽかったアランが主犯でした！」的なオチを考えたこともあったのですが、この性格じゃやらんだらうということと却下に。リリーの件でラムサス以上に精神的に傷を負っていたという設定だったので……、まあティファと宜しくやってくれ。

ラムサス・V・コーンフィールド

よくある「女つたらしの友人」の筈が、何故かこんなことに……。裏切ったフリして裏切つて無い、というのは構想の初期段階からありましたが、その最期は二転三転。

プラン1：実は連邦の新型兵器を盗み出すためだった！

プラン2：実は本当の裏切り者（アラン）をおびき出す罠だった！

プラン3：地上（作者）に反旗を翻す！

まあ、結果としてプラン3になりました。

エピソードでこいつがお空のお星様になっってしまうことは確定（タイトル的な理由で）だったので、作者にとってはいかにこいつを殺すかという戦いでもありました。しかも、アランに手を下させず……。エピソードで殺害者と元恋人が和やかに会話してるような殺伐とした空気は要らない！

新型兵器と一緒にあぼーん、という展開もあり得ましたが、この男、お国のために特攻して死ぬタイプじゃねえよなあ……。というわけ、何故かモブ上等だったカリューシヤス氏が出張る事態に。

ティファ・ブライク

ヒロイン……？ きつとヒロイン。

ラムサスという婚約者がありながらアランに未練タラタラな雰囲気だったりするのは、作者に男女の機微が書けないせいです。

実は、ラムサスの婚約者として民間人のカレンというキャラクター（清楚おしとやか系）を別に用意しており、エンディングにもこの方が出張ってくる予定でした。「あれ、この話、本国のキャラ出てくるタイミングねえ」と気付いたため、アランに思いを寄せる同僚としてデザインしていたティファと融合。今更ながら、結構無茶があった気もします。エンディングのティファがちょっと別人だったりするのはそのせい。

銀英伝のカリンに範を取ったキャラクターだったのですが、あんまり可愛くならなかったのが反省。性格設定をミスったか……？

カリューシヤス・イワブチ

出世株？

当初は「部隊メンバーその1」という扱いで、アランがなかなか疑わないラムサスにいろいろねちっこく絡むだけの役割でした。しかし、他の登場予定キャラクターが尽くリストラされていく中で何故か生き延び、最期には主人公の命を奪うという大活躍（謎）。

「実はほのかに思いを寄せていたティファを庇って死亡」という改心ルートもあり、オヤジさんの孫設定になったのはそのためだったりもしますが（「分かったよ！ 爺ちゃん！」的な）、結局フラグが立たなかったようです。

リチャード・カールゼン

かっこいいおっさんが欲しいぞ、ということを出てきたキャラ。

ウォルフが出張ってきた関係で、予定より真面目系等に偏りましたが。

アランやラムサスを色々と諭したりなど大人な対応をしてくれる予定だったのですが、ウォルフに持ってかれた気が。

戦闘スタイルはマクロスFのお兄ちゃんを参照のコト。

ウォルフガング・ペーターゼン

アランとラムサスがドンパチやりそうになかったので、元友人でドンパチやらせるために誕生したキャラ。

カールゼンが「真面目系おっさん」だとすれば、ウォルフは「ちよい悪親父」。あまりうまく書き分けられなかった気も。

かつこよさげなシチュとか尽く自分のものにした、作中きつての便利キャラクター。

こいつが画面に出ると妙に筆が進むのは何故？

最期は機甲兵でやるか生身でやるか迷いましたが、死体を見下ろして「的つみなシチュをやりたかったので「殴り合い海底」してもらいました。

エレーナ・ロドクリフ

「かつこいいお姉さん」として造形したキャラクター。暗躍する予定は別になかったのですが、「そーいやこの人結構無茶言ってるよなあ」と気付いたので裏方キャラにシフト。ラムサスと組んでもらいました。

裏方女性キャラとしては、妖艶な感じの情報部キャラを用意しており、ティファと婚約したラムサスに対して「でも、彼を死に追い遣る、最期を看取るのは私」として悦に入る、というシーンがありました。結局、キャラのリストラに伴い、エレーナさんに一部代替していた形になります。

このお姉さんにも色々と裏がありそうだよなあ。作者にもよくわからない人です。

オヤジさん

パトレイバー。作者にとって、メカニックの原風景です。  
作中では何故か「大昔の」ネタが頻出ですが、全部この方の薫陶  
ということのひとつ。

その他

イワブチ兄……FF12オープニングの衝撃、的な。最初に戦闘  
があった方が良さそうだったので、じゃあここでカリューシヤスの  
身内を殺しておこう、という。和名で主人公っぽく見せたと思っ  
たら速攻でさようなら。合掌。

艦隊長 ……戦況を見せるために一兵卒だけだと厳しかったの  
で、上層部を登場。モチーフは、フルメタのテッサを引っ繰り返し  
た感じ。

以上、どちらかというと自分のための覚え書きといった体裁では  
ありますが、『ステラ・マリス』の舞台裏でした。

カーテンコールは要らない、とラムサス氏から申し渡しが来てお  
りますのでこのまま幕を閉じさせていただきます。

ここまでお付き合いした皆様方に、改めての感謝を。  
それでは、またお会いできますことを願いつつ。

霧友 亮

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4461w/>

---

ステラ・マリス

2011年10月3日03時26分発行